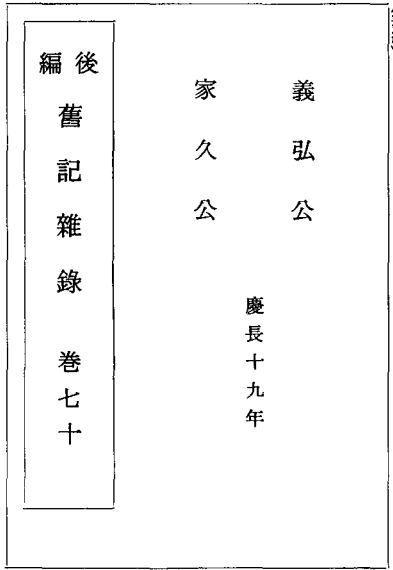


(表紙)



1076 「右馬頭忠興譜中」

慶長十九年甲寅、將軍家經營 武城、忠興奉 高命築石垣、

1077 「御文庫廿三番箱十七卷中家久公御案文」「御譜中ニ在リ」

新年之慶賀珍重ニ候、仍其地へ長々逗留一段辛勞之儀共候、然者其方替之儀、今度兵部少輔於其許承合様子可申下越間、其注進次第可申付覚悟候、大儀候へ共今少可被相詰事肝心候、將又度々如申越候、諸事無緩校量尤候、猶詳期後音不祥候、

〔朱力キ〕慶長十九年正月二日

北郷讚岐守殿

1078 「全上」

江戸妹之所へ年始之使遣したく、此者差越候間、乍次用一翰候、度々田舎者迄召置心遣存候間、如申入候遠方之儀ニ候へ共、可被添御心事所仰候、猶委曲者期後音候、恐惶、

〔朱力キ〕慶長十九年正月二日

山口殿

「家久公御譜中ニ在リ」

1079 「御文庫廿三番箱十七卷中家久公御案文」「御譜中ニ在リ」

於其地妹輒下着、致満足候、路次中之儀も、別而精を入候由、神妙之儀共候、弥諸事無緩様校量肝心候、女房共へも辛勞之通相心得候へく候、

〔朱力キ〕慶長十九年

上床藤右衛門入道殿

曾木五兵衛尉殿

上井次郎左衛門尉殿

蒲地備中守殿

1080 「家久公御譜中」  
「正文在文庫」

從琉球至于大明、差遣使節處、少々先船令歸朝、彼使者者相通北京、當夏之時分可爲着岸之旨、様子聞届候、遠路入念申越之段、令祝着候、就中花砂糖百斤桶二・白砂糖百斤桶二・燒酒之壺二ヶ到來、喜覚候、猶本多佐渡守可申候也、謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十九年〕正月六日 (花押) 〔秀忠也〕

薩广少將殿

1081 「御文庫廿三番箱十七卷中家久公」  
「御譜中ニ在リ」

羽柴左衛門大夫殿于今其許へ被成御逗留候哉、以書狀可申入候へ共、題目無之候間無其儀候、妹之事田舎者迄付置別而心遣候間、諸事不被差置、可被加御指南由、切々得御意候而肝心候、將又琉球漬物一壺送進申候、遠路之儀候間、わろく成儀可有之条、致持參取次衆之前ニ而試、能候者差出候而可然候、爲其一書如此候、謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十九年〕正月八日

町田少兵衛尉殿

1082 「御文庫三番箱中」  
「家久公御譜中ニ在リ」

爲音信、蜜柑二箱到來、遠路入念候段、悦思食候、委曲本多佐渡守可申候、謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十九年〕正月十一日 (花押) 〔秀忠也〕

薩广少將殿

1083 「御文庫三番箱中」  
「家久公御譜中ニ在リ」

爲音信沈香式十斤・生絲拾丸・緋綾子十端濟々到來、欣然此事候、猶本多佐渡守述候也、

〔朱カキ〕  
〔慶長十九年〕正月十三日 (花押) 〔秀忠也〕

薩摩少將殿

1084 家久公二女家臣北郷山城翁久室

慶長十九年甲寅二月三日誕生、母鎌田政重女、寛永九年壬申三月五日早世、年十九、

1085 慶長十九年御日記之内

正月三日丙辰晴

一高野傳兵衛尉・佐良々彦兵衛尉・小嶋三左衛門尉年頭之爲御礼參上被申候、

正月七日庚申晴

一本田伊賀守此間廿六人略ス、

佐良良善介下十四人略ス、

右之衆年頭之爲御礼被參候、御酒被給候、

二月廿二日乙巳晴

一鹿兒嶋方御使佐良々善介被參候、御意趣直ニ被聞召候、

御使ニ御振舞有、

一山口駿河守殿方御書田畑全兵衛下向ニ參候、但かこし

まより御使佐良々善介持參候、

『御日記抜書』

1086

慶長十九年

正月三日丙辰晴

一新納次郎四郎年頭之爲御礼被參候、

進上 御酒樽老荷・鴨式ヶ御通被給候、

『正月六日己未曇』

一喜入攝津守殿方年頭之爲御礼使者田代源藏被參候、御

酒被給候、』

『正月七日庚申晴』

一佐多伯耆年頭之爲御禮被參候、進上御樽老荷并目籠、

吸物ニテ御酒御寄合、

一川上上野入道殿年頭之爲御礼被參候、進上御酒一荷并

目籠、吸物ニテ御寄合、』

『正月八日辛酉晴』

一星山弥右衛門尉子仲次与名被申候、爲御祝儀瓶酒一對

進上申候、

一南原助左衛門尉名被下候、爲御祝儀御酒錫一ツ進上被

申候、』

正月十日亥晴

一馬越衆貴嶋老岐守・有村隼人佑・宮原主税助年頭之爲

御礼參上候、

正月十九日壬申晴

一かこしま惟新様東郷長門守所江申請、御茶進上候、御供三原諸

右衛門尉殿・國分但馬守、

『正月廿五日戌寅晴』

一土持左馬權頭年頭之爲御礼參上、御通被給候、』

『二月七日庚寅晴』

一松浦肥前守殿方年頭之爲御祝儀、使者新敷源介進物之

夏、

一御太刀一腰 御馬一疋 一書狀一通 諸白樽一荷

一臺二ツ 昆布 小蛸 魚

右使者方鳥目百疋進上候、即御寄合アリ、御座ニ喜入

攝津守殿・澁谷石見守殿・了齋被參候、

一奥州様御繁昌爲御祝、伊地知縫殿助被參候、御酒被給

候、』

『三月廿一日癸酉

一惟新様御腰物之かね被成御焼セニ付、爲御覽氏貞所へ

御出也、』

『四月十三日乙未晴

一上方書物屋之源三郎爲御礼被參候、進上泰平記一部并

注在之、』

『四月廿八日庚戌晴

一惟新様御氣色卒度悪敷様ニ御座候ニ付而、爲御見廻被

上候衆、比志嶋紀伊介殿・野州・中書・攝州、』

四月卅日壬曇

一新納次郎四郎參上候、但沢原野御馬追見廻被仰候由被

申上候、

六月朔日壬午雨

一江戸江爲御使者、市成藏人被參候付御進物之事、

一緋綾子拾端 沈香十斤

大御所様江御進上

〔此間敷条略ス〕

一御書一通

上井次郎左衛門尉

蒲池備中守へ

一御書一通并御手本二ツ

新納次郎九郎へ

一御書一通 肩衝二ツ

一茶壺杓ツ 水さし一ツ

一茶碗二ツ 但万介焼一ツ

仲次焼一ツ

右者 松平河内守殿へ被遣候、

右、御使之刻方々御音信物之事、

一御文并御音信物箱二ツ但大小

右ハ、國府御かミ様ヨリ御料人様へ被遣候、

一御文一ツ、豊後守殿御囊様方御料人様へ被成御遣候、

一御文一ツ、豊後守殿御内儀方御料人様へ被遣候、

已上

『六月十日辛卯晴』

一正源院へ御狀并葉茶壺一ツ、仲次焼被遣候、

一喜入攝津守ヨリ使被上候、様子ハ壁ぬり御遣被成候、

御礼被申上候、』

『六月廿二日癸卯晴』

一喜入攝津守殿父子參被成候、進上物之事、

一瓶酒二對并食籠

一爪窪一ツ

右、父子へ御酒御寄合并御振舞有、相伴了齋、』

(『』ハ行間朱書ナリ)

1087

「御文庫三番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

爲改年之祝儀、太刀一腰・馬一疋并段子拾卷到來、遠路

懇志之至令祝着候、猶片桐市正可申候、謹言、

「米カキ」  
「慶長十九年」二月廿一日 (秀頼) (墨印)

薩摩少將殿

1088

『川上氏藏』

予自少之時以騎馬爲業、未嘗一日不勤之矣、往歲隨荒木

安志公、学此業者五六年矣、後就于其子十左衛門尉元滿、

傳此數卷、今也久幹隨予学焉、頗解縱騁之理、欲予之授

之以此書其求不淺、於是嘉其志之有成以授与焉、自今以

往日就月將馴致其業誓勿怠可也、

右乘馬之叟條々多之、就中手内引緩々而後之拘比第一候、

能々無稽古而難成叟候、朝暮練磨可爲肝要者也、

慶長十九年三月八日

鳴津兵庫頭入道

惟新花押

川上喜左衛門尉殿

1089

「本田氏文書」

七分出銀請取

一銀子四拾三匁貳分ハ、右之外九匁一分ニリ七毛八ホツ

未進、

慶長十八ノ

十二月廿日

眞如坊(花押)

藥師寺内藏丞(花押)

伊地知丹波守(花押)

脇本少次郎殿

1090

七分出銀請取之事

一銀子九匁壹分ニリ七毛八弗ハ

高七拾四石七斗五舛四分皆濟  
右之外三石殿役分ニ引

慶長十九三月十一日

眞如坊(花押)

曾木弥兵衛(花押)

伊地知丹波守(花押)

脇本少次郎殿

1091 「御文庫」番箱義弘公五卷中」

尚以爰元珍敷□□御座候者、拙者爰元□□内者、  
追々可得御意候、已上、

伊勢兵部少輔御殿にて被罷戻候間、令啓上候、拙者式事  
去月十一日駿府參着中、翌日十二日 御目見え仕、御懇  
之被加 御錠候、同廿二日 將軍様御目見え仕、是又御  
懇之 御錠ニ候、御前爰元之隙明申候てより、陸奥守殿  
御屋敷へ御見廻申候、被召出御懇にて御酒共被下候、何  
も御有付之鉢ニ御座候間、御心安可被思召候、爰元御普  
請其外之様子、兵部少輔被見及承□□通申含候条、具ニ可  
被得御意候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「慶長十九年款」

三月十九日

寺志广(廣高カ)



惟新様  
人々御中

1092 「在文庫」

薩隅諸縣郡高究

京竿

惣高六拾壹萬石

俵付

惣合百七拾壹万二千拾七俵

内 百七拾万八千俵

残リ 四千拾七俵

京竿之高ニテ 余分 千四百三拾五石分

已上

慶長十九年三月廿二日

已上

「此正文、御文庫拾七番箱十八卷中ニアリ、礼合濟、家久公御譜中ニ

在リ」

1093 「三番箱中」

爲年甫佳兆、太刀一腰・馬代黄金式拾兩并緋鈍子十卷到  
來、悦覚候、猶本多佐渡守可申候、謹言、

「朱カキ」  
「慶長十九年」四月廿五日 (花押)

薩摩少將とのへ

「家久公御譜中ニ在リ」

「古御文書中」 「家久公御譜中ニ在リ」

尚以旧冬面拜ニ奉得尊意を候儀ニ今難忘、乍恐御踐  
多さ書中ニ匣申上候、何そ面拜ニ積候事共可奉得貴  
意候間不具候、以上、

追而不物ニ御座候へ共、らつこのくらはゝいぢツ。  
同馬せん大小ニ進上、餘見事ニ候、以上、

當春之爲御祝儀与、御太刀一腰・御馬代金子式枚并段子  
式十卷進上被成候趣、披露仕候処ニ、遠路被爲入御念候  
段悦被思召、御内書被進候、就中御口上之通是又申上  
候處ニ、如何ニも御機嫌能尤之由 御誕ニ候、隨而拙者  
へ御太刀一腰・御馬一疋・段子拾卷・唐之盆十枚送被下  
候、遠路御心付之段書中ニ難申謝候、委曲爰元之様躰御  
使者可被仰上候条、奉省略候、恐惶講言、

「朱力キ」  
「慶長十九年」  
卯月廿五日 本多佐渡守  
正信(花押)

鳴津陸奥守様  
御報

覚

一 三司官衆以番賦那覇へ被相詰、上下船改之儀、諸事入  
念可被仰付事、付下着船之人衆宿之儀、那覇役人切手  
を以被相定候而可然候事、

一 質人之替衆、如御賦兼日無油断可被定置事、  
一 諸口事篇能く被入念、以穿繫之上可暖被事、

一 御藏入収納方毎年拾弍月限に可致皆濟様ニ可被仰渡候、  
自然不相調候へ、代官曲事之通可被仰付事、付日本  
へ仕上物、其外地下之御遣方等之究節く被聞せ、可有  
沙汰事、

一 御藏米請取・拂方之様子如被定候、向後無緩様ニ諸役  
人へ可被仰渡事、

一 那覇之津致衰微たる躰候間、以來有付候様ニ御分別肝  
要候事、

一 今鬼神わん兩湊へ然く役人被召置、萬可被入念事、  
右条く以御談合、堅可被仰調事候條、

以上

慶長拾九年卯月廿八日

(成禮)  
鎌田左京亮(花押)  
(川上意通)  
河上又左衛門尉(花押)

「右在日附之通」  
三司官參

「正文在琉球國國司」 「家久公御譜中ニ在リ」

1096 慶長十九年甲寅

五月日、岩元孫兵衛島津下總守常久臣にて殉死下同、木下藤吉左衛門上、

1097 「家久公御譜中」

仲夏之初家久改替花押、如左、

1098 「正文在島津筑後忠置」

猶々判形相替候条、是又可被見置候、

自是可申通与存候處、幸使者被差越祝着之至候、仍煩出合候哉、涯分可被加養生事肝要候、何共用所共在之事候間、重而從鹿兒嶋可申越候、然者無然々候へ共、馬進候處、遮而御礼之由、慇懃之儀候、恐々謹言、

「朱力キ」  
「慶長十九年」五月七日

家久(花押)

北郷讚岐守殿

1099 「古御文書卷廿二ノ内」 「家久公御譜中ニ在リ」

尊書御使者、殊爲御音信帷子十之内單物五并赤貝漬物四桶被懸御意、忝奉存候、就中御使者御口上之通被入御念、過分存候、用所於御座候者、自是可申上候、次唐船之儀被仰下候、着岸之時分者、何様にも唐人次第可被仰付候、

將亦江戸・駿河相替儀無御座、兩御所様一段御息災被

成御座候間、是又可御心安候、猶追而可申上候間、貴報不能具候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
「慶長十九年」

五月十七日

長谷川左兵衛

藤□(花押)

羽柴陸奥守様

貴報

1100 「下總守常久譜中」

慶長十九年甲寅五月廿九日、卒於麿島上山城、惱痘疹病云云、享年廿八、法號天澤芳春菴主、號天澤寺、家臣瀬口兵右衛門・岩本孫兵衛・木下藤吉左衛門追跡殉死矣、

1101 「華林寺文書」

覺

嶋津兵庫入道

沙弥惟新御判

一雖不及申候、神前之勤行等不可有緩疎候事、  
一一山之衆徒并社人之賤、不可改旧規候、雖然近年之諸式被糺善惡、除惡可被守善事、  
一寺領之役儀ニ付、聊不可有難澁事、



一自先年之御法度雖不新候、或重罪之者、或走者等被抱置儀堅可有停止事、

一霧嶋之儀者諸方之人集候間、世上之取沙汰被入念、子細儀於被聞付者、依事以内意可被遂披露事、

一神物徒ニ不成様 社頭之再興、寺中修理等用ニ可被立候事、

一宮廻之掃除可被入念候事、付せたを霧嶋領之分路作、無油断可被仰付候事、

右霧嶋山座主職看房ニ付、我等存寄儀共於有之者、被聞召度由承候間、任無御隔心愚意之通書付進入候、  
慶長十九年六月八日

霧嶋  
座主御房

1102

「家久公御譜中」

有敷根仲兵衛頼兼者、固勇敢之士也、奉仕惟新及家久而頗有武功、故受恩祿亦若于也、不知何故乎、後懷不臣之心、是以遂蒙殺戮之罰、嗚呼天理可恐、凡爲人臣者可不慎乎哉矣、

態啓上候云々、

1103

「御譜抄」

家臣之中有敷根仲兵衛者、天性勇敢、事君者亦勤焉、然而有凶赦罪、雖欲宥之不能、是以將誅之於鹿兒島、則爲神事障、仍陸奥守家久欺之補山口地頭職、俾渠明日赴其地、於福山決斬戮云爾、其書記左、

1104

「正文在文庫」

猶以成敗之儀、福山にて可有之ニ相定申候、以上、態啓上候、内々奉得御意候科人之儀、流罪か死罪かの兩条、死罪ニ相究申候、然者山之口之地頭申付候、彼地爲見廻明日罷越候間、於中途成敗有之事候、爲御心得申上候、誠惶敬白、

「慶長十九年也」

六月廿七日

陸奥守

家久(花押)

進上  
惟新様

「仲兵衛頼兼慶長十九年甲寅六月廿八日死去、年五十八、法名流岩善

東居士ト敷根氏系圖ニアリ、元和二年ニ作ルハ非ナルヘシ、

一此正文ハ御文庫四拾八番箱中ニ有之」

「家久公御譜中ニ在リ」

1105

〔菱刈郡里村長谷川氏藏〕

知行目録

薩州大口

高參石五斗

浮免

右之地、應此中公役之高被宛行者也、

慶長十九年六月廿七日

比志嶋紀伊守判

三原諸右衛門判

伊勢兵部少輔判

長谷川刑部左衛門殿

井之上喜左衛門尉殿

1107

知行目録

薩州大口里村之内

高式石七斗

浮免

右之地、應此中公役之高被宛行者也、

慶長十九年六月廿七日

比志嶋紀伊守印

伊勢兵部少輔印

三原諸右衛門尉印

後藤善介殿

1106

『大口土文書』

知行目録

薩州大口里名之内

高五斛五舛七合壹夕

浮免

右之地、應此中公役之高被宛行者也、

慶長拾九年六月廿七日

比志嶋紀伊守印

三原諸右衛門尉印

伊勢兵部少輔印

1108

知行目録

薩州大口牛尾村之内

高拾一石七斗九合三夕三才

田中屋殿

同家原村之内

高五石五斗五升三夕三才

浮免

合拾七石二斗

右之地、應此中公役之高被宛行者也、

慶長拾九年

六月廿七日

宮里越中守殿

三原諸右衛門尉

比志嶋紀伊守

伊勢兵部少輔

1111 知行目錄

高壱万三千六百六十石八斗式升

此内

五百六十九石式斗六升

五百三十三石四斗四升六合六夕

千貳百四十四石七斗八升壹合

貳百拾三石六斗四升六合八夕

八百六十八石八斗六升壹合七夕

七百四十六石四斗一升九合

八百九十四石三斗八升二合六夕

千六百卅石式斗三升一合二夕

山崎村

邪答院之内

門屋敷七ツ

同所

湯田村

門屋敷卅三

同所

舟木村

門屋敷廿八

宮城

屋地村

門屋敷三ツ

邪答院

虎居村

門屋敷十八

同所

平川村

門屋敷廿五

同所

紫尾村

門屋敷四十七

邪答院之内

柏原村

同五十

1109 『全』

知行目錄

高五斛

右之地、應此中公役之高被宛行者也、

慶長拾九年

六月廿七日

松坂但馬守殿

伊勢兵部少輔

三原諸右衛門尉

比志嶋紀伊守

1110 「下野守久元譜中」

慶長十九年有領地之目錄曰、

百八十石式斗一升壹合六夕

東郷

白濱村

1112 「家久公御譜中」

同所

七百九十八石三斗九升四夕

白川村

「正文在文庫」

千五百八十八石二斗四升五合六夕

門屋敷十四

求名村

今度御能付、宮原主計助被召寄候間、則申付今日祇候仕

候、然者彼者事多年一和へ笛之儀致稽古、其驗在之事候、

其付主計助連々申上候へ、別一途御用ニ罷立儀も無御座

候間、弥笛致執心御奉公仕度旨内々申事候、旁可然存候

間、一和へ其段被仰付、相傳候分聊不殘指南被仕候様ニ、

卒度被加御意尤存候、猶巨細者其身可申上候、恐々謹言、

千六百六十六石七斗二升九合五夕

門屋敷三十

花木村

庄内山ノ口

九百六十式石九斗六升二合

小林之内

北之東方村

七月八日

御使

宮原主計助

四百三拾壹石八舛

禰答院

時吉村

陸奥守殿

參

三百壹石四斗三合五夕

伊集院

清藤村之内

1113 『在伊集院氏』

知行目錄

千三拾壹石一斗二升八合五夕

庄内

栴山村之内

薩州伊作中里村之内

合壹万三千六百六十石八斗式升

高五拾壹石七斗五合

名原門

慶長十九年六月晦日

川上式部太輔

久好印判

高八石九斗式舛五合

中原村之内

顚娃長左衛門

久政

合六拾石

小原門

下野守殿

右之地應此中公役之高被宛行者也、

慶長十九年  
七月十三日

比志嶋紀伊守   (印)

伊勢兵部少輔   (印)

三原諸右衛門尉   (印)

町田勝兵衛尉

伊集院助七殿

「本書、御記錄所御用有之、戊六月九日差出候由也」

1114 「家久公御譜中」

山口駿河守直友奉 鈞命、爲攘耶蘇徒、五月二十一日發  
伏見、頃日來肥前國長崎改耶蘇、故直友投書來、自茲亦  
預遣三原諸右衛門重種、勞跋涉困苦、因今家久報直友翰  
中及其事矣、

1115 「喜人忠續譜中」

慶長十九年甲寅、爲長崎有馬鬼利師且宗旨退治、山口勘  
兵衛殿下向彼地、丁此之時領數多士卒往其地、隨山口殿  
下知也、

1116 「御文庫廿三番箱十七卷中家久公御案文」「御譜中ニ在リ」

其地迄就御下着、早々御使畏入候、從是も爲可申入、五  
六日以前三原諸右衛門尉進候、漸可罷着候、先々有馬表  
當時靜御座候哉、得其意候、内々如被仰越候、人數之儀  
何時も御注進次第可申付候、委曲御使ニ申達候間、書中  
不具候、恐惶、

「朱カキ」  
慶長十九年七月十五日

山口駿河守殿

御報

1117 「御文庫三番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

爲音信、帷子式百之内單物百如目錄到來、遠路入念之段  
悦覚候、委曲本多佐渡守可申候也、

「朱カキ」  
慶長十九年七月十七日 (秀忠) (花押)

薩厂少將殿

1118 『肝付氏文書』

知行目錄

薩州入來院浦名内

高三拾石

下大根田門

高廿八石二斗二升三合

同

平ノ門

右之知行、應此中公役之高被宛行者也、

慶長十九年七月廿三日

伊勢兵部少輔

貞昌印

三原諸右衛門尉

重種印

比志嶋紀伊守

國貞印

町田勝兵衛尉

久幸

肝付蓮光坊

1119

『財部神社由緒』

知行目錄

隅州曾於郡財部北俣名之内

高廿一石

浮免

右知行、日光神爲神領被成寄附早、全有領知而、向後

御神事公役無緩可被相勤者也、

慶長十九年

七月廿三日

伊勢兵部少輔

貞昌判

三原諸右衛門尉

重種判

1120

『在串良兩諏方大明神』

隅州肝付串良岡崎村之内

高弐石三斗四升弐合

浮免

右之知行、上之諏方爲神領被成寄附早、全有領知而向

後御神事公役無緩可被相勤者也、

慶長十九年

七月廿三日

三原諸右衛門尉判

伊勢兵部少輔判

比志嶋紀伊守判

町田少兵衛尉

上之御諏方領

1121 『全』

隅州肝付串良岡崎村之内

高壹石五斗四升

浮免

右者、知行下之諏方爲神領被成寄附早、全有領知而向

比志嶋紀伊守  
國貞判

町田勝兵衛  
久幸

日光神

後御神事公役無緩可被相勤者也、

慶長十九年

七月廿三日

三原諸右衛門尉判

伊勢兵部少輔判

比志嶋紀伊守判

町田少兵衛尉

下之御諏方領

1122 『全』

隅州肝付串良岡崎村之内

高五石

浮免

右之地、應此中公役之高被宛行者也、

慶長十九年

七月廿三日

三原諸右衛門尉判

町田少兵衛尉

伊勢兵部少輔判

比志嶋紀伊守判

社家領

1123 『在高山盛光寺』

知行目録

隅州肝付高山西方村之内

高五石

浮免

右之知行、應此中之高返地被仰付早、全被成領知、向

後公役寺役無緩可被相勤者也、

慶長十九年

七月廿五日

三原諸右衛門尉

重種印

伊勢兵部少輔

貞昌印

比志嶋紀伊守

國貞印

町田勝兵衛尉

久幸

盛光寺

1124 『在高山瑞光寺』

知行目録

隅州肝付高山新留村之内

高式拾石

柳井谷門

内五石分從先年之

右之知行、應此中之高返地被仰付早、全被成領地、向後

公役・寺役無緩可被相勤者也、

慶長十九年

三原諸右衛門尉

『高岡長福寺藏』

光孝寺

比志嶋紀伊守印  
伊勢兵部少輔印  
三原諸右衛門印  
町田勝兵衛印

1127

『高岡稻荷寺藏』

目錄

日州諸縣之郡之内

1125

『高岡光孝寺藏』

高十斛七升七合

日州八代南俣村内

浮免

右知行、應此中高被宛行早、全被爲領知、向後公役并  
寺役無緩可被相勤者也、

慶長九年七月廿一日

比志嶋紀伊守印

七月廿五日

重種印

伊勢兵部少輔  
貞昌印

比志嶋紀伊守  
國貞印

町田少兵衛尉  
久幸

瑞光寺

目錄

日州諸縣郡内山村之内

高五拾斛貳斗

右之地、應此中之高被宛行早、全被爲領知、向後公役  
并寺役無緩疎可被相勤者也、

慶長十九年  
七月廿一日

七月廿一日

比志嶋紀伊守印

伊勢兵部少輔印

三原諸右衛門尉印

町田勝兵衛尉

長福寺

1126の2

『右寺ノ書出シ』

右之通被仰付置候處ニ、元和六庚申年諸外城寺社高三ヶ  
二御減シ候時分、本高之内三ヶ二被召上、當高拾六石被  
付置候、



高式拾壹石五斗

右之地、應此中之高被宛行早、全被爲領知、向後公役并寺役無緩疎可被相勤者也、

慶長十九年

七月廿一日

比志嶋紀伊守印

伊勢兵部少輔印

三原諸右衛門尉印

町田勝兵衛尉

稻荷寺

1128 『高岡法華嶽寺藏』

日州諸縣郡之内

合高式百拾石八斗余

深歲村

右之知行、應此中之高返地被仰付早、全被成領知、向後公役・寺役無緩可被相勤者也、

慶長十九年

七月廿一日

比志嶋紀伊守印

伊勢兵部少輔印

三原諸右衛門印

町田勝兵衛尉

法華嶽寺

1129

『知行目錄

日州諸縣郡之内

深歲村

高式拾四石六斗八升九合

同村佛餉田之門

高四拾三石八斗九合七夕

同門前地分末守之門

高百四拾式石三斗四升五合

合式百拾石八斗四升三合七夕

内 加增八十一石六斗三升三合七夕』

右之知行應此中之高返地被仰付早、全被成領知、向後公役寺役無緩可被相勤者也、

慶長十九年七月廿一日

比志嶋紀伊守印

伊勢兵部少輔印

三原諸右衛門尉印

町田勝兵衛尉

法華嶽寺

1130

『高岡龍福寺藏』

日州諸縣郡内山村

高四拾貳石五斗九升

右之通、應此中之高被宛行早、全被爲領知、向後公役并寺役無緩可被相勤者也、

慶長十九年

七月廿一日

比志嶋紀伊守印

伊勢兵部少輔印

三原諸右衛門印

町田勝兵衛尉

龍福寺

1131

『高岡長福寺藏』

『古名寄写』

合高五十石貳斗

慶長十九年

七月廿一日

高岡

御支配所印

内山村

内山之門

長福寺』

1132

『高岡大日寺藏』

日州諸縣郡内山村之内

高七斛四斗六升九合

右之知行、應此中之高被宛行早、全被爲領知、向後之

公役并寺役等無緩可被相勤者也、

慶長十九年

七月廿一日

比志嶋紀伊守印

三原諸右衛門尉印

町田勝兵衛尉

伊勢兵部少輔印

大日寺

1133

『高岡龍福寺藏』

高四十貳石五斗九升八合

慶長十九年七月廿一日

高岡御支配所印

龍福寺

花見村之内

打手之門

1134

『調所氏文書』

知行目錄

高拾八石壹斗三升

隅州栗野之内木場村

有村屋敷

右之知行、應此中之高被宛行者也、

慶長拾九年  
七月廿三日

町田勝兵衛尉

三原諸右衛門尉印

伊勢兵部少輔印

比志嶋紀伊守

調所主水正殿  
〔榮周〕

目錄

隅州肝付高山西方村之内

高廿六石五斗八升

長野屋敷

右知行、應此中之高返地被仰付早、全被成領地、向後

公役・寺役無緩可被相勤者也、

慶長拾九年七月廿五日

伊勢兵部少輔印

三原諸右衛門尉印

比志嶋紀伊守印

町田少兵衛尉

1135 『在串良稻荷大明神社司』

知行目錄

隅州肝付串良岡崎村之内

高九斗

浮免

右之知行、御稻荷爲神領被成寄附早、全有領知而向後

御神亶公役無緩可被相勤者也、

慶長十九年七月廿三日

三原諸右衛門尉判

伊勢兵部少輔判

比志嶋紀伊守判

町田少兵衛尉

御稻荷領

1137 『全由緒帳之内』

知行目錄

隅州曾於郡財部北俣名之内

高八斗七升九合七夕

浮免

右知行、應此中之高返地被仰付早、全被成領知、向後

公役・社役無緩可被相勤者也、

伊勢兵部少輔印

比志嶋紀伊守印

三原諸右衛門尉印

1136 『在高山昌林寺』

日光神  
正市

町田勝兵衛尉

〔財部日光神社由緒帳之内〕

高廿卷石  
日光神  
名寄帳

隅州曾於郡財部北俣名之内

大宮司  
神左衛門尉

日光神村之内

高式拾卷石  
竹ノ下畦町廿三  
下田一段六畝

大宮司  
浮免  
神左衛門

▽ 同所六町十二  
中田一段二畝四步

同人

竹ノ下畦町廿九  
上田二段一畝十四步

大宮司  
神左衛門

同所町四十一  
下田二段七畝拾步

同人

拾四俵

大坪五畦一畝廿三俵ノ内  
下田

同人

十七俵卷斗四升四合三夕  
合粃六拾二俵二斗四升三合三夕

河成引テ不足有

慶長十九年  
八月二日  
御支配所  
伊集院宮内少輔  
忠昭判

1139  
『全』

高八斗七升九合七夕

名寄目錄  
そな塚せ町十六  
下田六畦拾二步

下財部村之内  
和泉

▽ 千法寺  
下田拾五步  
卷俵卷斗

桜木村之内  
二五

風は(四反四廿六步九斗八升八合之内  
山畑八畦廿八步

弥左衛門

粗七舛  
大豆式斗

合粃大豆二俵卷斗六升八合但京辨

右外ニ河成引ニ付少宛不足有、

△

慶長拾九年  
八月二日  
伊集院宮内少輔  
忠昭判

1140 家久公三女家臣島津彈正久慶室

慶長十九年甲寅八月五日誕生、母家臣相良日向長辰入  
道閑栖女、

慶安元年戊子閏正月九日卒、年三十五、法号桃顔妙仙、

1141 『寫本兒玉氏藏』

知行目録

薩州指宿郡成河村之内

高七十九石六斗六舛六合七夕 登瀬之門

高貳石 同 山川之内

高拾七石貳斗五升三合四夕 同 浮免

高老石貳斗 同 長吉之内

高八石七斗七升三合九夕 同 浮界目之内

合百八石八斗九升四合

右之地、應此中之高返地被仰付早、全被成領地、向後公  
役・寺役無緩可被相勤者也、

慶長十九年八月十六日

三原諸右衛門尉印  
伊勢兵部少輔印

比志島紀伊守印

町田勝兵衛尉印

正龍寺 『姓兒玉氏、爲僧諱利貞、住職於正龍寺、  
稱文岳又号宗爲』

1142 『利貞譜中』

慶長十九年甲寅八月十六日、慈眼公更賜正龍寺田祿於  
掛宿郡之内、乃國老町田勝兵衛尉久幸・比志島紀伊守國  
貞・伊勢兵部少輔貞昌・三原諸右衛門尉重種裁目錄以授  
之、凡百八斛八斗九升四合、

1143 『曾於郡念佛寺ニアリ』

隅州曾於郡重久村之内

一高三拾石 入水門

一同七拾石 右同村之内 浮免

合百石

慶長十九年八月五日

比志嶋紀伊守  
國貞判

「廿三番箱十七卷中」

1144 「曾於郡止上神社ニアリ」  
 隅州曾於郡重久村之内  
 高三拾壹石貳斗五升五合浮免  
 右之知行、止上爲神領被成寄附早、全有領地、向後御神  
 叟軍役無緩可被相勤者也、  
 慶長十九年八月五日

伊勢兵部少輔 貞昌判  
 三原諸右衛門尉 重種判  
町田敷  
 伊集院勝兵衛尉 久幸判

伊勢兵部少輔 貞昌判  
 三原諸右衛門尉 重種判  
 比志嶋紀伊守 國貞判  
 町田勝兵衛尉 久幸

「全上」

「家久公御譜中ニ在リ」

御歸宅之由候間、以使札申候、扱々此中者長々縣表へ御  
 逗留、御辛勞之段難申盡候、乍去諸事無御越度被仰調、  
 無事ニ御歸國目出候、於眞幸表振舞之儀共申付、使を差  
 越候処、はや御通跡ニ罷成殘多存候、何様重而期面謁不  
 能祥候、恐々、  
朱カキ  
慶長十九年八月四日

相良左兵衛佐殿

「御文庫廿三番箱十七卷中 家久公御案文」  
 御入部之由承付候間、用使札候、此中以 上意、稻葉彦  
 六殿・相良左兵衛佐殿其地へ被有之、諸事入念被仰置候  
 間、定無吳儀可爲御有付候、仍御太刀一腰・馬一疋銀子拾枚  
 進入候、誠補御祝義計候、猶使者含口上候、不能祥候、  
 恐々、  
朱カキ  
慶長十九年八月四日  
 有馬左衛門佐殿  
 「家久公御譜中ニ在リ」

其後者御見廻不申候間、其許之様子爲可承此者申付候、宗躰御改之儀如何相濟申候哉、遠路故切、御左右不承、

無心元存計候、將又 大御所様、今月必可被成御上洛由到來申候、其許何程相聞得候哉、被仰知度候、巨細者相

含口上候間、令省略候、恐惶、

〔朱力字〕  
〔慶長十九年〕八月五日

山口駿河守殿

人々御中

〔家久公御譜中ニ在リ〕

1148

〔古御文書廿二卷中〕 〔家久公御譜中ニ在リ〕

以上

此表爲御見廻預御使札、忝存候、爰元相替儀無之候、先以可被心安候、粗如申入、御人數など入儀御座候者、則注進可申候条、其節者無御由断御出勢尤ニ存候、昨日も被入御念御使札御内意候ノ通、長谷左兵方へも具申候、又今日長谷川忠兵衛・茶屋四郎二郎被罷登候、御念入之通本上州へ委申上候、可御心安候、爰元之様子内藏助方へ申渡候、將又我等上國之砌參上申候様ニと被仰越候、我等も左様之内存ニ御座候へ共、公儀難計候間、御報ニ

不申入候、併今少逗留可在之躰候間、其内切、可得貴意候、猶奉期後音之節候、恐惶謹言、

〔朱力字〕  
〔慶長十九年〕

八月八日

山口駿河守

直友(花押)

奥州様

參貴報

1149

〔正文在飯野士井尻神力坊〕

知行目錄

日州飯野名之内

原田村 襄原之門

高七拾八石式斗二舛五合

同村 小蘭屋敷

高九石九升五合

加久藤西郷川北村之内

高四石ハ

浮免

合九拾壹石三斗一舛九合三才

右之地、應此中公役之高被宛行者也、

慶長拾九年

八月九日

三原諸右衛門尉

〔印〕

伊勢兵部少輔

比志嶋紀伊守

豊前坊

町田勝兵衛尉

1150 「家久公御譜中」  
「正文在文庫」

昨日者被相越遂閑談、本望存候、仍昨日凡如申候、夫錢之儀忽別他所へ無之沙汰之由、風聞申候、承候分者何事も飯米さへ相渡候へハ、其分ニ而相調候由申候、實所者不存候、然處ニ知行之不寄高下、一月ニ爲夫錢銀子六匁充相渡候由承候、定而無親疎御談合ニ而候ハハ間、今更不及改易候、乍去若紀州も談合之究儀無存躰候者、早竟御國之衰微ニ而候条、御爲不可然儀歎与存事候、昨日紀州へ様子密々談合候へと申候間、如何承度存用一書候、自然紀州も同心ニ而候者、陸奥守殿へ以内證、貴所可有言上候、いつもの人にくまれながら御爲候条如此候、巨細返札ニ可得責意候、恐々謹言、

猶々乍重言、右之段紀州も貴所も於納得者、近比人にくまれにて候へ共御爲候間、様子可有言上候、若又申上にくき仕合共御座候ハ、此書狀被差出我等申分にて可被申上候、

「米カキ」  
「慶長十九年」八月十日

伊勢兵部少輔殿

1151 『岩下佐次右衛門家藏』

隅州始羅郡帖佐平松村

高廿石一斗五升壹合九夕

狩川屋敷

高二石二斗七升六合二夕

同餅田村之内  
浮免

高五石五斗

同桑原之郡水流丸村  
右同

合式拾九石七斗七升四合三夕式才

右之知行、應此中軍役之高被宛行者也、

慶長十九年八月十日

三原諸右衛門尉印

比志嶋紀伊守印

伊勢兵部少輔印

町田勝兵衛尉

岩下与兵衛殿

1152 『慶長十九年御日記之内』

八月七日丁亥晴

惟新様御言傳之条々



一長崎立ニ付 奥州様川内まで御越、御太儀ニ思召候事、

一村尾源左衛門尉入道被參候、但長崎立被仰付、來十二日ニ打立申由被申上候、

八月八日戊子晴

一新納次郎四郎被參候、明日長崎へ罷立由被申上候、

一下野守殿方使、様子ハ明日長崎へ罷立之由被申上候、

八月九日己丑晴

一長崎立之人數盛相替殘衆在之ニ付、以鬪取立衆相定候也、

『八月十一日辛卯晴

一奥州様へ御茶被進候、御座 御兩殿様・豊後守殿・喜

入攝津守・別府大舍人助・東郷長門守、』

『八月廿六日丙午晴

一奥州様方御使鎌田左京亮被參候、御意趣ハ直ニ被聞召候、付依御所望弥右衛門尉燒葉壺三ツ被進候、御使ニハ振舞有、』

『九月廿日庚午晴

一小城權現之座主職善乘院へ被仰付候爲御礼被罷出候、鳥目百疋進上候、談儀所より案内者として使僧被參候、

『九月廿六日

一鹿兒嶋へ御使本田伊豆守被參候、

一萬介燒物之事、』

十月朔日庚辰晴

一新納次郎九郎爲御見廻被參候、

〔一ハ行間朱書ナリ〕

1153 「古御文書廿二卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

尊書忝拜見仕候、仍有馬邊之様子無御心元就被思召、本  
田伊賀守殿此地ニ可被指置旨被仰下候、然共俄御人數杯  
入申候儀者、御座有問敷候、若又用所も就御座候者、山  
口駿河守殿・三原諸右衛門尉殿相談仕、自是可申上候間、  
伊賀守殿へ者先く御歸宅被成候様ニと申候、猶於様子者  
重而可申上候条、貴報不能具候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十九年〕

八月十二日

長谷川左兵衛  
藤(花押)

鳴津陸奥守様

貴報

1154 「御文庫廿三番箱十七卷中 家久公 御案文」 「御譜中ニ在リ」

先日以早使申候處、御懇報辱候、人數之儀急ニ者入申間

敷躰候哉、何時成共御注進次第可申付候間、可御心易候、其許何等之御慰共候哉、適程近御越候間、切々參會雖可申承候、時分から依致遠慮、不能其儀候、無題目候へ共見廻之驗計如此候、猶相舍口上候間不祥候、恐惶、

〔朱カキ〕  
〔慶長十九年〕八月十二日

山口駿河守殿

1155 「古御文書廿二卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

已上

當表爲御見廻本田伊賀守御指越被成候、殊更三諸右同前ニ當地ニ可被相詰之由、被仰付旨被申候、尤之御意共ニ候、雖然先書如申、御人數入儀御座候者、無由断可申入候条、先々本伊賀方可有御歸之由申渡候、從長谷左兵も右之通懇ニ可申入之由被申候、猶於様子者御使者へ申入候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十九年〕

八月十三日

山口駿河守

直友(花押)

嶋奥州様

参貴報

1156 『在中山王』

尔來不通音書、爲可謝之今呈一封、抑當春爲使華名護渡楫大明、其身爲達奧旨遙赴北京、乘船莅歸帆處、於于半途俄逢逆風、不得達于貴國、漸經數日無事來此國、先以欣悅々々、然者來年彼使無恙歸國才覺勿怠可也、將又和扇三拾握・棟芽一壺・鞍具數々進獻之、聊補微志而已、不宣恐惶、

〔朱カキ〕  
〔慶長十九年〕八月廿六日 家久(花押)

琉球國王

閣下

「家久公御譜中、正文在琉球國國司文庫トアリ」

1157 「家久公御譜中」

妹姫千鶴去年仲夏、爲當家之質赴于江府、至今嘗旅寓之艱苦、於是家久感賞爲國家委身、而授和字感牘、附與二千餘石之采地、其目錄見于左、

1158 「正文在島津勘解由久當」「家久公御譜中ニ在リ」

さてもくそこもとのすまゐ、氣をつくされ候へん事、すこしもわすれをかす候へとも、とをつ國ゆへしけく

人なとまいらせ候事、心にまかせず、存なからふきたに  
うちすき候、まことに／＼かやうにしんらういゑ國のた  
め、しよ人の心やすき、この御れいくたひ申てもつき  
すましく候、さそ／＼ふへんなる事のミと思ひやり候、  
しかればちきやう二千こくあまりまいらせ候、もくろく  
持せ候まゝ、御らんあるへく候、はつかなる心さしをあ  
らはす計候、さためてくへしくへ、いしんさまよりおほ  
せらるへく候、かしこ、

「朱カキ」  
「慶長十九年」八月廿八日

いゑ久(花押)

千つるとの

まいらせ候

1159

「正文在島津勘解久當」「家久公御譜中ニ在リ」  
日州諸縣郡志布志之内

槻野村

高二千二百四拾石目録在別紙

右知行、乍少分進之候者也、

慶長十九年

八月廿八日

家久(花押)

千つるとの

1160

「廿三番箱十七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

先日伊集院半右衛門差越申候、於其許似合敷御用可被仰  
聞候、仍内々當國之馬御望之由承候間、唯今二疋引せ進  
候、栗毛駁者當年四歳、青毛者五歳、是者瀬前ニ而一段  
かんよく候、何も若馬ニ而候間、當時者乘其外思召俣有  
之間敷候へ共、若馬之儀候間、次第ニ者可立御用と存候、  
爰許ニ而者如形之駒と存候、猶於様子者此者へ申合候間  
不能祥候、恐惶、

「朱カキ」  
「慶長十九年」八月晦日

山駿州老

人々御中

1161

「家久公御譜中」

慶長十九年九月、家久爲露無ニ之心底、屬本多佐渡守正  
信・酒井雅樂頭忠世、獻呈神裁於 家康公及 大樹秀忠  
公如左、

1162

「御文庫廿三番箱十七卷中」「家久公御誓紙御案文」

敬白天爵靈社起請文前書之事

一奉對兩 御所様不可致別心表裏事、

1163

一對背 上意輩一切不可申談候事、

一被 仰出御法度以下毛頭不可申相背事、

右條々若於致違背者、忝茂

上者梵天帝釋四大天王二十八宿、下者堅牢地神地之三

十六禽、別而伊豆箱根兩所權現 三嶋大明神 熊野三

所權現 稻荷 祇園 賀茂下上大明神 松尾 平野大

明神 諏訪 熱田大明神 正八幡大菩薩 天滿大自在

天神 愛宕大權現、惣而日本國中六十余州大小神祇、

殊氏神部類眷屬、各罷蒙神罰冥罰深厚、於今生者受白

癩黑癩重病於四十二骨、於來世者令墮無間地獄、浮世

更不可有之者也、仍起請文如件、

慶長拾九年九月七日

本多佐渡守殿

酒井雅樂頭殿

「家久公御譜中ニ在リ」

「家久公御譜中」

「正文在彦山政所坊」

知行目錄

庄内加治山富吉村之内

一中本吉之門

高三拾七石九斗七升七合五才

右同村之内

一浮免

高式拾貳石四升一合七夕五才

合六拾石

右知行之儀、誠雖爲少分、彦山爲御神領被寄附畢、全被

成領知、向後當家之祈念可有丹精者也、

慶長十九年九月十一日

三原諸右衛門  
重種

伊勢兵部少輔  
貞昌 (印)

比志嶋紀伊守  
國貞 (印)

町田勝兵衛尉  
久幸

彦山  
政所坊

1164

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

於大峯採灯護摩兩座之事、抽懇祈卷數等進之由候、此比

者可爲御上之由候之間、待入存候処遲引無御心許存候、

於御祈禱之儀者、聊以不存油断候、當月之於祈念者故障

打續、明日迄延引之条、此度卷數等不下進之候、猶期面

上之時計候、穴賢、

〔朱カキ〕

慶長十九年九月十三日

〔昭高院如書〕

〔花押〕

羽柴少將殿

〔本文書ハ、旧記雜錄後編三一七〇八号文書ト同文ナリ、但ノ朱注ニ慶長七年トアリ〕

1165 「伊藤氏家藏文書」

覚

先度權左老以對面奉憑候由、精雖申上候、猶用墨付申候、

其故者數年我等 龍伯様・惟新様御奉公仕候様子、諸人

御存候前ニ候、殊ニ愚息弓兵衛尉・甚六兄弟共ニ惟新様

於御傍ニ高麗國又者於京都遂戰死申候、雖然無御手付候

条、如此之御侘帶刀長後日可申上候間、偏ニ被添御意候

而可被下事弥奉頼候、此等之旨能様ニ御取合を以、可預

御披露事所仰候、以上、

慶長拾九ノ

九月十三日

〔伊氏〕  
常陸坊

祐存

〔印〕

三原舍人助殿

酒匂新左入道殿

否弉刑部少輔殿

肥後又右入道殿

1166 「家久公御譜中」

秀吉薨逝之後、日本兵馬之權日歸于 大相國家康公、其

威勢盛如朝陽昇然、以故 前右大將秀頼卿之威其微如螢

火、當大陽失光遂失衆望、於是從臣大野修理等不爲快之、

日夜妬東威之盛、勸 秀頼陽雖順之、陰懷亡 相國公之

志、至今秋矯大佛殿修復之事、使漢長老書鐘之銘於國家

安康之句、切斷家康之兩字而暗含呪咀之意、傍有告之者

因 秀頼與 大相國公及 大樹秀忠公相爲鋒盾、故 秀

頼使高屋七郎兵衛尉者、贈九月二十三日自筆之書於家久、

因十月高屋齎其書、來請合力於家久、不應焉、 秀頼再

使高屋投簡、且贈正宗長銘之脇刀、強催家久上洛、家久

返寶刀報之不應、 秀頼又遣川北勝左衛門者而頻招我、

然十月二日報之大絶之、使鎌田左京政喬・猿渡新助信元

如駿府及江戸告無二之心底、且獻 秀頼書、於是十一月

上旬、先使家老三原諸右衛門重種及其子左衛門佐重饒如

于大坂、家久亦同月十七日率小隊發廳城、先是有 台命、不徵兵勿勿出陣、以故至日州高岡埃 殿命、已而重種十二月十二日至大坂則翌十三日、於茶臼山・平野兩所御陣、重種奉謁 兩御所、時從平野 御陣所、負赤幌兩御使番、且山口直友副胸澤仲左衛門・山口内記爲先容、使重種至尼崎邊川中島、同月二十日以此地定薩軍陣所、却說家久進兵、而十二月五日至日州美美津、時武井利兵衛者齋秀賴書來、家久命東鄉肥前重位・別府信濃景親、於本陣捕之、加之水手者亦拿往之、以上十八人使景親護送之獻内府公、既而板倉伊賀守勝重之十二月九日書同中旬到來曰、有當速出陣之 鈞命、繇焉家久即日發驪于日州細島、而雖馳心于千里風波不穩、二十九日漸到豊後森江、於是翌年正月二日、本多上野介正純・山口駿河守直友之檄書到來曰、大坂既和平、雖來何所當速班師、是 台命也、謹勿違、三原諸右衛門重種亦自大坂以飛書、而告和平事、於是家久裁書報正純・直友、正純・直友之書亦覆、使一价捧老父惟新、而后徐徐以軍而入本邦矣、就難波多役當家出師之始末、自此至慶長二十年三月而大概備自他贈答之簡中、逐一書其傳則支離而繁多也、故效總括括記焉、是役從家久大小臣失軍中之史書、故不詳姓名、嗚呼惜乎哉、

1167

『御日記』

十月四日癸未晴

一 相良清兵衛尉殿方使犬童長介殿

惟新様より兼日鐘の柄被成御所望候ニ付、とねり・この多二本進上候、清兵衛尉殿方日野内膳正迄書狀被遣候、則返札被申候、右長介殿鳥目百疋被成御遣候、并御振舞有、相伴宮原主計助

十月十五日甲午晴

一 塩屋善左衛門尉下向ニ付被參候進物之事、

一 相原一束 一 木綿 踏皮式足

1168

『家久公御譜中』

『寫正文在島津左衛門久通』

〔本文書ハ一二七ノ号文書ト同文ニノキ省略ス〕

1169

『家久公御譜中』

『寫正文在文庫』

〔本文書ハ一一七三ノ号文書ト同文ニノキ省略ス〕

1170

『寫正文在島津左衛門久通』

『在官庫』

尚々此地様子、能々御聞合肝要ニ候、爲其以墨印令

申候、以上、

態申入候、今度大佛供養之儀ニ付而、駿河機嫌悪成申候間、以使種々理申候得共、大佛之儀被差置、以市正此三ヶ条被申掛候、大坂之城を明候欵、又屋敷を取、如諸大名在江戸欵、是不叶候者母ニ而候者を人質ニ出候得与被申候、市正迄色々理申覚悟仕候様ニ与申候得共、市正駿河被申合候哉覽、一圓ニ取上不申候、是非々々右三ヶ条不調候得者大坂者抱ル間敷候間、繕不成由急申候、然者能々御分別候得、此儀一ヶ条も同心不成事ニ候、菟角此元極申候間、市正ハ駿河之返事急候条、先々下申候、其方御心より偏頼入候、乍去路次遠候間、能々御聞合専用<sup>「イニ</sup>

二候、謹言、

「慶長十九年」

九月廿三日 秀頼御判

薩摩少將殿

尚々重而高屋遣申候間、御分別專要候、以上、

重而高屋七郎兵衛尉差下候、然者此元様子ニ付談合申度事候間、早々可有上洛候、此儀疑無之様ニ此長銘正宗脇差貴殿江進之候、委細者高屋口上ニ可申入候、謹言、

「十九年」  
九月廿三日 秀頼御判

薩摩少將殿

「古御文書廿一卷中」

『全』

か様之書中人ニ者不罷成、自筆を以申上候、我等判

本田新介殿・川東土佐殿御存知事ニ候、以上、

追而此書物ハ、秀頼様御自筆ニ而御座候、以上、

未申上候得共急度申入候、然者御書物 秀頼様より被進之候、被成御覽御報待入候、今度片市正駿河罷下候ニ付而、大坂ハ從駿河被懸仰様子、秀頼様江戸へ被成御詰候欵、御袋様被成御詰候欵、大坂御城被成御渡候欵、三ニ一ツ急度御きへめ被成様ニ被懸仰候、三ながら 秀頼様御同心無御座候、可成ほと大坂御城被爲持候而、此度被立思召立御理可被仰ニ相定候、爰許十月十日方内ニと被思召候、日比つねく爰元之儀、御如在無御座様ニ御

『全』

1174

座候間、いか様ニも御同心被成可被進之候、左様ニ候者急度爰元被成御上候様仕度候、是非被成御頼之由候、片市正儀も心替と相見得候間、爰許ニ而急度可被成御成敗と被思召候得共、先駿河へ爲御使被遣、追而之儀との事ニ候、前代未聞ニ候、片市正仕合仕様共御座候、必く急度御出船可被成候、路次も如何ニ候間、追而ハ申上候ましく候、少も急被成御上相待申候、我等よりよく可申入之由 御意候、恐惶謹言、

〔カキ入ニテナン〕  
 「慶長十九年」九月廿三日  
 「廿三年五月季通御文書礼合ス」  
 大修理大夫「ナン」  
 在判

薩摩少將様  
 人々御中

從 秀頼様、高屋七郎兵衛尉爲御使者其元被遣候間、一書令啓上候、爰許之様子ニ付貴殿様如何様ニも被成御頼候間、是非共く急ニ御上洛候而被下候様ニ与之事ニ候、即拙者ニ罷下候得与被仰付候得共、此高屋拙者親類之事ニ而御座候、其上其元之案内を存候間、旁被成御下候、遠路之儀若御疑も可有之与被仰、御重代之御脇指長銘正宗被成進候、様子之儀者此高屋具ニ可申上候、恐惶謹言、

1176

「古御文書中」 「家久公御譜中ニ在リ」  
 以上

急度令啓候、仍而昨日廿五日、吉利支丹大守相渡出船仕候、先以可御心安候、爰元御仕置等、弥長谷左兵方令相談、相濟し可申候、委細伊半右方へ申渡候間、拙者書中

別府舍人佑藏

牧助市

1175

「慶長十九年」  
 九月廿三日  
 大野主馬首  
 在判

進上  
 少將様  
 人々御中

「家久公御譜中」  
 「正文在文庫」

一昨日者爲御使被罷越得閑談、祝着存候、然者陸奥守殿御咳氣如何御入候哉、承度存候、定而早く可爲御快氣与存事候、將又右女之儀、昨日口柄細く聞せ申候、惣別媒介之儀共存候もの無之由候、只我々の分別ニ而とり合申たると聞得候、是又爲心得如此令申候、かしこ

「朱カキ」  
 「慶長十九年」九月廿五日



不具候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十九年〕

九月廿六日

山口駿河守

直友(花押)

奥州様

参人御中

1177

〔家久公御譜中〕

〔草案在文庫〕

尔來絕音問疎遠之處、今度佐敷渡楫之刻、芳墨殊太平布  
三拾端・唐盆拾枚送賜珍重々々、抑其國之政道弥無怠、  
諸民致安堵、長久之籌可爲專要、若又不隨令旨、惡逆之  
輩於在之者、注進次第即時善檢使惡黨令治罰、可被達本  
意様可申付事不可有緩、猶安子衆相舍口上、不祥記者也、  
恐惶不宣、

〔朱カキ〕

〔慶長十九年〕

〔年月も宛モナシ〕

1178

〔御文庫廿三番箱十五卷中〕

〔義弘公御譜中寫在吉田衆川田城之介〕  
〔家久公御譜中ニモ在リ正文寫在文庫トアリ〕

猶々めつら敷儀候者、追々可申入候、已上、

態申入候、

一今度大仏鐘之銘大坂ニ被召置候、漢長老と申人被仕候

其文章、大御所様不入御意、以外被成御腹立ニ付、

爲御理片桐市正駿府へ被罷越處、御對面も無之様ニ風  
聞仕候が、又何と被 仰出候哉、駿府方の御使ニ市正  
大坂へ被歸上之由候事、

一いかやうの儀被仰入候哉らん、大坂事之外雜説申之由  
候、定而上方方具ニ相聞可申候へ共、先承かけニ申入  
候事、

一様子ハ何共不存候へ共、雜説申ハ必定にて候、いつも  
とハ少替申様ニ申なし候間、上方へ人を被遣もやう、  
きこしめさるへく候哉、御分別ニ不可過之事、

一此比爲見舞、正源院可進之と存候つれ共、かやうの時  
分ハ何かと申物候間、さし延申候、不入儀ニ候へ共、  
此中無音候条申入候事、

一別紙ニ可申入候へ共、いそぎ申候間、乍自由一書ニ申  
入候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕未刻

〔慶長十九年〕十月朔日

(細川忠興)  
羽越中

在判

惟新尊老

羽奥州様

人御中

猶申候、羽越中殿も爲見廻歴々御指越候、委細者  
伊半右迄令申候、以上、

一書令啓上候、仍當地之儀弥相替事無御座候、可被心安  
候、雖然方々爲見廻使者被越候、先日伊半右迄如申、  
五拾・百にて爲御音信、御使者被指越可然存候、多人  
數入儀御座候者、追而注進可申候、猶伊半右可被申上  
候、恐惶謹言、

〔朱力半〕  
〔慶長十九年〕

十月八日

山口駿河守

直友(花押)

陸奥守様

參人々御中

〔家久公御譜中ニ在リ〕

〔義弘公御譜中〕

〔正文在加治木衆江田藤右衛門〕

鎌田左京亮・猿渡新介爲使与風被罷上候間、企一書候、  
先以其元長々辛勞之儀共無申計候、然者貴所事老躰与申、  
一人にて奥方之奉公餘大儀ニ存候間、大窪備前守申付、  
先度差上せ候つる、定而早々可爲參着与存候、乍不申何  
篇以熟談、彼是御奉公無疎意様頼申候、將又大坂之儀、

雜説共種々申散候、就其陸奥守殿御事、無別儀東國御一  
味之事ニ候条、何も以其心得諸事御奉公可然存候、巨細

右之兩人口上ニ可申候間、不具候、恐々謹言、  
〔朱力半〕  
〔慶長十九年〕十月十三日  
惟新(花押)

江田藤右衛門入道殿

〔全〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

〔九月廿三日付ノ御返書〕

不存寄候處、自秀頼様被成下御書、先以忝奉存候、抑被  
思召立儀御座候ニ付而、早々可致上浴由被仰下、尤雖可  
奉應尊意候、先年石田治部少取起弓箭候時節、老父兵庫  
入道上方へ有合候故、雖不能分別儀候、相守太閤様御一  
筋、於関原雖盡粉骨候、合戰相破、御所様天下被成御  
安治、迷惑ニ相極候處、被捨捨御遺恨、我等被召出、剩  
兵庫入道身上迄無吳儀被立置候、然時者大閤様御一筋之  
御奉公ニ付、當家者一篇仕、御所様被成御取立、數年種  
々御高恩之儀、世上ニ無其隱事候条、背、御當代申儀不  
罷成候、御高察所仰候、隨而正宗長銘之御脇指拜領候、  
誠々忝雖奉存候、右之御理候間、致返上候、可然様可預  
御披露候、恐々謹言、

「慶長十九年」  
十月十三日  
鳴津陸奥守  
家久判

大野主馬首殿

(貼紙)  
「家久公御譜中ニハ、月日迄ニテ御名モ宛モナシ」

1182  
「公」

御書中之旨得其意候、然者從 秀頼様爲御使高屋七郎兵衛被指下、御書細々致披見候、然者今度不任尊意趣、具ニ御請申上候間、可然様ニ可預御取成候、恐惶謹言、

「慶長十九年」  
十月十三日  
嶋津陸奥守  
家久判

大野主馬首殿

參御報

1183  
「入來院氏家藏文書」「家久公御譜中ニ在リ」

覚  
(家久)  
(花押)

一大坂御謀叛之事、  
一世上いかやうに罷成候共、此方者関東へ一筋之御奉公ニ相定候事、  
一數年 御所様御厚恩、至下々迄不可致失念事、

一大坂へ若御陳於相付者不圖可爲上洛候間、内々可致其覚悟事、

一御弓箭之用意不可致油断事、

一連々不入處花麗可爲停止事、

一他國人拘間敷候、若不審之者於在之者、則可致披露事、

付境目ニ可入遠慮事、

慶長十九年

十月十六日

1184  
「御文庫ニ番箱家久公一卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚申候、御使者覚のため一ツ書を以申上候、於趣へ御使者可被申上候、以上、

預御使札候、大坂之様子御使者具口上之旨承届候、殊彼御案書共拜見仕候、早々東へ右之趣被仰上之旨、御尤之御事候、弥此砌之事情条、無御由断御分別專要候、昨日乍御報申入候、大御所様去十日ニ駿府御出馬必定之由、方々より到來候、其御心得被成、慥成御使者重々御指上せ可然存候、書中ニハ細々と不被申候条、御使者存たる方ニ候之間、口上ニ申渡候、可被聞召届候、内々伊勢兵部少輔方可被差越由承候処、無其儀候、慥成仁重而被

成御越候者、尚以可得貴意候、我等罷上儀路次中無心元被思召之由被仰越候、長崎にて上方之様子承合、路次罷通儀難成様ニ候ハ、御國參得御意可罷上候、委細御使者へ申入候条、書中具不申上候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十九年〕

十月廿日  
山口駿河守  
直友(花押)

奥州様

參貴報

1185  
〔古御文書中〕「家久公御譜中ニ在リ」

覚

一從大坂貴様へ被 仰越趣御返事之様子、具ニ被仰聞候、

懸御目驗相見、満足仕候事、

一我等覚悟之儀尋被下候、先日大学坊ニ如申候、東より

御錠次第と存事、

一隣國之様子大かた申入候事、

一東之御様子存分申入事、

一我等へ大坂より何共被仰下哉と御尋事、

一大坂之御様子承及分申入候事、

一長崎之事、

已上

〔慶長十九年〕  
十月廿五日

羽越中守(細川忠興) (印)

羽奥州様

參

1186  
〔家久公御譜中〕  
〔正文在文庫〕

雖未申馴候令啓候、仍先日御急用之儀御座候而、駿府・

江戸へ使者致進上候、彼者共其表依躰參上仕、様子可申

入由申付候、其通御座候哉、若又忙敷儀候而直ニ罷通候

哉、無心元存候、大坂之儀不慮之出來不及是非候、御隣

所之儀候間、諸事御心遣察申候、然者自關東之御行如何

有之御事候哉、遠國故未承付候間、此者へ被仰知度候、

當時之様子爲御見廻如此候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十九年〕

十月廿五日

嶋津陸奥守

家久(花押)

池田武藏守殿

人ニ御中

1187  
〔古御文書在二十二卷中〕

急度申入候、仍今度大坂念劇ニ付、大御所様今月廿三

日到京都被成御上着候、然者御手前之儀御人數被召連、

早々大坂表へ可有御出張之旨 御意御座候間、被成其御

心得急御出陣可被成候、然而關東御仕置如何にも丈夫ニ

被仰付、公方様御働座被成、五三日之内ニ御上着御座

候、恐々謹言、

十月廿五日

本多上野介

正純(花押)

安藤帶刀

直次(花押)

成瀬隼人

正成(花押)

板倉伊賀守

勝重(花押)

嶋津陸奥守殿

「岩下藏書」

「折紙切候て相不知」

(本文書ハ一一九六号文書ト同文ニノキ省略ス)

慶長十九年日記

十一月十一日己未晴

一奥州様大坂御出張ニ付御談合在之、

一御陣中御法度之条々、

一喧嘩口論堅停止之事、

一防戦ニ可及時、無御下知一人も備之場を罷出間鋪事、

一如何様之騒動之儀雖有之、請取之場儘ニ相固、他ニ

不可混事、

一若大合戦など可在之時者、諸軍衆方々江不走散、御

馬廻を可相固事、

一鉄炮ミたりにうつましく候、若ためしつゝ在之者、

奉行衆へ申理可仕之事、

一對他所衆うてたて過言停止之事、

一惣別他國衆江致入魂、互出入共ニ而無等閑躰可爲停

止事、

一傍輩中口論共仕出、深々之遺恨雖有之、此節之儀ハ

致堪忍、蒙言上 公儀之以御曖可達存分候、私とし

て於事破者、曲事ニ可被仰付事、

一於陣中縦人こしめ候とも大酒停止事、

一諸下知衆之可申旨不可相背事、

一今度御上洛之御供衆、於路次中濫妨狼藉堅停止之事、

右條々、於違亂之輩者、可被嚴科者也、

一諸外城御置目之事、

一番普請無懈怠可相勤事、

一他行停止之事、

十二月六日甲申晴

一御留守中辻切可申付候、然を与之内功者を相添、餽相成儀無之様可致分別事、

一古江李兵衛尉從江戸罷下候、  
一書狀并下緒一具

一普請帳ニ星をさし月々の帳を 惟新様可懸御目事、

新納次郎九郎

一他國衆江聊介ニ宿かすましく候、若不審成もの於有之者、留主鹿兒嶋へ可致披露候事、

一書狀二  
町田勝兵衛尉殿  
一書狀一  
吉祥院

一海邊之諸所ハ船之出入念を、他所之船於着陣者能く尋究、早々かこしまへ可致披露事、

一書狀一  
江田藤右衛門尉入道  
上井次郎左衛門尉

一他國境之諸所他ニかゝり不可致違亂、就中世上さハかしき儀雖有之、無御下知不入儀仕ましき事、

十二月七日乙酉晴

一人之留守之宿ニ出入可停止、乍去無余儀用談之義在之者、其停主之親類欵、又者老者など致同道、用談可相達事、

一伊東平右衛門尉入道之内、徳永和泉守内、脇本御假屋守之女房懸御目候、瓶酒一對宛進上候、

右条々、於違亂之輩者、可被處殿科者也、

十二月八日丙戌晴  
一伊地知民部少輔被參候、様子ハ山野之地頭職被給候、爲御祝儀鯛一掛・御樽老荷進上、御酒被給候、

1190 『全御日記ノ内』

十一月十二日庚申曇

一喜入攝州被參候、南蛮菓子進上、

十二月十八日丙申陰雨  
一西ノ丸ヨリ御小袖老ツ御進上、御使新納加賀守、御酒被給、其後御振舞有、

十一月廿日戊辰小雨

一上方衆塩屋ノ善右衛門尉被參候、鳥目百足進上候、

1191 『旧記雜抄』

大坂陳之事

一慶長拾九年之冬、大坂籠城之由、任御觸狀霜月十七日  
家久鹿兒嶋を罷立候、人數手廻少くニ而東目を罷上り  
候、仁禮藏人仕置候日々記巳九月廿日書記之、

一先ニ家老三原諸右衛門尉・同左衛門佐差上せ、拾二月  
十二日到大坂着仕、翌日茶うす山・平野ニおひて兩  
御所様江諸右衛門 御目見得ニ而、平野御陳方赤ほろ

の御使番衆御兩人、山口駿河守殿案内者として、駒  
澤仲左衛門殿・山口内記殿江御兩人ニ而陳場者尼ヶ崎  
之川中嶋と申所江同月廿日ニ御渡候事、

浮帖 三原左衛門佐依被覺置記之、陳場御引付ハ平  
野御陳ニ而、赤ほろの御使番衆兩人御座候、山口駿  
河守殿方案内者駒澤仲左衛門・山口内記兩人ニ而、  
十二月廿日と覺申候、

一家久上洛之刻、日州江乗船不廻ニ付滞在之時、十二月  
五日爲秀頼之御使御書を持、武井利兵衛と申者飛脚ニ  
參候を、家久假屋ニ而東郷肥前守・別府信濃守ニ直ニ  
搦取せ、則信濃相添差上せ候、同月廿九日到大坂着仕、  
則諸右衛門召列、天王寺之御陳場江參、山口駿河守殿  
江致披露候、左候而石山城和談ニ而、 内府様 御歸

鞍ニ付而、別府信濃儀者本田佐渡守殿・山口駿河守殿

方佐々井喜兵衛と申人案内者ニ被仰付、駿河迄被差遣、  
利兵衛尉搦捕候通申上、剩慶長廿年之二月廿二日於駿  
河御城、本多上野殿御取成を以、使者信濃致 御目見  
候、難有仕合候つる事、此時進上物者國之楯柑之類ニ  
而候、但此使慶長廿年卯月六日鹿兒嶋ニ罷歸候事、

浮帖ニ仁禮藏人日々記ニ書記之、

一正月二日豊後之内森江方六里かミ迄家久着仕候処、本  
多上野介殿御觸狀可罷歸之由候ニ付、從彼浦罷戻候、

黒田右衛門殿・田中筑後殿・細川肥後守殿へ御觸狀  
被遣候を家久使罷歸候時、預リニ而罷下、右四人江  
相届申候、家久江上州御狀写、

急度申入候、仍大坂之儀御無事ニ相濟候間云々略、

1192 「家久公御譜中」

「草案在文庫三番箱中」

去月十五日之 御書、今月一日謹而拜見仕候、然者片桐  
東市正依致不慮之動、御城内被追退候處、從關東御人衆  
就被差上可罷上旨雖被 仰聞候、先度之御請申上候様、  
難成子細重疊御座候間、不任 御意候、於様子者委曲川

北勝左衛門尉可被申上候条、可然様可預御披露候、恐々謹言、

十一月二日

大野修理大夫殿

1193 從 御袋様御書拜領、忝令存候、於様子者 秀頼様之御請ニ 巨細申上候、猶川北勝左衛門尉殿へ申候間、被聞召

達、可然様御取成頼存候、恐々謹言、

〔朱力キ〕  
〔慶長十九年〕十一月二日

大野修理大夫殿

1194 「家久公御譜中」  
「草案在文庫」

其表之様子重而被仰下候、委承届候、然者我等可罷上之由雖被仰聞候、先日申入候様ニ、先年関原御弓箭之刻、相守 大閣様御筋目、兵庫入道雖致粉骨候、其合戰相破、御所様天下被成御安治、當家及迷惑候處、被差捨御遺恨我等被召出、兵庫入道身躰迄被差許候、然時者 大閣様御一筋之御奉公ニ付、當家者一篇仕、其後 御所様被成御取立、多年之御厚恩世上無其隱事候条、相背関東儀不

罷成候、御推察所仰候、猶於様子者川北勝左衛門尉殿へ申達候間、不能祥候、恐々、

〔朱力キ〕  
〔慶長十九年〕十一月二日

大野修理大夫殿

御報

1195 「家久公御譜中」  
「正文在文庫」

以上

此表爲御見廻、伊勢兵部少輔方被懸御意候、萬事申談大慶存候、上様御出馬弥必定之由、從上方到來候、於趣者兵少へ相談申候条、可被申上候、雖不及申候、此砌無御由断御使者ニても、又御飛脚成共切々御指上せ尤ニ存候、委細伊兵少へ存寄通申談候間、書中具不申上候、猶追々可得御意候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
〔慶長十九年〕

霜月三日

山口駿河守

直友(花押)

奥州□

參貴報

1196 「岩下佐次右衛門家藏」



高七十石二斗二升五合六分〔「切レテ不知」〕

合百石

うき所  
田代刑部少輔ヨリ出

右之出銀、老石ニ付一匁一分二リ三毛五子、主從二人  
五ヶ月之賦、各得道具無油断用意候而、一左右次第ニ  
可被打立者也、

慶長拾九年十一月六日

別府舍人佑

市來八左衛門印  
(家繁)

佐多越後守印  
(忠増)

岩下与右衛門尉殿

1197

『在官庫』

今度爰許籠城之様子有樂・大野修理從兩人方可爲演說候、  
然者大關以來年來之因於不被相忘者、是非共一途忠節可  
爲感悅候、猶陸奥守・又四郎兩所へも可被相意得候、恐  
々謹言、

慶長十九年

十一月十八日

秀頼御判

惟新老

1198

『全』

武井理兵衛尉其地江差下申候間、令啓候、今度大坂籠城

之様子具ニ可有召上候、此節ニ候条、一筋ニ被對 秀頼

公、早速有着岸於被抽忠儀者、別而可爲感悅旨ニ候、此

元之儀、矢・兵糧・玉藥丈夫ニ被申付、人數等存之外相

集、可有五六萬程候、於様子者可安御心候、陸奥守殿・

又四郎殿へも可申入候得共、未申承候間、自貴殿能々被

仰傳、御一同之御報所希候、委細以直書被申候、能々御

心得可爲肝要候、恐々謹言、

十九年

十一月十八日

如菴(兼田)  
有樂

惟新老

1199

『全』

内々態以使者雖可申入、爰元之様子御心安爲可被聞召、

武井理兵衛尉差下申候、此度之儀ニ付而、是非共被對

秀頼公御忠節別而可爲祝着旨候、當城之儀兵糧・玉藥丈

夫ニ被申付、人數以下思召之外有之事ニ候、於様子聊被

成御氣遣間敷候、菟角片時も被成御急、御渡海奉待存候、

恐惶謹言、

十九年

十一月十八日

大野修理大夫  
在判

鳴津陸奥守様

參人御中

1200 「御文庫拾七番箱十八卷中」

起請文

一 今度御振舞方見廻之儀被仰付候、隨分入念御奉公可申  
上候、付御膳配所へ向後不知者むさと不立入様ニ可申  
付事、

一 縱如何様之計策雖在之、不入其案則可言上申事、  
一 我々不届儀耳可在之候、左様之刻者被加御折檻可被召  
仕事、

右之旨若於僞申上者、

▽  
(牛王)  
奉始上梵天帝釈四大天王、下堅牢地神冥官冥衆、惣日本  
六十餘州大小神祇、別當國鎮守新田八幡大菩薩 開聞正  
一位 鹿兒嶋諏方上下大明神 稻荷 戸柱 春日 若宮、  
殊大隅正八幡大菩薩 霧嶋六所大權現並高岡一宮 栗野  
八所大明神勸請諸神、取分愛宕大權現 大天狗 小天狗  
山々峯々所有天狗 天滿大自在天神御部類眷屬等、神罰  
冥罰各身上可罷蒙者也、仍起請如件 △

三原次郎左衛門尉

慶長十九年甲霜月吉日

重貞(花押)

諏方主稅助

兼安(花押)

別府舍人助殿 參

1201 「御文庫拾七番箱十八卷中」

天罰起請文

一 今度御膳配被仰付候、隨分入念御奉公可申上事、

一 縱如何様之計策有之共、不入其案言上可申上事、  
一 御膳配近所へ、向後不存者むさと不立寄様心懸可申事、  
右條々若於僞申上者、

▽  
(牛王)  
奉始上梵天帝釈四大天王、下堅牢地神、惣者日本六十餘

州大小神祇、別者薩州鎮守新田八幡宮 開聞正一位 大  
隅正八幡宮 霧島 白鳥兩大權現 日向妻万五社大明神、  
殊者鹿兒嶋諏方大明神 稻荷 戸柱 若宮 春日大明神、  
愛宕山大權現並大小天狗 天滿大自在天神御部類眷屬等  
可罷蒙御罰者也、仍起請如件 △

慶長十九年霜月吉日

海老原銀兵衛尉

爲重(花押)

別府舍人佑殿

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

慶長十九年十一月廿三日、御留守中之日記

日々記

十一月廿三日、此日 御上洛之諸船、いそぎ細嶋へ相廻候様ニと、以御狀諸浦湊へ申越候、様子委案文帳ニ有之、御上洛御供衆打立之糺明、菱刈・眞幸表之儀者加治木より被仰付候様ニと申上候事、

十一月廿四日、此日 御上洛之御供衆、打立遅速之爲御糺明、諸所へ使書差越候、出水方角へ高崎民部少輔殿被相越候、庄内・肝付表へ井尻八兵衛尉殿被越候、南方へ新納式部少輔殿被相越候、

廿五日、此日肥前鍋嶋殿よりの使馬場清左衛門尉殿被相越候、加治木まで被越ましき由、清左殿被申候故、様子湘雪を以かち木へ被申上候、

廿六日、此日戌之刻加治木より御使として松岡殿被差越、上方より山駿州・長越州老より、奥州様御上洛御急候様ニとの御注進に候間、浦々諸船出船片時も急候様ニとの御意候、即西目京泊へ、本田弥六殿御使として被相越候、東目柏原・内之浦表へ吉田六郎右入道殿被越候、

廿七日、此朝愛甲次兵衛尉南方諸浦遅參之諸舟追立ニ付被差越候、浦々役人より稠申付、出船急候やうにと役人中へ書狀被遣候、此日肥前之使馬場殿歸鞍候、川崎主計長崎より被歸候、等安へ御借銀廿貫め持來候、

廿八日、

廿九日、此朝加治木よりの御使上井神三郎殿、長岡越中様よりの御狀共被持來候、正源院・長岡式部少輔殿・川上式部太輔殿・税所弥右衛門殿此衆よりの書狀も到來候、則中村喜兵衛尉殿日州如御船元持參被申候、惟新様へ參候御書へ、右御使神三郎殿にて返上候、村山等安へ之御借銀式十貫目、右之中村喜兵衛にて御船元へ被差越候、晦日、此日未之刻、山口殿御狀并伊集院半右衛門尉殿書狀、大坂御陳取之絵圖、幡州しかまとより被差下候、本田新介殿京泊へ上洛舟爲追立被罷越候、彼人前より右之狀被持せ候、爲何便ニ參候哉、未相知候、則 惟新様爲上覽、宮之原傳左衛門殿持參被申候、被成 御一覽候てより此使へ被下候而、高岡へ直ニ被罷通候やうにと可被仰付候由、南郷淡路守殿迄書狀被遣候、

十二月朔日、

二日、申之刻 惟新様被成 御着候、御宿へ枕山權左殿

御屋敷也、此日羽柴對馬守殿より使者越着候、いつミ屋  
へ被致宿之由候、虎皮一枚進上也、

三日、此朝築川甚右衛門方御用候間、御船許へ被差越候、  
羽對馬守殿より 奥州様へ被進御書、并伊勢兵部少殿へ  
之書狀も右之甚右を以進上候、此朝 御留守中御置目之  
條々 惟新様於御宿出仕之衆被相揃被 仰聞候、御使遊  
浦老・河上又左殿にて候、此晚御城三口之番衆・殿中御  
門番衆・廣間大番衆何も緩候間、能く可入念候由 惟新  
様被 仰出、即夜中ニ右番衆何もへ其御糺共候、

四日、此晝 惟新様御城へ被成 御登、口々之様子被成  
御覽候、此日羽柴對馬守殿よりの使者被罷歸候、使者之  
名畑野九郎左衛門殿と申候、此人へ人參御用之由 惟新  
様より被仰、銀子三百目被相渡候、人參へ以便船此方へ  
可被送遣候由、使湘雪を以約束申候、畑野殿へ板之物三  
被遣候、此使川上又左殿也、又羽對州より參候虎之皮沓  
枚、別府主殿助殿前より御船許へ可被持せ之由候而、伊  
勢兵部少輔殿迄書狀相付候、

五日、

六日、此日 惟新様如加治木被成 還御候、此日以廻文  
諸所陵衆兩人ツ、被致參上、出米并船作之儀可被承由候、

七日、

八日、此朝加治木より御使として、有川平右衛門殿被越  
候、

九日、

十日、

十一日ニ諸浦より米出事停止のよし、廻文被遣候者也、  
此日五嶋淡路守殿よりの使者到着候、以之外いそぎの故、  
返札請取被罷立候、 奥州様へ淡州より被進御狀へ紀州  
被請取候、大村丹後守殿父子よりも使者進上候、御馬・  
太刀進上候、子息民部少輔殿よりハしよてん十五端相添  
被進之候、丹州使者宿之見廻衆森喜右衛門殿也、

十二日、大村殿よりの使者被罷立、如加治木被參候、

十三日、

十四日、

十五日、此朝 惟新様より出物之儀ニ付、中原藤左衛門  
尉殿爲御使被差越候、

十六日、此朝筑州從坂東寺使僧被差越候へ共、出水へ被  
留置、書狀はかり權左衛門殿より被成御持せ候、 奥州  
様へ參候御狀者細嶋へ河口七右衛門持參被申候、此便ニ  
田布施より進上被申候鶴一・同もき左右方之羽廿四羽

相添被遣候、此日佐多越後守殿・河上又左衛門殿加治木  
へ可被得 尊意儀候而被相越候、

十七日、此日酉之刻、柏原より猪俣爲右衛門殿注進被申  
越候へ、川内より出船之十八端帆大泊より内之浦のこと  
く乘廻候處、風強候而去十三日之晩内之浦より一里程沖、  
日崎と申所より風にまかせ被繫留得馳出候行方不相知候  
由被申越候、

十八日、此朝加治木より佐多越後守殿・川上又左衛門殿  
歸宿候而、出物未進衆之知行可被召上候由、 惟新様御  
意之由候、

十九日、此朝衆中 御屋形へ被揃、出米之儀其外諸法度  
被 仰出候、出銀未進衆之知行、被召上候段も被仰出候、  
廿日、

廿一日、此日晝時分 惟新様御越に候、御宿樺權左殿御  
かり屋にて候、

廿二日、此朝 惟新様御歸館にて候、

廿三日、此日松浦肥前守殿より使者被差越候、様子者  
奥州様御上洛候、由候間、諸事御頼なざるゝ由にて候、使  
者へ板之物沓端被遣候、此晚秋月殿より歳暮之爲御礼使  
者被差越候、此使ニも板物沓端被遣候、

廿四日、

廿五日、此日片浦より海鹿參候、則 惟新様へ被成進上  
候、御使垂野助太郎殿、

廿六日、

廿七日、此朝御分國中之馬、他國へ被遣事堅可爲停止之  
由、一所衆諸外城へ廻文を以被仰渡候、

1203

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久通」

ふねいまたまいらす候間、いつともなく候、さため  
てほと有ましく候、上かた御ちんもはやちかより申  
候よし、たゞいまもきこえ申候、いそきのほり候ハ  
、やかて人をくたし可申候、よろつゝ、又々か  
しこ、

わさとおもひよりことふきうれ敷思ひまいらせ候、こと  
に小袖一かさねくたんいろ／＼こゝろさし悦、けさんの  
やうに思ひまいらせ候、一たんさむく御入候間、おりふ  
しのみんと申事候、小袖もふねにつかへし、さむく  
おはし候つるに、こゝろさしとゞき申候、ことにきのふ  
はやくしへまいりて、しやうしんなどあげはなし申候と

ころにまいり候間、一ツのミ候てさむさをもわすれ申候、  
きのふは□らす風ふき申候つる、雪なとふり申候つる、  
おりふし欵思ひまいらせ候、むもしさかしく候よし、め  
て度こそ候へ、やかてかミかたひまあけくたりを御まち  
候へく候、又くたしものゝ事、申候つるかき付候て可給  
候、

〔朱カキ〕  
〔慶長十九年〕十二月一日

たかおか  
より

しん大(本マ)

御返事

いゑ久

1204 〔古御文書二十二卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

以上

御狀本望之至存候、仍従大坂重而御使罷下候ニ付而被入  
御念、本上州迄御使者被遣候、彼御使口上委細ニ承候、  
御心底之通御尤ニ存候、大坂の様子御先手之衆、近々ニ  
仕寄申候由ニ候条、急御上着被成可然存候、猶御上之節  
可申達候、恐々謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十九年〕

極月七日

松隠岐守

定勝(花押)

嶋津陸奥守様  
貴報

1205 〔御文庫二番箱家久公二卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

以上

切々御懇札拜見仕候、如御意今度ハ大坂別心之儀付而、  
〔兩〕御所様被成御動座、大坂表諸軍勢取詰御在陣之事情、  
就其乍御大儀、其元へも御陣觸御座候条、寒天之時分ニ  
御座候へ共、御急御上奉待候、猶爰元之様子、御使者可  
被申上候間、不能一二候、恐惶謹言、

〔慶長十九年〕

十二月九日

板倉伊賀守

勝重(花押)

嶋津陸奥様

貴報

1206 〔北郷忠能譜中〕

同十九年、賜暇下國、此時本多上野介贈書於忠能、有正  
文、左記之、

以上

一書令啓上候、仍貴殿御事御暇被下様ニと、從陸奥守殿

御内意候通、兩 御所様へ佐渡守被申上候処、即御暇被

進、只今御歸國之由目出度存候、就其佐渡守の御書狀御

届、即披見申候、誠久々ニ而御上御満足之段、令察存候、

於駿府懸御目候者、御馳走可申處候、途中故不能面上、

御殘多存候、然者 大御所様駿府へ還御可被成旨ニ御座

候つれ共、此中之雨故箱根山ハ雪降、路次悪御座候付、

於江戸御越年可被成旨ニ御座候、昨日猪毛と申所まで御

座被成候、此等之通陸奥守様へも可被仰上候、猶期後音

之節不能具候、恐々謹言、

十二月十四日

北郷齋岐守殿

本多上野介  
正純(花押)

1208 「北郷忠能譜中」

慶長十九年、割三ヶ國諸士采地各献上之、此故忠能以高

城・勝岡・山之口獻 太守公、

同年十二月、 太守公帥于大坂、忠能帥師從御旗、

1209

「家久公御譜中」

「正文在東郷八左衛門」

「口切ル、」  
ひたいに火印を被押、城へ被追入由候事、

一□月廿九日てんま口・てんほう口・きす口より被押寄、

川内ニ有之番船追散し、少々討捕川を被越候付、惣町

焼ハラひ三之丸へ引入候間、被押詰三之丸限ニ被取卷

由候、此日後藤又兵衛尉などもふか手をひ、大略相果

候ハんと落人口ニ申由候事、

一町人・百姓等城より出候者を、兩手之指を切はたにな

し、城へ被追入由候事、

一落人之口を被爲聞候へハ、大坂内米壱石ニ付百廿目つ

ゝ仕由候、就其致籠城候町人・百姓等致後悔迷惑仕由

候、如此候間、若々不致上着内ニ不圖落去候而者咲止

候間、先々我等惣人数不召烈候者、早々罷上可然之由、

河内守殿・山駿州より被仰下候、又今朝伊集院半右衛

門尉罷下候、是者従本上州 大御前様御意之由候而被

差下候、我等上洛遅々人数少々ニ而、先々可罷上由候、

半右衛門尉者今月六日ニ御陳場罷立候由申候、去四日

のひる程天王寺口題目ニ被構候處ニ、加賀肥前守殿人

數無理ニ切入候へ共、跡之人衆不續故、内ニ切入たる

人衆者其假相果、手負などハ堀きへに其まゝ有之を、  
味方よりものけえず、敵よりも討捕事不成由候、如此

各はけしく、此比者被進由申候、然者我等事此中内海

へ着揃候舟一日〳〵と相待候へ共、終ニ順風無之候而

不參候間、先く少くニ而可罷立覚悟候、乍去昨今順風

能由申候、昨日者以之外之大風ニ候間、出船申間敷候、

今日者必く可致出船欵と舟かた共申候、哀〳〵左様ニ

御座候へかしと存候、猶重而可申上候、誠惶敬白、

〔朱カキ〕  
〔慶長十九年〕

十二月十五日

陸奥守

家久(花押)

進上  
惟新様

1210

〔在北郷氏〕

急度令啓入候、仍のほり之内ニ十文字之御もん被成候間、

早く被仰付候而尤候、少も御油断有間敷候、於様子ハ誰

そ一人被成御進上可被聞召合候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十九年〕

十二月十六日

伊勢兵部少輔

貞昌(花押)

北郷讚州様

人々御中

〔家久公御譜中ニ在リ〕

1211

〔御譜中〕

〔十九年十二月十五日家久公ヲ惟新公江之御狀之内ニ有之〕

一大坂内米老石ニ付百廿目ツ、仕由候、就其致籠城候町

人・百姓等致後悔迷惑仕由候、

1212

〔御文庫ニ番箱家久公ニ卷中〕、「家久公御譜中ニ在リ」

追而申入候、此書狀共御見分被成、何もへ可被遣候、

以上、

急度申入候、仍大坂之儀御無事ニ相濟候間、何方迄御出

船候共、早く御歸國可有旨 御意ニ御座候間、其御心得

候而、御國元へ御下可被成候、恐く謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十九年〕

十二月廿一日

本多上野介

正純(花押)

山口駿河守

直友(花押)

鳴津陸奥守殿

1213

〔正文在文庫〕

以上

急度申入候、仍大坂之儀御無事ニ相濟候間、何方迄御出

船候共、早く御歸國可有旨御意ニ御座候、其御心得候而



御國元へ御下可被成候、右之通先書ニも申入候へ共、自然不相届儀可有御座と存候、重而如此候、恐々謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十九年〕

十二月廿二日

本多上野介

正純(花押)

鳴津陸奥守殿

〔家久公御譜中ニ在リ〕

1216

『在官庫』

元和元年乙卯、久加于時十二歳元服、忝 家久公爲加冠、  
號又次郎、賜備前家助之寶刀、 惟新公賜鶴目二千疋、

1215 「北郷久加譜中」

元和元年乙卯正月、聞大坂已和陸路次旋軍、同年三个國  
有御檢地、忠能之領增高多、依之賜加増三千石、本高合  
四萬四千四百餘斛也、

1214 「北郷忠能譜中」

(表紙)

義弘公	元和元年 即慶長二十年
家久公	
後 編 舊 記 雜 錄 卷 七 十 一	

1217

「此正文、御文庫廿三番箱十五卷中ニあり」

天福和合樂、地徳皆圓滿、  
君か代の久しかるへき例には兼てそ植し住吉のまつ  
慶長二十年乙卯 藤原朝臣義弘(花押)  
年徳神參

「御文庫四拾八番箱中」 「義弘公御譜中ニ在リ」  
「家久公御譜中ニ茂在リ」

急度令啓上候、仍我等事此中順風無御座候て、一昨日漸  
豊後守江迄罷着、今日五六里かミ迄出船候處、本多上州  
方加藤肥後守殿内衆へ御傳候而書狀一通、又從三原諸右  
衛門尉所態使差下候ニ一通、同時ニ到來候、然者大坂之  
儀、御陵にて相濟候之間、早々可致歸國由候、惣而者先  
直ニ罷上、此中 兩御所様御辛勞之由をも申上度儀ニ候  
へとも、我等不致上着以前ニ被入 御馬候ハ、 関東迄  
參儀頓ニとも用意罷成間敷候之間、先々任御詔罷歸候、  
大坂御陵之様子も委敷儀者未相知申候、乍去大坂城内御  
氣遣之事度候つる哉、遮而御托共候而、城之堀とも悉う  
めさせられ、本丸計ニて 秀頼様御在城之由候、可有下  
城も御意次第之由、御申にて候つれとも、右之分にて相  
濟申由候、何も我等事上方へ使共差上候間、書狀等調候、

隙明次第罷下、懸御目可申入候、從本多上州之書狀令進

上候、可被成御一覽候、誠惶敬白、

〔御譜二〕  
〔朱力斗〕  
〔元和元年〕

正月二日

陸奥守

家久(花押)

進上  
惟新様

〔元和元年卜張紙有之〕

1218 「古御文書中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

從琉球唐へ被遣候先船歸朝仕候付而、爲御注進早々被仰上、殊三種進上被成候趣致披露候処、被入御念候儀御祝着被思召、御内書具被進候間、拙者も委不申上候、然ハ私へ砂糖百斤桶二并焼酒壺老送被下候、御芳情之至書中難申上候、猶爰元之様躰御使者可爲言上候、恐惶謹言、

〔朱力斗〕  
〔元和元年〕

正月十一日

本多佐渡守

正信(花押)

羽柴陸奥守様

貴報

1219 『飯野満足寺文書』 『知行目録』

日州眞幸院加久藤西郷村之内

高七拾九石四斗九升九合夕七才

湯田之門

同河北村之内

高五拾五石四斗三合四夕七才

下中野屋敷

同灰塚村之内

高四石六斗五升三合三夕三才

浮免

飯野末永村之内

高三石九斗六升八合

門前屋敷

合百四拾三石五斗式升三合九夕三才

右知行、諸役儀可爲御免由、先年奥州様御判形在之事候、然者今度以御檢地之上目録相改候間、右之以筋目奥書不相替調進候条、永々爲無役之地被成領知、可成程社頭之修理可被相調者也、

慶長廿年

二月十九日

三原諸右衛門尉

重種

伊勢兵部少輔

貞昌判

比志島紀伊守

國貞判

町田勝兵衛

久幸

白鳥山

座主御坊

1220 『伊十院氏藏』

『以上』

態令啓候、仍白鳥山御知行方、弥諸公役御免許ニ而候、然者其許高ニ被籠置候而も不入儀候間、可有御除事尤候、左候ハ、鹿兒嶋之高可被加置候、爲御存知候、恐惶謹言、

九月三日

伊勢兵部少輔

貞昌印

比志嶋紀伊守

國貞印

伊十院源左衛門殿

人々御中』

1221

『義弘公御譜中』

『正文在正阿彌彦左衛門』

猶々乍輕微、多きれいしま一端進入申候、誠補書音

計候、

其後者不申通心外之至候、仍去年者五左衛門尉細工爲稽古罷上候処、貴所以入魂やすり等數多被成御教、誠田舎者ニハ指南等難成可有之処、無足儀被爲相傳國元之重寶

にて御座候、貴所御厚恩之程不淺存候、猶此使可申達之条、不能詳候、恐々謹言、

『朱力キ』  
『元和元年』  
二月廿日  
羽兵庫入道  
惟新(花押)

正阿弥

宗喜老

床下

『上包』

正阿弥

宗喜老

まいる

羽兵庫入

1222

『在官庫』

猶以此方之儀別而尋可申候、以上、

たはこの事ハ天下之御法度之事ニ候間、いかほとも

きひしく御座候儀尤候、

被入御念御直筆之尊書忝拜見仕候、

一先日鎌左京亮を以申上候、今度たはこのミ申候衆御暖

之儀、知行を被召上尤之由申上候、就其よく被聞

召候へ者、かしらたち候衆のミ申由候哉、左様候ハ、

めしにくき儀も可有之由御尤存候、就中比宮内少・鎌

又七郎、此兩人なともものミ申由候哉、於必定者笑止ニ

存候、猶々たしかなる證跡被成御尋、重而可被仰聞候、

此方にても可承候事、

一今度於中途諸人をも不憚、をしいたしのミ申候衆者、

先知行を被召上、かけくゝのミ申候衆ハ其沙汰被仰付

やうも可有之候間、とかくかたく御法度被仰出上を何

共不存、をしいたしのミ候者ハ深々敷罪人にて候間、

先此衆ハ可及御暖かと存候、

一この比承付候西丸女房共、たはこをのミ申候つるよし

承付候間、内々きかせ申候正儀相知申候ハ、重而從

是又々可申上候、恐惶敬白、

〔書入ニテ正文ナシ〕

〔元和元年〕

二月廿七日

陸奥守

家久(花押)

陸奥守

家久

惟新様

參尊報

〔此御書四拾八番箱中ニ有之糺合ス、義弘公御譜中ニ在リ〕

〔家久公御譜中ニ有之〕

1223

『華林寺文書』

知行方目錄

隅州曾於郡 田口村

一高九百拾石七斗七升七合四夕

日州高原 蒲午田村

一高五百式拾壹石六斗式升八合

隅州末吉 深川村之内

一高百四拾七石壹斗七升壹合八夕七才

隅州曾於郡大窪村之内

一高百式拾九石八斗八升三合六夕六才

日州 吉田村之内

一高六拾五石五斗式升八合七夕式才

薩州 羽月村之内

一高三拾壹石九斗六升八合五夕△

合千八百六石九斗七舛三夕五才

右之内

本高

千百五拾八石 此内百石東光坊分

加増 六百四拾八石九斗七舛三夕五才

右之知行之事、今度御檢地之竿ニ被打出候間、御支

配之地ニ雖罷成候、先年御寄進之地之儀候条、不可混他之由被仰出、向後、社頭之爲修理田、改而被成寄附早、永々被成御領知、修理之儀不可有油断候也、

慶長廿年三月二日

比志嶋紀伊守  
國貞判

伊勢兵部少輔  
貞昌判

三原諸右衛門尉  
重種〔此兩人判な  
し〕

町田勝兵衛尉  
久幸

霧嶋山  
座主坊

1224 「御文庫ニ番箱家久公ニ卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

一書致啓上候、仍當春中駿河・江戸へ御下被成候儀、先々御無用ニ御座候、御下被成能時分、從是御左右可申入候間、其御意得被成、内々御用意候而御待可被成候、其内ハ假何方迄御出船被成候共、早々御國元へ御下可被成候、此方之儀何比共疎略不奉存候間、御心安可思召候、

右之通先書ニも申上候キ、定而山駿河守方相届可被申候、

然而先度も如申上候、去比者自大坂其元へ參候廻文、早速被懸御目、殊ニ正宗之脇指など御返進被成、其後も廻文持參候使者并加子之者共ニ以上十人迄御搦捕御上被成候儀、旁以思召入たる御注進、兩御所様不大形御祝着被成候、將亦此表相替儀無御座候、相應之御用可被仰付候、不可存疎意候、委細御使者可被申上候間、不能一二候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
〔元和元年〕

三月四日

本多上野介  
正純〔花押〕

鳴津陸奥守様

人々御中

知行目錄

高拾七石二斗

隅州曾木里村之内  
古庵屋敷

右之地、應此中公役之高、被宛行者也、

慶長廿年

三月六日

三原諸右衛門尉

伊勢兵部少輔

比志嶋紀伊守

1225

宮里越中守殿

『在大口井畦氏』

知行名寄帳

大口小木原村之内

一庵屋敷

屋敷四畦

四舛蒔  
大豆貳斗二舛

中田六畦

丸畦十一  
四舛八合蒔  
粗三ツ貳斗一升

中田貳段廿步

柿木本畦十一  
老斗六舛六合蒔  
粗十三俵七舛

前田畦六ツ

八升蒔  
粗六ツ壹斗

中田老畝十八步

同所同二ツ  
老斗四合蒔  
粗一ツ三舛

屋敷添同四ツ

下田六畝十五步  
五舛二合蒔  
粗三ツ三升

島田同十一

下田老段  
八舛蒔  
粗四ツ二斗

大田村よし竹

下島三畝八步  
三舛二合蒔  
大豆九升六合

島田畦五ツ

下田五畝四分  
四升壹合蒔  
粗貳ツ一斗一升五合

井畔貳介殿

屋敷七  
山畑貳畝十八分

貳舛蒔  
大豆五舛二合

同人

合田島屋敷六段九畝廿二分

京舛

粗大豆卅六俵老斗七舛貳合二夕

一浮免

大田村内古川畝三ツ

上田貳畝十八步  
貳舛一合蒔  
粗二ツ貳升五合

善左衛門

篠原村大内田畝十四

下田貳段九畝十步  
貳斗三舛五合  
粗十三俵二斗

孫兵衛

篠原村柳田畝廿一

中田老段二畝四步  
九升六合蒔  
粗七ツ一斗七舛

四郎左衛門

田島屋敷四反四畦貳步

粗大豆廿三俵貳斗三合 京舛

惣合田島屋敷老町一段三畦廿四步

粗大豆六拾俵二舛五合二夕

内二舛五合一夕過

高ニノ貳十斛

右、鹿兒嶋吉野村之内馬越兩村被給候知行くり替ニ付、  
令支配者也、

慶長廿年三月十六日

鹿兒嶋

御支配所 ○〔印〕

「正文在大口土早水金左衛門」

申上候条々

肥後湯之浦へ被召移候て罷居候處ニ、大閤様御下向之時分何れも爲被召移人數、如御國之被參候剋、我等事も大口へ如本拙齋様爲御分別被召置候、然處幸侃老御老中之折節、肝付へ可被召移之由、伊集院新右衛門殿を以兩度承候へとも、罷成間敷由申候て、拙齋老ニ如此幸侃老被仰候と申入候、此以後又々被仰候へ、御返事被成候て可給由被仰候、其後鹿兒嶋へ拙齋老爲御使と被參候、

於 御内幸侃以御面談頻ニ召移候へと被仰候へ共、最前之御返事ニ如申、罷成間敷由申入候、從其幸侃儀ニ相逆申候故、從大口肥後ニ替候而被下候知行之返地も終ニ不被下候、然者拙齋老御堅固之内返地可被下之由申入候處、當時兵部少輔様大口之御見廻御左被成候間、當分御上洛被成候条、御下向之剋御談合被成、被仰達候而可被下之由候處、無程拙齋御果被成候間、于今延引申候、其時分書物ヲ以申上候子細共候、左様成使當所ニ御座候中嶋對馬守被申度ニ候、當分高廿四石被下置申候、此知行之儀者肥後へ罷移申候剋、浮免六段懸持仕候、存松尊老御地頭之剋、庄内加増三石、其後又 存松老御堅固之時分、

前後ニ御奉公共仕候間、知行御申被成可被下之由被仰聞候處御果被成候剋、爲其首尾と勝兵衛様從御前三石被下候、又拙齋老大口へ御地頭之時分、大壩御陳之以後、九州衆芦北へ陳を取、薩厂へ可參催申砌、又如前足輕役被仰付候、其刻御披露ニて候十五石爲加増と被下候、終肥後表へ御替候て被下候知行之返地于今不被下候、今度遮而御返地可被下様ニ奉頼候事、

慶長廿年

三月廿日

早水豊前守

「家久公御譜中」

備前浮田中納言秀家入道休覆之臣本郷伊豫義則者其先赤松家之族也、初以玉川爲稱号、有故避之、冒本郷氏。善射術、慶長關原一戰之後秀家國除

竄于豆州八丈島、以故義則來薩府臣事、家久以義則爲師範、慶長二十年元和元年也三月二十五日、義則不幸而病死、因家久不勝哀悼之情、詠二首之和歌惜永訣、如左、

「正文在高岡土川上次郎左衛門」「家久公御譜中ニ在リ」

それ生るゝハ死の始としるゝも、かの本郷伊豫守ハ弓の師とたのミしより、朝な夕なに馴くし、別れのおもひ



浅からんやは、殊にもろ／＼の道を学ひし人なから、わ

きて空飛雁の聲を聞て夜中に箭を放し、柳の葉をも百た

ひ射つへきものなり、唐土の文の心をもふかく傳へ、春

は花の下に詩をうそむき、秋は眞如の月に心をすまし侍

しに例ならぬ身となり、慶長廿年やよひの末獲麟の夕と

なりしかへ、手向種に一首つらぬるものならし、

少將家久

なれ／＼てみし世の春もかきりそと

うつろふ花のあとのかなしき

梓弓やよひのそらになく雁も

さらぬわかれの跡したふらん

「義則ハ慶長廿年三月二十三日病死ス」

1230 「見于愛岩田緒書出」

高拾石 鹿兒嶋上伊敷之内

右知行、愛岩領江被相付候者納成被給、其所之應田島、

宝泉坊へ可被相渡者也、

新納加賀印

慶長廿年三月廿二日

田代刑部少輔印

日置吉兵衛印

曾木甚右衛門殿 参

1231 『在官庫』

就御出陣御賦之事

高三拾石 玉利竹兵衛殿

高三百石二斗二升九合一和之高加ル

合三百三拾石二斗二升九合

外三石一斗四合不足

人數十人

内老人乗馬 一人馬取 一人甲もち

一人さし物 一人鉄炮 一人弓

一人鎗 一人草履 二人人足

右如御賦連々用意被成、御觸之日限無相違可有出陣事肝  
要ニ候、於出陣人數諸道具者可被相糺候、何時も二ヶ月  
分者可爲自賄候、様子ハ御兵具衆中へ御尋尤候、以上、

慶長廿年四月二日 本田伊賀守

市來八左衛門

佐多越後守

1232

御出陣ニ付御賦之事

高三百四斛三斗八舛三合

伊地知治左衛門尉殿

内八拾六斛國分之親父之高加ル

内四斛三斗八舛三合 餘分

人數九人

内一人乘馬 一人馬取り 一人甲持 一人さし物

一人鉄炮 一人弓 一人やり 二人人足

右御賦之ことく連々被成用意、御觸之日限無相違可有

出陣事肝要候、人數諸道具者、於陳中可被相糺候、何

時も二ヶ月分者可爲自賄候、さし物者兩金之團可爲候、

様子者御兵具衆中ニ御尋可有之候、以上、

慶長二十年四月二日

市來八左衛門印

本田伊賀守印

佐多越後守印

1233

御出陣乘馬御賦之事

高三百三石三斗八合五才

勝部志广丞殿

内三石三斗八合五才 余分

人數九人

内一人乘馬 二人馬とり 一人甲持

1234

一人弓 一人鉄炮 一人やり

二人人足

右如御賦連々被成用意云々文略、

慶長廿年四月二日

市來八左衛門印

就御出陣御賦事

左備

高四百七拾壹石九斗七舛

伊地知四郎兵衛尉殿

内四石三斗四合餘分

人數拾四人

内一人馬乘 式人馬取 一人草履取

一人甲持 式人鉄炮持 一人さし物持

一人鑓持 一人弓 一人手明

三人夫丸

馬関田衆中

高三百貳石八斗五舛九合六才餘分

内二石八斗五舛九合六才餘分

人數九人

内四人鉄放 二人弓

三人人そく

右如御賦連々被成用意云々略文、

慶長廿年卯月八日

本田伊賀守判

佐多越後守判

1235

「御文庫ニ番箱家久公ニ卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

態申入候、仍今度於大坂、下々雜說申成候間、自然手切  
ニ罷成候ハ、中國・西國之御人數ハ兵庫・西之宮・尼  
崎邊へ御出候様ニ、内々御用意候而御待可被成候、併此  
方より御左右無御座内ハ、縱 大御所様御上洛被成候共、  
御上之事御無用ニ被成、御國元ニ御用意候而、御左右御  
待可被成候、將又此方ニ御使者御付置可被成候、替儀御  
座候ハ、可申進候、恐々謹言、

「朱力キ」

「元和元年」

卯月八日

本多上野介

正純(花押)

鳴津陸奥守殿

1236

「御文庫ニ番箱家久公ニ卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

態申入候、今度於大坂、下々雜說申成候間、自然御手切

ニ罷成候者、中國・西國之御人數ハ兵庫・西之宮・尼崎  
邊へ御出候様ニ内々御用意候而御待可被成候、併此方  
御左右無御座内者、縱 大御所様御上洛被成候共、御上  
候事御無用ニ被成、御國元ニ御用意被成候而、御一左右  
御待可被成候、將亦此方ニ御使者御付置可被成候、替儀  
御座候者可申進候、右通先書ニ兩三度迄申入候へ共、若  
不相届儀も可有御座かと存、重而如此御座候、恐々謹言、

「朱力キ」

「元和元年」

卯月十日

本多上野介

正純(花押)

鳴津陸奥守殿

1237

「御文庫ニ番箱十七卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

猶々關東むき出羽奥州之儀、未何共聞え不申候、以

上、

急度申入候、

一 自本上州御觸狀、今日十六午之刻下着仕候間、不移時  
日寫進之候、定而其方へハ結句早ク御觸狀參事も可有  
御座候へ共、先申入候事、

一 大御所様、去十日名子屋迄御着之由候事、

一 伏見爲御番、江・勢・尾・濃・三・遠之御人數淀・伏

見迄はや參着之由候、藤泉なども被罷上候由申來候事、  
一信州之御人數もおもてむき御陳觸と存し候ニ悉可罷上  
之旨御觸之由候、勿論陣用意候て罷上之由、彼國之衆  
之内方申來候事、

一北國之衆もはや西近江ニ陣札打申候由申來候事、  
一本上州書中ニも、手きれニ成候者可罷上之由相見え候、  
如此ニ候へ者、未被仰ぶん半と相聞候、乍去從 大御  
所様御條書之内、秀頼様大坂ニ其仮可有御座ならば、  
古參之衆々歴々、去年新參之衆不殘被成御拂候へ、國  
々へ可被成御預との儀、又御國替之分ニ御同心候者、  
古參之衆者其仮被置、新參衆者御拂候へとの被 仰懸  
様ニ候、此外も御座有げニ候へとも、しかと聞不申候、  
右之儀御同心有かね可申様ニ、自上方申來候、兎角此  
度萬事究かと存候事、

一先度も申入候つる、我等駿府へ遣候者未上州ニ被置留、  
隨之様子聞不申候、替儀者何時も可申入候、又其地へ  
も相聞候者可預御知候、別紙ニ可申入候へ共、爲御相  
談態一紙ニ申入候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
「元和元年」四月十六日

〔細川忠興〕  
羽越中

惟新尊老

羽奥州様  
人々御中

1238  
「安養院文書」

先程以一人如申入候、拙子爲立願、御諏方へ知行五石我  
等一代間寄進仕候、右知行鹿籠之内ニ御座候、即彼目錄  
進上申候、御請取可被成候、若後日御知行以公儀相替候  
共、別所ニ返地分別可申候、爲其以一書申入候、恐惶謹  
言、

慶長廿年  
卯月十九日  
喜入攝津守  
忠政(花押)

鹿兒嶋諏方座主  
惣持院  
御同宿中

1239  
『在官庫』 「此ニ通御文庫ニ番箱家久公一巻中ニアリ糺合ス  
ニ通共ニ家久公御譜中ニ在リ」

以上

追而申上候、無御由断御出陳之儀專要奉存候、然者大坂  
を定而使ヲ可被差下候条、御とらへ被成御指上セ御尤存  
候、是又御由断被成間敷候、御人數之儀ハ少々遅御座候  
而も、御自身不被移時日、御出陳專一奉存候、尚御兩人  
迄申入候間、可被仰上候、恐惶謹言、

「カキ入也」  
「元和元年」

卯月廿日

山口駿河守  
直友(花押)

奥州様

參入と御中

1241  
『企』

以上

態申入候、大御所様一昨日十八日御入洛被成候、將軍様今月廿三日四日ニハ到伏見御着座被成候、然者大坂何角被仰分御座候付而、御取詰被成可被仰付旨、御意ニ御座候間、其元御人數被召連御出陣可被成候、無御上内ニ大坂可相果候へ共、御參陣可被成候、右通先書ニ兩度迄申進候得共、自然不相屈儀も可有御座と存、重而令啓候、恐く謹言、

「朱カキ」  
「元和元年」

卯月廿日

本多上野介

正純(花押)

嶋津陸奥守殿

1241  
「古御文書廿二卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

追而申入候、福崎新兵右御國之衆ヲ被差下由候へ共、我

等ものをも一人相添申候、無御由断御出陳御急候様ニと存、飛脚一人相添申候、御兩所迄様子可申入候、大坂表之儀落去程有間敷と存候之間、奥州様御上洛御急專一存候、恐く謹言、

「朱カキ」  
「元和元年」

卯月廿日

山駿河守

直友(花押)

比志紀伊守殿

伊勢兵部少輔殿

御宿所

1242  
「御文庫拾七番箱十八卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚々片時も御急被成、御上洛奉待存候、此卜之者急

度御一戰可有之相見え申候、乍去一兩日於大坂も靜

ニ御座候由申候、いまたゆき御座候、爲御心得申

上候、かしこ、

「条御譜ニアリ」  
幸便之由一書申上候、

一大御所様去十八日之八ツ時分御上洛被成候、一段御機

嫌能御座候、

一將軍様廿三日ニ御上洛被成候、御先手 上総様・伊達

殿被成之由申候、

一今程又御慶之筋目御座候、當年正月右御拘被成候牢人

1243

衆、御出可被成之段被仰通候付、大略御暖も破申候由申候、就其 奥州様御上洛之由被仰出候、去年御上洛遅候而、色々取沙汰共御座候、當年ハ急度御上洛被成候様被仰上尤奉存候、

一當年も又はや大坂御味方之様ニ下々申候、上々ニハ左様ニ不思召候由候、諸勢淀・鳥羽・西岡邊ニ陣取申候、はや十万計御座候、委可申上候へ共、近日御上洛可被成候間不申上候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「元和元年」

卯月廿日

道正庵

休(花押)

伊兵少様

人々御中

「全上」

「正文在文庫」「家久公御譜中ニ在リ」

尚々夜白御急被成候様、被仰上尤奉存候、已上、御着船被成候哉、御出船已後不承、無御心元奉存候、一大御所様去十八日之未之刻ニ条御所へ御付被成候、一段靜ニ御座候、

一奥州様御上洛可被成之旨ニ候、去年何角取沙汰申候、又當年もはや大坂へ御籠被成候なと申、米など御入

被成候など虚説御座候間、片時も御急被成御上洛尤奉存候、

一將軍様廿三日ニ御上洛之由申候、御先手上総様・伊達殿ニて候、大坂表指而御手間入申間敷と申事候、京中取乱申事御推量可被成候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「元和元年」

卯月廿日

道正庵

休(花押)

町勝兵様

人々御中

1244 家久公四女家臣種子島左近忠時室

元和元年乙卯四月二十日誕生、母家臣鎌田政重女、寛永二十年癸未四月十三日卒、年二十九、法名妙國、

1245 「家久公御譜中」

慶長十九年十二月二十九日、信濃景親到著大坂、三原重種相共詣天王寺之御陣、就山口直友告事由、則和平事成、内府公已歸大旆、因本多正信・山口直友胥議、副佐佐井喜兵衛以爲先容、同二十年元和元年也正月如駿府、獻竹屋、是時由本多正純執奏、二月二十二日景親登駿營、奉拜謁内府公云云、

同年暮春之比、秀賴又欲叛之巷說雲起、繇焉本多正純

投書、而止家久今春欲詣于駿府、至首夏則秀賴謀叛其

實決、因本多正純・山口直友所催家久出陣之卯月二十日

之飛檄經數日到來、故家久率一萬三千八百之軍士、當家失此役之

史書、故不審軍士之姓名、惟家老伊勢貞昌時、疏入國頭五月五日發

按司為質在魔府、而稱國頭左馬頭改姿於倭人從軍也魔城、解纜於京泊著船平戸、肥、則山口直友五月九日之書

同十九日到來、書曰、去五日兩御所御出馬、同七日御

先手之大軍攻入大坂城、同日申刻燒却本丸殿守、翌八日

秀賴及母堂殿自殺、並大野修理以下逆徒悉討取焉、已屬

大平、今也不可以大軍、應須急來獻壽、因家久止數百之

鑾轡、僅率小隊、夜以繼日雖進船阻逆風、漸六月二日著

船於尼崎、其夜經行陸路上著伏見、則達台聽、翌朝未

告大相國公、匪啻以使節勞之、且台命曰、聞汝乘馬

未來著、因茲黑及鹿毛二駿牽之、隨所好一疋可賜之、乃

拜鹿駿、而同五日家久拜謁大相國公、奉謝賜駿馬、此

時蒙懇懇台言、拜謝而還旅邸、同十二日大樹秀忠公

遣土井大炊頭利勝於私邸傳台言曰、家久之參洛三日以

前雖及台聞、以有微恙故未許對顏、御懇之台意奉謝

有餘、上使歸營後馳書而告上國之細大於老父惟新矣、

1246 「古御文書中在「拾二卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

大坂御陣兩御所近日御出馬之由候、急度御上洛候やう

承候、何比可被成御京着候哉、細々休甫なと參會仕待か

ね申候、何様期拜顏積壽可申達候、急候間一筆申入候、

恐々謹言、

「朱力半」  
「元和元年」五月二日

雅庸

鳴津陸奥守様

殿下

1247 『在官庫』「御文庫二番箱家久公二卷中ニ在リ引合ヌム」

猶々御人數者御殘候て御上洛尤存候、將又此書狀惟

新様へ早々可被成御届候、賴入そんし候、以上、

追而申入候、去五日ニ兩御所様御出馬被成、則七日ニ

御先手之御人數押入、將軍様御自身被成御詰、同七日

之申ノ刻ニ本丸殿主燒申候、翌日八日ニ秀賴御切腹、

同御袋御自害、其外女房衆數輩自害候、大野修理も相果

申候、又諸牢人并大坂之侍衆悉相果申候、可御心安候、

將又越中殿去六日ニ御目見被成、仕合殘所無御座候、

然者貴様之儀、急度御上洛候て被成、御目見可然存候、

1249

尚々山口駿河守殿方陸奥守殿ニ注進狀預、福崎新兵衛尉前差下候、何も上方之儀御無事ハ事きれニ罷成、

1248

「北郷忠能譜中」

元和元年五月 太守忠恒公再出陣于大坂、忠能亦同十三日發都城、北郷藏人久根・同息左兵衛尉久孝・北郷四郎右衛門尉久武・和田三右衛門尉・同氏半兵衛尉匡綱・小杉宮内少輔在頼・津曲狩野介兼業等率騎馬三十騎・兵卒七百七十餘人赴大坂、於海上同五月七日聞大坂已陷歸陣、此時 惟新公賜御書於忠能、有正文、左記之、

早々御人數者不入儀御座候、不及申候得共御急被成御上洛最存候、猶堀弥右可被申上候、恐惶謹言、  
「カキ入也」  
「元和元年」  
五月九日 山口駿河守 直友(花押)

奥州様

參人々御中

「此書、家久公御譜中ニ在リ」

「右ノ書状ハ、家久公五月五日鹿兒嶋御立、御手廻人數老万三千八百人、平戸ノ上釜田迄御出候処、大坂落城之由被為聞」

1251

「御文庫ニ番籍家久公一卷中」「家久公御譜中ニ在リ」  
以上

御懇書拜見申候、大坂之儀牢人共數多被相抱隔心ニ極故、兩 上様被成 御働座、當六日・七日之御合戰ニ大坂牢人致敗軍候、則秀頼・同御袋其外修理・甲斐守於本丸、

1250

「全上」

同年八月依 釣命、去城而移新地者也、

御弓箭ニ相定之由候、然者陸奥守殿御上洛一刻も御急候へてハ可爲笑止由相聞候条、各以其心得早々可被成打立儀肝要候、旁爲御存候、  
先書ニも申入候、乍重筆又々令啓候、自京泊只今上井神三郎罷歸候、今朝十五日陸奥守殿御出船之由申候、就夫貴所上洛無油断様ニ御急候へと、從京泊被仰越候、必何日ニ庄内可被成打立候哉、鎗承度存候、先書ニも其方打立之日限、返札ニ委敷可示給由申候へ共、無其儀候、猶以爲可承用一翰候、恐々謹言、

五月十五日

惟新(花押)

北郷讚岐守殿



同八日ニ被相果候、先以早速ニ相濟申候条、大慶可被思

召候、爰元弥靜謐ニ罷成候、猶追而御上洛之砌可得御意

候間、不能腐毫候、恐惶謹言、

〔朱力斗〕  
〔元和元年〕

五月十六日

板倉伊賀守  
勝重(花押)

嶋津陸奥守様

貴報

1252  
〔御文庫ニ番箱家久公雲卷中〕「家久公御謄中ニ在リ」

以上

急度令啓上候、仍大坂落人之儀付而、土井大炊殿・酒井

雅樂殿方以書狀被仰入候、不及申候へ共被入御念被仰付

尤存候、委細從御兩人之書中ニ可有御座候条、具不申上

候、恐惶謹言、

〔朱力斗〕  
〔元和元年〕

五月十六日

山口駿河守  
直友(花押)

嶋陸奥守様

參人々御中

1253  
〔御文庫拾六番箱十二卷中〕

猶々有馬殿上洛之事、六月迄ハ可相延由候而、ミヤ

さき本城邊よりあかたへ參候夫丸罷歸候、又右馬允

殿ハ御上洛候へとも、大坂落城之刻ハ無御參着由候、

伊東殿ハ未出船無之由申候、以上、

態令啓入候、

一 大坂御城今月七日ニ落申候由、伊集院伴右衛門尉殿乘

舟今朝下候便ニ相聞候、伊半右衛門尉殿内衆も下にて

候間、定而御方へ可被參候、秀頼様はいかゞ御成候

哉、不相知候、御城ニ者火かゝり候、二ノ丸までハ右

馬允殿御内衆參候て見申たると、伊半右衛門尉殿へ爲

被申由候、

一 上洛舟御賦衆大野將監殿去十四日(美、津)へ參着候、本

田甚兵衛尉殿ハ此中赤江ニ御座候而、昨日被成相着候、

其外上洛衆一人も無御越着候、就其船賦之事大方之躰

候、

一 福崎新兵衛尉殿方便之賃舟、大方三十艘程下候由、爰

元申候へとも一艘も未參候、

一 賃船者當津へ十艘も其上も可有之与申候、若御雇候ハ

々十一端帆一艘ニ付舟床銀百卅目、加子一人ニ付二十

三匁宛、此内ニ而飯米筈まで調申候、必定御雇候ハ、

舟床ハ今少もさかるへきかと申候、右之賦を以舟之大

小者談合可有之候、爲御存候、又々新敷説候ハ、可申

入候、右之旨可然様御申上奉頼候、恐惶謹言、

五月十七日

有川与左衛門尉

貞政(花押)

比志嶋内藏允殿

肥後土佐守殿

人々御中

〔御文庫四拾八番箱中〕「家久公御譜中ニ在リ」

去十九日之書狀昨日廿三日令披見、先以海路御心安平戸迄御上之由、堀弥右衛門尉ニて口上条書并山口駿州之書狀致披閱候、

一兩 御所様□者去五日ニほした迄被成 御出馬、翌日飯守与哉覽へ御人衆被押寄及一戦、東國衆御粉骨之由、千勝万勢目出度奉存候、

一大坂御退治之御悦、兩 御所様御在京中御上候て 御目見得有度之由、御書中我等も尤ニ存候、弥右衛門尉も申候、貴所殊外御上洛御急之由承候、乍案中之御事候、衷其分兩 御所様東國 還御前ニ被成御上着候へかしと存事候、

一山口駿州方、貴所御手廻之衆計ニて惣軍衆被殘置、御上洛御急候へと被仰下候由、一段御懇之儀候、とかく

其元可然様被成御談合肝要存候、

一彼是御用之儀書中ニ者不得申候条、俄新納越後守爲使申付候、於巨細者可爲口達候、たとへハ今度上洛衆之躰を能く見申候へハ、依怙を専ニ仕、一日く〜と押移候、打立ニ者如此遅く仕、堀弥右衛門尉下向仕、大坂相濟候と申候へハ、皆々中途ニて承傳罷歸候、何共笑止之儀候、自今以後於此分者、御家之御爲ニ罷成間敷与存事候、

一我等事魔嶋ニ三日前爲御見廻罷越候、まこたちいづれもあひらしく候、東之丸之孫殿そと小瘡氣御つたり候へ共、是も可御心安候、何共御留主中無緩様比紀州・町勝兵ニ致談合可申付候、旁爲御心得候、恐々謹言、  
〔朱力キ〕  
〔元和元年〕五月廿四日 惟新(花押)

陸奥守殿

〔古御文書中〕「家久公御譜中ニ在リ」

猶々乍慮外、比志嶋紀伊守殿・伊勢兵部殿へ此由可被仰聞候、已上、

御上あまりおそく御さ候間、小早下申候、一刻も急御上可然候、

一去七日大坂御合戦之様子、定而はやくニ相聞可申候間、不委事、

一秀頼様御息八ツニならせられ候も、はや御首出、長曾

我部・大野道犬とらまへ出、何も御せいはいにて候、

此外頭、居所未相聞候事、

一眞田・後又兵・木村長門・薄田隼人うち死事、

一兩御所様七、八月迄も御在洛之由事、

一國々御仕置之儀未何共不相聞事、

一別ニ相替御沙汰も無之事、

一とかく御上存之外おそく御さ候間、早々御上洛待申候、

我等ハ吉田ニい申候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔元和元年〕

五月廿五日

羽越中

(花押)

嶋奥州様

人々御中

1256

〔御文庫二番箱家久公二卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

猶以山口駿河守殿方爰元之様躰委可被申上候間、可

被爲得其意候、以上、

今日陸奥守様尼崎迄御上着被成之由蒙仰候、遠路之處ニ

存候方早々御上洛、御造作御苦勞書中ニ難申謝候、將又

如示預候、大坂之儀早速落着仕、無是非躰ニ而御座候、  
委曲面拜ニ可奉得御意候条、此等之趣宜御披露所仰候、

恐々謹言、

〔カキ入也〕  
〔慶長二十年〕

六月二日

本多佐渡守

正信(花押)

伊勢兵部少輔殿

1257

〔古御文庫二十二卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

以上

昨日其地へ御着之由被仰下候、被爲入御情候故、存候方

早々御上着被成候、御父子様御前之儀者山口駿河守殿

申談、不可奉存疎意候、誠ニ久々ニ而面拜ニ可奉得尊意

候間、乍恐一入弥敷奉存候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔元和元年〕

六月三日

本多佐渡守

正信(花押)

嶋津陸奥守様

貴報

1258

〔御文庫拾七番箱十八卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

猶々御大儀にて御登跡重ニ存候、以上、

態以使札申入候、奥州様一兩日以前ニ御登被成之由、夜

1259

前於御城ニ承、驚入候、扱々不存候故以使者も不申上、無音仕候、今朝駿河殿迄申入候處ニ、其地へ御越被成之由、御歸迄ハ致遅候而、先令啓達候、内々御登被成候哉と無御心元存候處ニ、珍重不過之候、拙者儀駿河殿如御存知、當御城爲在御番去々年方罷在候、今度大坂之儀一途ニ罷成、天下泰平可爲御歸之候、其元可然様ニ御披露所仰候、恐々謹言、

「朱カキ」  
「元和元年」

六月五日

伊勢兵部少輔殿

渡邊山城守

茂(花押)

以上

「古御文書中」「家久公御譜中ニ在リ」

一書致啓上候、仍昨日者御馬御拜領被成、御珍重ニ被思召之由、御尤御座候、其段懇可申上候間、御心安可思召候、然者昨晩も致伺公、御見廻可申上處、伏見へ罷越更候而罷歸候故、其儀無御座候、將亦昨日者三種進覽致候處、御祝着被成由、忝奉存候、猶兎角致伺公御見廻可申上候、然而乍左如目錄進上申候、書狀之印迄ニ御座候、委曲期後音候、恐惶謹言、

1260

六月六日

正純(花押)

「口裏ニアリ」  
鳴津陸奥守様

人々御中

本多上野介

正純

以上

「古御文書廿二卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

爰元御上被爲成候を不存候而、御見廻をも不申上候處ニ早々御書中、過分忝次第ニ奉存候、然而大御所様御目見へ被爲成、殊ニ御馬御拜領被成、御仕合殘所無御座由、御満足通奉存候、何も以參上可申上候条、不能具候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「元和元年」六月八日

正勝(花押)

本多出羽守

鳴津陸奥守様

貴報

正勝

1261

「古御文書廿二卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々大御所様別而御懇切之仰共、尤左様ニ可有御

座事与存候、以上、

尊書忝拜見仕候、仍早々御上洛被成、則御出仕候處、御前御仕合殘所無御座、殊御馬御拜領目出度奉存候、右之分山口駿河守殿被申越候間、拙者式迄悦申御事ニ而御座候、罷上御見廻可申上候へ共、爰元町割以下ニ付、不得寸隙候間 乍存御無沙汰様御座候、何様御在洛中与風罷上、以面上可申上候間、不能具候、恐惶謹言、

「朱力半」  
「元和元年」

六月八日

長谷川左兵衛

藤廣(花押)

嶋津陸奥守様

貴報

1262

「古御文書廿二卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

貴札拜見仕候、仍昨朝被御咳氣ニ御座候由、無御心元奉存候、定而道中之御苦勞、御機遣被成候故ニ而可有御座候、緩々と御養生肝要之御事候、將又爲御慰之馬進上仕候処ニ、御祝着被成候由被仰下候、餘御慰之至ニ御座候、委曲面拜ニ可奉得尊意候条、早々御請申上候、恐惶謹言、

「朱力半」  
「元和元年」

本多佐渡守

六月十日

嶋津陸奥守様

貴報

正信(花押)

1263

「御文庫拾七番箱十八卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

「口切ル、」

- 一 今度大坂御城之衆合戦之様子、扱々昔ニも今ニも無比類手柄、筆紙ニつくしかたく候、
- 一 眞田左衛門・木村長門・後藤又兵衛・薄木田隼人右四人ハ五月六日ニ討死被仕候、古今稀なる働之由候事、
- 一 將軍様方之御旗元衆何も諸大名被成逃候、関東衆ハ今度於御城其糺計ニて候由承及候、
- 一 大坂衆手柄之儀中ノ不及申候、今度之□□御勝ニ罷成候へとも、大御所様御運つよき故ニて御勝ニ罷成候事、
- 一 秀頼様被成御腹切候時、御供之人衆書立進候事、
- 一 秀頼様御子息八歳ニ御成候を、京中車ニのせ申候て引わたし、六条川原ニて御成敗候、扱々むかし語ニこそケ様成物語共承候處ニ、物之哀書中ニハ難申候、若年之御事ニて候つるニ、御果きハ寄特成仕合、上下共ニ

感シ申候、

一 將軍様方之衆御旗元ニ而被成討死候衆書立進之候、

一 長曾我部殿六日之軍ニハ、度々大手から被仕候、同七日ニ落被申候て八幡ニてとらへ、二条御城之さくの木

ニしはり付被召置、三条川原ニて御成敗候事、

一 東堂和泉守殿人衆五千人、長曾我部手前ニて六日之軍

ニうちとり候、東堂新七郎殿・同二右衛門尉殿、御同

名之衆四人討死候、其外和泉守殿家中ニてやくニ立ほ

との人々者不殘被遂戰死之由候、

一 井伊掃部助殿日本一之大手柄ニて候、

御所方衆被申

候、爲御褒美金千枚・銀千枚被給候、扱々外聞御取

被成候、

一 和泉守殿も金千枚・銀千枚、御知行二十万石御給候事、

一 今度被成比興候衆ハ皆々知行被召上之由候事、

一 伊達殿ハ今度味方討被申候事、雖然 御前ハ能候へ共、

諸大名衆笑物にて、比興者之由御取沙汰之由候、ミカ

た討ニ被逢候人ハ大和之國衆神保長三郎殿と申ニて候、

人數二百七十人被召連候を、七騎ニ正宗殿うちなされ

たる由、無其隠候、

一 松平上総守殿今度一番備ニて候処、合戦ニ御あいなく

候、連々の様子ニ相違候とて、始 御所様諸大名下々

ニ到る迄取沙汰候事、

一 九州衆ニ長岡越中守殿計はずニ被成御合手柄候て、

御前御仕合能候事、

一 加藤左馬殿・黒田筑前守殿兩人 御所様御旗元へ無御

座候へ、今度之軍御勝ニ罷成間敷候へ共、兩人之手

柄迄ニて勝ニ成候て、 御前之御仕合無申事候、

一 大野主馬合戰場より落行候、于今行方不知、比興もの

とて申ちらし候事、

一 大野道見ハ逃候處、方々被成御尋候へハ、豊國之敷板

之下ニかくれ居候を見出候て搦とり箒ニ被入置候、未

成敗無之候事、

一 今度軍之儀者大野修理分別迄ニて候処、修理存分相違

仕候而未練仕、散々躰ニ而候つる由、中々可申様無

之候、はてきハ比興之様子古今有之まじきとの取沙汰

迄ニて候事、

一 秀頼様者殿守ニ火をかけ、何も一人も不殘やけ死可被

成御覚語候処、修理存分相違、 御姫様をたすけ申候

者、修理も其御かけニて命御たすけ候ハんと存、御姫

様を才覚申御城より出し申候へ共、 將軍様御納得ニ

不參、皆く被成御切腹候、如此候間、修理事永く失外聞候事、

一 於御城七日ニ野心衆、伊東丹後其外之衆ハ不知候、丹後ハ高野山ニ逃入候、又臺所仕候人野心ニて、臺所口へ火を懸候て御城焼立候、彼者ハ大閣様藤吉郎殿と申時より御年來ニ被召仕候者ニて候へ共、謀叛いたし候、か様成者さへ如此候間、其外ハ不及申候、

一片桐東市正被相果候、又弟之主膳ハ三日候て被相果候、又く市正子・同女房、右何も病死ニて候、さてく秀頼様御成果候て三十日も不過ニ如此之仕合、寄特成儀ニて候由申事候、

一 五月七日ニ御所様之御陣へ眞田左衛門仕かゝり候て、御陳衆追ちらし討捕申候、御陳衆三里ほとつゝにけ候衆ハ皆くいきのこられ候、三度めニさなたもうち死ニて候、眞田日本一之兵、いにしへよりの物語ニも無之由、惣別これのミ申事ニ候、

一 將軍様御籙元討死衆、小笠原兵部少殿・同子信濃守殿・野一色頼母殿・本多出雲守殿・松倉藏人殿・古田左近殿・服部作十郎殿・別所主殿殿・松平助拾郎殿・松平庄九郎殿・同平吉殿父子・安藤彦四郎殿・村藤四郎

殿・米倉小傳次殿・大久保内記殿・安藤次右衛門殿・山口伊豆守殿合廿人、

一 秀頼様五月八日未ノ刻御切腹、御袋様も御同前ニ候、大藏卿殿・右京大夫殿・三位殿(本マ)・韓長老・秀頼様御介借速水甲斐守殿・同おてきかい子・津川左近・大野修理・同信濃・毛利豊前・同長右衛門尉・竹田左吉・堀對馬・氏家内膳・伊東武藏・とい少五郎・片岡十右衛門・高橋半三郎・同三十郎・森長八・建部加藤弥太・藤四郎・竹田永翁・はい原八藏・同三十郎・小室茂兵衛・淺井喜八・同半兵衛・寺尾少右衛門・眞田大介

千帖敷ニて切腹之衆

左衛門子

眞野藏人・野々村次兵衛・堀田圖書

一 七人之組頭之衆内御供衆四人、青木民部ハ今度御使ニ出候て、其俣被留置候而 御所方へ居申候、伊東丹後・中嶋式部兩人ハ落申候事、

一 湯淺右近・赤座内膳行方不知候事、

一 御使番三原龜介京迄逃候而、長持之内ニ居申候ヲ聞付候へハ、内より出候て切相て相果候、

一 榎嶋玄番討死共申不知候事、

一 仙石宗也ハ、丹後へ逃申候由候へ共、未尋出候事、





「在御文庫ニ番箱他家文書中」 「家久公御譜中ニ在リ」

尚以頓而自是御左右可申候、其次第可被成御出候、  
以上、

一筆申入候、仍我等事今朝嶋津陸奥守殿へ御使ニ參候、  
就其貴殿同道可仕旨御意候間、乍御苦勞可被成御出候、  
恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔元和元年〕六月十二日

利勝(花押)

土井大炊助

山口駿河様

まいる

『児玉筑後譜中』

慶長二十年乙卯正月、公至自森江、利昌等從、○五月  
公復赴大坂、利昌又從蓋如前年六日、一説從發魔城而至  
平戸、前、亦聞城陷令兵多還、親帥小隊二十九日至大坂、  
六日朝 神祖賀之、利昌從行、十二日 公使利昌先還報  
事於 松齡公、而 公乃七月二十九日至自大坂、

『写兒玉氏藏』

尚々南部酒兩樽令進覽之候、聊音信之驗迄候、以上、

其後者御左右不承候、仍從 將軍様今朝土井大炊助殿御  
使ニ而被仰聞候様子者、我等着之儀三日以前被 聞召上

候、早々可被成御見參候処、依御不例御延引候之由 上  
意にて候、誠以忝次第難申盡候、可被成御高察候、將又  
將軍様爰許へ御逗留之儀茂未相究由候、猶巨細以糸書兒  
玉筑後守へ申合候間、不能一二候、誠惶敬白、

〔慶長二十年〕

六月十二日

陸奥守

家久(花押)

進上 惟新様

「家久公御譜中ニ在リ」

「三番箱中」

御上着遅引無御心許存候之処、一昨日預御左右榎承届令  
安堵候、昨日即至大坂可企愚書覚悟候之処、堅無用之由  
御内意之通申候間、任其儀疎意候様候欵、 將軍江御礼  
之御障明候者、以參心事可申述候、猶友枕齋可有演說候、  
穴賢、々、

六月十四日

〔如雪御判〕  
〔花押〕

羽柴少將殿

「古御文書廿二卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

「宛切テナシ」

謹言、  
ニ御書付早々可被成くり上候、委細御報ニ可承候、恐々  
「朱カキ」  
「元和元年」  
六月十四日  
安藤對馬守  
重信(花押)

土井大炊助  
利勝(花押)  
酒井雅樂頭  
忠世(花押)

「古御文書廿二卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

尚以大坂<sup>の</sup>之落人弥被入御念御改、被搦候て可有御  
上候、以上、

急度申入候、仍從去々年當春迄之間ニ、御領分より大坂  
江奉公ニ罷越候者於御座候者、注交名可被成言上候、今  
度在所へ立歸候者も可有之候、左様之者をハとらへ被爲  
置候哉、若行衛不相知妻子計殘置候者、彼妻子不致闕落  
様可被仰付候、妻子無之者ハ如何様成親類御座候与、具  
ニ御書付早々可被成くり上候、委細御報ニ可承候、恐々

「御文庫拾七番箱十八卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

敬白 天爵起請文之事

一 去年爲質人被召寄貴邦上者、永可爲在鷹嶋之處、案外  
ニ御暇被下致歸國、加之琉球國之諸置目等三司官与可  
致熟談由被 仰付、并過分之御知行被宛行、以何如斯  
之可奉謝 御厚恩哉、永々代々奉對 御當家不可奉存  
疎意之事、

一 奉對 惟新様 奥州様若逆心之輩有之者、縱縁者親類  
知音たりといふ共不致同心、則可致言上候事、

如仰其以來者不得御意候、昨日 大御所様被成御參内候、  
即致御供候、御機嫌能御座候間、可御心安候、然者 公  
方様へ未御目見無御座候由、少御咳氣故と令察候、此比  
ハ表へ可被成御出候条、可爲御目見と存候、御隙明次第  
御出京奉待候、近日相積御雜談可申承候、御床敷事者山  
々御座候、小姓共能興行可仕候、何事も以貴面可得御意  
候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「元和元年」

六月十六日

藤和泉守

(花押)

嶋奥州様

貴報

「家久公御譜中」

一若球國之輩忘御厚恩企惡逆者有之而、自然國主雖爲其旨同心、於拙身者屬薩州御幕下、毛頭不可相隨逆心之無道事、

一此方之儀、何篇以讒訴致言上輩有之時者、可遂御札明事奉頼候事、

一此起請文之草案写置、讓与子々孫々、奉對 薩州不可致不忠之旨可令相傳候事、

右之旨若於僞申上者、

▽<sup>(牛王)</sup>上者梵天帝釋四大天王、下者堅牢地神、別者當國鎮守

波上權現并奧八幡大菩薩等、七宮大小之神祇、大弁才

天部類眷屬、惣者日本國中諸大神祇 諏訪大明神 天

滿大自在天神、御部類眷屬等、可蒙御罰者也、

仍起請文如件、△

佐鋪王子

朝昌<sup>(花押)</sup>

〔血判〕

慶長二十年六月吉日

高崎大炊助殿

町田駿河守殿

「正文在彪勢龍右衛門」

猶々雖輕少候、御帷子貳進上候、誠表御音信候、以上、

態以使書可申上覚悟候處、幸此普賢院罷下候間、捧愚札候、

一海上無吳儀一昨十九日大坂へ令着津候、則伏見へ罷上、於彼地下々こしらへとも少々申付、追付駿府へ可罷下候間、重而様子委可申上候、

一内々以御談合、眞福寺へ從紹益書狀進之候、彼返書今度令披見候處、即本佐州へ被申入以御仕合、兩御所様へ可有言上由候、此書面を見申候時へ、從此方存企懇望申ニ相似候、眞福寺より度々依内意申入候處、少相違之様候へとも、弥可然様可入念申候間、可御心安候、眞福寺之書狀爲御一覽進獻候、被成御覽候而紹益へ可被遣候、

一有馬次右衛門尉江戸ニ屋形普請爲見廻、伊勢兵部遣置候処、内々注進申候へ、妹之儀 常陸様へ可被組御縁之由、堅相定候与承付たる由申越候、我等存候へ、妹ハ年比相替候間、めいの事にて候へんと存候間、何も供之女房共可入申候間、内々御心付尤候、弥承合重而

委細可申上候、誠惶敬白、

〔朱力半〕

〔元和元年〕

六月廿一日

陸奥守

家久(花押)

進上

惟新様

1273

〔御文庫三番箱宝鑑中〕「家久公御譜中ニ在リ」

上着之由珍重、至関東御發足何比候哉、炎天之時節、別

而御勞煩之事察申候、將又兩種双樽乍輕微進之候、万々

向顔之時、近年相積候事可申承候、かしこ、

〔朱力半〕

〔元和元年〕

六月廿四日

信尹

鹿兒嶋少將殿

1274

〔義弘公御譜中〕

〔寫在梁瀬善右衛門〕

猶々當年上方者霖雨如何候之哉、爰元者六月之末迄

つゆ晴不申候、如此ふりつゝき儀者、近年めつらし

く候、下々の衆餘なる雨ニて迷惑仕と承事候、

今月六日之書狀同十七日到來、細々令披見本望之至候、

一先以去五日 大御所様御目見得相濟、殊御機嫌能御座

候而、遠路早々被罷上辛勞之由直被 仰出、誠目出度

御仕合不過之候、然者今度貴所出陣ニ付、我等別而肝

煎申候由、則被及聞召候旨 御説にて候由、一段忝奉

存候、扱々如此何事も無隱被聞召入儀候条、連々御心

持聊無御油断様ニ御分別尤存候事、

〔本ノマ〕

一 如承大坂兩度之 御出馬ニ遠國故咎ニ不被合せ候条、

御前之仕合も如何可有御座哉与、内々心遣ニ存候處、

結句不混他御念比共外聞此事候、殊馬舟いまた不致着

岸、橋本邊方かちにて被參候由、本多上州御取合故、

追付御秘藏之御馬二疋被成御引せ、いつれにても所好

次第与 上意ニ而、鹿毛之御馬御拜領之由、誠望之ま

々之儀、餘天道おそろしき御仕合感入事候、

一 右如申候聊之儀も不隠、則被 聞召入儀候間、能々日

來之御心持可入事共候、題目大名衆御參會之刻、かり

そめの御はなしにも涯分御遠慮專一候、御供衆迄其心

得を以、所詮他方之衆ニ入魂ふりにて着會候儀、可爲

無用候条、弥如御法度堅被仰付可然存候事、

一 諸國ノ之畫圖被召出ニ付、分國之畫圖も同前ニ可有

進上由御承ニ而候之哉、先年江戸へ被成御進上候繪圖

之趣、相違候て、如何之由尤之至候、則其繪圖之留塵

鳴へ在之事ニ候之間、今度被差上候事、

一 公方様大坂へ可被成御座候様ニ歴々被成御沙汰候哉、  
左候ハ、當秋方欵、來春欵、御普請之企於有之者、如  
書面弥金銀之可入事、不可有際限候、然時者兼日之御  
たくハハ少も無之事候間、出銀ならてハ御普請之調  
法別ニ可被成様無御座候、就其紀州・勝兵ニも致談合、  
諸待出物之覺悟無油断様ニと可申觸候、藏入代官ニも  
收納方緩候てハ、可爲笑止由堅可申付候、巨細者老中  
衆方可被申上候間、不能重筆候事、

一 兩 御所様當秋迄、可被成御逗留様御取沙汰之哉、貴  
所事も其時分迄於御在京者、不及申候、自然先可被罷  
下由被 仰出候者、翌日御下向尤存候、若何かとして  
御暇出候後、一日も在京者可爲御無用存候、其故者京  
衆のならひにて、爰かしこへ御遊山ニ申請馳走ふりに  
て、畢竟我々の依怙ニなり申候やうにと才覚可仕事、  
先年より御存知之前ニ候間、乍不申遮而御下向御急候  
而、題目國之置目等、彼は無油断様可被仰付候事、專  
一候、猶具兵少まで申遣候条、不能細筆候事、

一 大坂落人稱被成御改之由得其意候、自然當國之かたハ  
らなとへ身をかくし來候而、罷居者在之者、老若男女  
によらず召捕、早々可差上旨役人中ニ申渡候、何共甌

・硫磺・竹嶋・屋久・種子・七嶋・琉球邊ニ到迄堅被  
申遣候へと、比紀州・町勝兵ニ致談合候事、

一 船作之事談合之上を以、魔嶋より急度諸所へ可申付由  
候、次ニ去年者加子銀納遣方被遂算用、其外諸浦之加  
子改之儀被相究、今度上洛舟之加子其元ニ而之改帳ニ  
引合せ、重而速算用可有之由、則其通役人中ニ申理候  
条、後日之御算用尤存候事、

一 琉球納方之儀如承、去年當年兩度之出物ものそかれ、  
加之さハかしき事をも遠方故不存、ゆるくと彼國之  
衆者被罷居候条、毎年之上納者銀子三十二貫目之究ニ  
候へとも、當年者分而頼之由被申理、一倍にして六拾  
四貫目可致上納由とよミくすくうけあひ候て、爲使如  
琉球歸國之間、定而其分者吳儀有間敷候、彼是巨細者  
魔嶋より可被申上候条、爲御心得候事、

一 今度薩厂馬何も用ニ立たる由、各取沙汰被成候哉、就  
其御國元之馬之儀、心持可入由尤之至候、如御存知福  
山野を始諸所之牧念を入候ハ、御爲ニ可罷成事ニ候、  
誠御分國者他國ニかハリ牧數多在之事候間、御馳走候  
て被仰付候者何より御爲ニ可成事眼前之儀候間、弥老  
中衆より貴所之地頭并牧別當ニ能く被申付候様ニと可

致催促候、將又知行取も馬を可持ほとこの分限之衆ニ者、連々一疋宛ハ必軍役ニたて置候様ニ、是又紀州・勝兵前より被申渡候へと談合可仕事、

一大坂思召俣相濟申候御祝儀、愚老も申上候へてハと、被仰下得其意申候、然間此度判紙上げ申候条、よろしきやうニ兵部少ニ可被仰付事頼存候、我等存分共候者案文も相添候へと雖承候、別ニ者御用も無御座候、御悦一篇之儀迄候間、其御心得を以進物等も大方時宜ニ成合申候様、乍御造作頼存候、巨細者兵部少迄申遣候間、定而可得御意事、

一江戸へ土持平右衛門尉被差下候哉、其元繁多之時分、御懇情之儀候、定而貴所江戸迄可有御下与、御料人も内々被相待候はんニ、京より御暇与きかれ候ハ、無見參、床敷可有之与推量申候事、

一鷹嶋一段無事ニ候、孫殿何もくけなげに御座候間、可御心安候、我等事御留守中鷹嶋へ節々見舞可申由得其心候、誠極老ニ而公界ハ斟酌千万ながら、今度弥御頼之由、分而被仰越候、せめてゆるくと致在國儀候間、不顧老屈之躰、しけく見舞可申候、いつれとも御留守之儀ハ紀州・勝兵被罷居事候条、何篇遂談合無

緩様ニ申付候事、

一今度其元御仕合よき爲御祝儀、白鳥一ツ并諸白樽一荷送給候、祝言与申遠來与申、旁賞翫不斜候事、

一其元たはことくしくはやり、其匂ひに迷惑被成之由尤存候、いつれ共たはこの儀者、他國之人者なにと取持候共、御供衆歴々之事者神文之上にて候間、不及申候、或又小者、或人足以下も自然世上ニはやり候とて大方之心得を以のミ候ハ、其科通間敷由よく被仰聞可然存候事、

一幾度申候ても今度上洛衆之仕たて、後日御分別可入儀者此事候、

先書ニ巨細如申候、貴所御下向之刻、是非共被成穿鑿、打立之遲速聞召候へてハ、向後俄之儀も在之者、其時分必定さハリニ成可申与存候、委敷様子者はや右ニ申候条、先大方ニ候事、

一琉球傳ニ參候唐船之儀、長谷川左兵衛佐殿より彼唐人共心次第早々致商賣候様ニと被仰候、其狀先日從中途被遣候、隨相届候、紀州・勝兵より其分ニ被申付候、併向後大事之儀候間、長谷川殿書狀爲證跡不失様ニ召置候へと老中衆ニ申渡候、如書面御遣物ニ可罷成似合

之物共在之者、被求置候て肝要之由、是又麿へ申理候、  
 乍去無然、舟にて、爲何珍敷唐物も無之様ニ承候事、  
 一將軍様御少惱御快氣にて、早々御目見得相濟候へんと  
 存事候、左候ハ、又其御吉左右承度候間、大学ニ細  
 々被仰合御下待申候、猶追々可申承候条不詳候、恐々  
 謹言、  
 「朱カキ」  
 「元和元年」六月廿六日 惟新

陸奥守殿 まゝる

「御文庫廿三番箱十七卷中写也」「家久公御譜中ニ在リ」  
 急度申入候、仍たはこ吸之儀、弥御法度ニ被仰出候間、  
 於御領分たはこ賣買、同作之儀共以可被致停止旨 上意  
 候条、可被成其御心得候、恐々謹言、

「朱カキ」  
 「元和元年」六月廿八日 安藤對馬守 重信

土井大炊助 利勝  
 酒井雅樂頭 忠世

鳴津陸奥守殿

人々御中

「古御文書廿三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」  
 尚以存之外早々被成御上、去とてハ寄特成御事共ニ  
 て御座候、如御書中大坂早速致落居、何方も目出度  
 存候、以上、

遠路寄思召預御使札、忝拜見仕候、殊被成御音信与、御  
 帷子拾之内單物五ツ、何も御念入たるを被懸御意、誠に  
 節々之御心付、重々忝存候、隨而御斟酌御座候てより御  
 國を被成御立、早速伏見迄御上着、則去月五日ニ 大御  
 所様へ被成 御目見候處、 御前之御仕合殘所無御座、  
 御馬共御拜領之由、御外聞与申、我等式迄目出度存候、  
 將軍様御前之儀も弥御仕合能有御座と存事ニ候、將亦  
 此表御屋敷一段と御無事ニ御座候、御作事も殊外はか行  
 申候、定而當秋ハ此表へ可被成御座候哉、其節以面萬可  
 得御意候、委細者土持平右衛門尉殿可被申候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
 「元和元年」壬六月朔日 羽柴左衛門大夫 正則(花押)  
 鳴津陸奥守様 御報

「御文庫拾七番箱十八卷中」「家久公御譜中ニ在リ」  
 以上

急度以書狀申上候、

一昨日此方へ罷越、山口殿相待申候處、夜入候て此方へ御越之故、今朝こそ佐州老へ罷出候事、

一御条數之旨二ヶ条申候處、從 御城急ニ御用之由候而追々御使にて候ニ付、先々 御城へ參上候、然者二ヶ条目ニ彼一儀御座候、委申入候處、就其被仰候、大野首馬船にてのき候事必定にて候、然間薩厂のかた琉球などへのき可申由、將軍様被成 御意候間、よくく被入御念、何とそ候て御とらまへ候へ、可然候由、佐州被仰候、大野首馬薩厂へ申通候事を此中佐州ハ少も無御存候つるよし、ことくしきせいもんにて被仰候、將軍様御詮ニハ、さつまへ連々申通たる事ニ候間、治定のき候へんと被成 御意候由被仰候、早々 奥州様へ申入、薩厂へ申遣候而尤之由被仰候、兼而おち人之儀へ細々被仰遣候へとも、此様子又遮而被仰遣尤ニ奉存候、御使者市來八左なとよく御座候へん哉、市八左此間ちと病氣ニも候間、彼是ニ御下候へかしと存候、我等も先可罷歸候處、右之御条書佐州御覽被殘候、今晚か明朝か可被聞召由候間、待居申候、

一羽越中守殿より如此被仰候而御狀被下候、明日之晩方

被成御出候て、御暇乞尤奉存候、我等も今晚隙明候へ、夜中ニも可罷歸候、又明朝迄罷居候へ、明日ひるハ必々可罷歸候条、越中殿へ御暇乞ニ御出候へ、先内々明日之晩可被成御出由被仰遣、尤ニ奉存候、若又彼御方隙入候へ、定いつ比御出候やうにと可被仰候条、先前かちと可被仰遣候、

一先日我等御使申候てッほうの藥目之御書付、御もたせ候間進上候、慥御上尤候事、

一今度御条書之内隣國衆御間がらの事、よくく佐州老被聞召置、彼むねニおさめられ候ておかせられ候へハ、御ため可然由駿州被仰候、色く出合共有之由候間、肝要ニ奉存候、何様佐州老懸御目こまくと可申遣候、

此旨可然之様可有御申候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
一元和元年〕

壬六月二日

伊勢兵部少輔

貞昌(花押)

別府舍人助殿

人々御中

1278

『大乘院文書』

尚々御酒樽一荷送進之候、書信之驗迄候、

其已來令無音候、仍此方仕合罷 兩御所様別而忝儀不大



形候間、諸事可安心候、將又御祈禱之札守被差上、一段祝着申候、弥御懇祈所希候、次諏訪座主へ茂被相心得憑入候、恐々謹言、

〔元和元年〕

閏六月四日

陸奥守

家久(花押)

大乘院

玉床下

〔家久公御譜中ニ在リ〕

1279

〔御文庫拾六番箱十二卷中〕

今度從鹿兒嶋使被差上候ニ付、被成下 御書、謹而頂戴

仕候、仍 奥州様御上洛以後之御左右未相聞得申候哉、

御心遣之由御尤ニ奉存候、雖然此方 御目見得相濟、追

付御左右被仰下候間、可被聞召達候、弥御仕合能御座候

間、可御心易候、將又先日新納越後守爲 御使被成御上

候時分、細々被 仰聞趣承届候、今度 奥州様御上洛之

御供衆打立之しだて咲止成様子ニ御座候つる由、絶言語

候、御下向之節是非共及御沙汰候へてハ、後日之御爲可

爲咲止候、内々 奥州様へも申上候、御國本之儀者、

惟新様被成御座御事ニ候間、諸事可被仰付候条、緩有間

敷候、此元何篇氣遣之段、可過 御高察候、誰々茂御爲ニ

可罷成与存候人一人茂見出不申候、其故者當座之被隨

御意迄ニ而、御爲ニ可成儀共一言茂可被申上人無御座候、

如此候而者弥御氣遣ニ可罷成候、猶於様子者市來八左衛

門尉申含候間、可被聞召届候、此旨宜預御披露候、恐々

謹言、

閏六月六日

伊勢兵部少輔

貞昌(花押)

比志嶋内藏允殿

比志嶋内藏允殿

貞昌

伊勢兵部少輔

1280

〔御文庫二番箱家久公〕卷中〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

以上

急度申入候、仍貴殿御分國中居城をハ被殘置、其外之城

者悉可有破却之旨 上意ニ候、右之通諸國へ申觸候間、

可被成其御心得候、恐々謹言、

〔朱力字〕

〔元和元年〕

壬六月十三日

安藤對馬守

重信(花押)

土井大炊助

利勝(花押)

鳴津陸奥守殿

酒井雅樂頭  
忠世(花押)

「家久公御譜中」

「正文在東郷八左衛門」

猶々任見來、眞經一桶令進覽候、誠御音信之驗迄候、  
以上、

去月廿六日之尊書、今月十五日到來、具致拜見候、仍  
爰元相替儀無御座候、

一大坂落人之儀ニ付、分國中嶋々迄茂被入御念之由御尤  
候、重疊如申上候、若々何方へ茂隠居候而、從他方被  
致言上共候へハ大事之儀ニ候之条、弥無御油断可被仰  
付候、先書ニ申上候様ニ、今度本佐州於 御城被仰候、  
大野主馬必定船にてのき申之由候条、別而可被仰付候  
事、

一土持平右衛門尉江戸へ爲使差下候、昨晚罷上候、彼地  
無事之由候、妹姪女何茂一段息災之由申候、貴翁様へ  
茂ふみにて被申上候、則文箱進上申候之事、

一兩 御所様御逗留何迄共未相知申候、七月盆過候而

公方様者江戸へ 還御之由申候、來月末ニ者涼く可罷  
成候間、定可被成 還御と存候事、

一最前者大坂へ 御所様可被成御座様ニ雖申候、頃者其  
沙汰無御座候、松平下総守殿御城預にて被移候、御普  
請之儀茂とかく沙汰無御座候、上様御城ニ不罷成候  
者、指たる御普請者在之間敷と存候事、

一鹿兒嶋へ節々被成御越、諸事被仰付候て可被下由申上  
候處、被成其御心得之由、忝奉存候事、

一今度大坂 思召候ニ相濟申候、御祝言被仰上可然存候  
由申候処、早々御判紙御上せ候条、御狀并御進上物相  
調進上可仕候、可安御心候事、

一從琉球去年渡唐之船去月琉球へ歸帆之由申候、然者從  
唐一切請付不申之由、町勝兵・比紀伊守方申越候間、  
其段山口駿州へ申渡候事、

一羽柴越中守殿へ御狀被進候処、はや下國候、御息内記  
殿在京之儀ニ候之間、則渡進之候、定從小倉可被成御  
返事存候事、

一鹿兒嶋娘共皆々無爲ニ候由被仰聞候、忝奉存候、弥被  
添御心候而可被下候、猶奉期後音候、誠惶敬白、

〔朱力平一〕 陸奥守  
〔元和元年〕

進上 惟新様

閏六月十六日

家久(花押)

「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々來月者諏訪之御祭礼ニ付、早晚衆中之躍在之事  
候へ共、當年者貴所御留守之儀候間、衆中躍者先被  
相留候へと老中衆へ談合申候、乍去御存分共候へ、  
追而可被仰下候、如其可申付候、百姓之躍者旧例迄  
ニ小路にて躍申候而可然候へと申事候、旁爲御存  
知候、

幸便之条企愚翰候、

一市來八左衛門尉一昨日廿三日致下着、去四日之御札  
令披見候、先以口上之趣委細承届、何も得其意候、折  
節紀州・町勝兵も當所へ罷越被有合候間、彼是懇遂熟  
談候条、可御心安事、

一將軍様御目見得仕合能相濟候由、先日巨細被仰越、誠  
老後之安堵此上有間敷候、殊倍諸大名衆を御念比之由、  
御外聞不過之候、就其弥何篇被入御念、御分別可爲肝  
要候事、

一御留主中聊無相替儀候、殊更孫殿たち一段勇健ニ御座

候、東之丸御料人之小瘡、最前者かミの内不殘皆こう  
ミ申候つれ共、此比者はや平愈申候条、目出度存候、  
我等も屬嶋へ節々見廻ニ相越、諸事紀州・勝兵ニ致談  
合候、惣別國元之儀少も無由断老中衆被申付候、是又  
爲御存知候事、

一隠岐守様を被進候御馬我等ニ下預候、一人見事之馬ニ  
て候、扱者此比東國を被召上、別而御念被入たる馬之  
由、御書面并八左衛門尉物語巨細承候、何共隨分可致  
秘藏候、次ニ帷子五ツ内單物二ツ、其外生鱧七本被懸  
御意候、誠至遠方御事繁時分、御志之程祝着ニ存候事、

一たはこの儀天下御法度之由、諸國へ被 仰出ニ付、御  
奉行衆を至貴所被遣候廻文之趣、具ニ致拜見得其意申  
候、弥以爰元之儀其分ニ堅可申付候、如御存知たはこ  
の儀者、是非共御法度堅固ニ被仰付候へて、以來可  
爲笑止儀多々在之由、此中我等申候つる、乍案中其段  
聊無相違与存事候、御分國中者御法度稠候へ共、求麻  
を于今もたはこ商賣ニ通候由内々承付候間、笑止ニ存、  
比紀州・町勝兵へ談合申、一昨日廿三日猿渡新介長壽  
殿爲見廻求麻へ差越候間、内藏助殿迄此元たはこ堅法  
度申付候条、自然其表を商人衆なとたはこの荷物此表

1283

「古御文書廿三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

一書致啓上候、仍明日朔日於二条之御城、御能御座候間、

御登城被成御見物御尤御座候、左様御座候者、少はやく

御登城可被成候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔元和元年〕 後六月廿九日

正純(花押)

鳴津陸奥守様

人々御中

本多上野介

正純

1284 「家久公御譜中」

家久在洛之間、毎有舞樂徵看觀之、兩御所之恩遇其深  
高實泰山滄海也、

1285 「義弘公御譜中」

「此本在伊作多寶寺」

隅州願成寺鐘銘

隅州帖佐郷願成寺者、

前薩隅日三州太守惟新尊君所草創之精廬而、運譽上人修  
念佛三昧之道場也、草創未幾殿堂門廡漸成、庖廩井竈具  
備、於是乎安千佛於寶座、香燈不怠、百尔器備僧寶亦足、  
恃以無洪鐘、爲闕典矣、

尊君命治工之善於範圍者、新鑄洪鐘懸之小樓、以令諸僧  
警晨香夕誦之時而鞭其後者、可謂其志深矣、諸士之各有  
其業者聞此鐘聲、自起吹燈勒之不怠、莫不成其業矣、若  
夫農與工商放於利而行者、亦聞聲而遠塵離垢、偏赴佛地、  
加之人人勤其業而庶且富者、是皆

尊君信力之所致也、雖曰後五百歲、人皆樂其遺化、沐其  
餘澤、愈久而人愈思慕焉、愈遠而人愈欽仰焉、大覺世  
尊之所謂現世安穩後生善處、金口要文復奚疑、

我君威武 能屈人兵 歸依三寶 意抽至誠

草創精舍 掃棘擺荆 命巧治者 新鑄華鯨

聲聞兩岸 響徹八紘 警發蒙昧 引接迷情

六窗深閉 一聲忽驚 南南北北 日日送迎

霜晨月夕 浦浦鏗鐘 下自士庶 上至公卿

聞者遺世 何願不成 今此蓮社 不虛其名

一鐘之德 安國安氓 何止孫子 千万年榮

慶長二十年乙卯七月初 前建長文之玄昌謹誌之

「御文庫三番箱宝鑑中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

今度御上洛之由珍重存候、尤以參申度候へ共、御透不存候故、先一書申入候、然者此帷子五重乍輕少進之候、巨

細之段池坊ニ申合候間不詳候、かしこ、  
〔朱カキ〕  
〔元和元年〕 初秋二日  
〔良愍親王御判〕  
〔花押〕

松平陸奥守殿

〔義弘公御譜中〕  
〔正文在巻本〕

爲大坂表落居之祝儀、紅糸廿斤并銀子五十枚到來、悦思召候、猶本多佐渡守可申候也、

〔朱カキ〕  
〔元和元年〕 七月二日  
〔秀忠〕  
〔墨印〕

鳴津兵庫入道殿

〔古御文書廿三卷〕「家久公御譜中ニ在リ」

返々昨日者他出仕、御礼遅々背本意候、及御報間敷候、

昨日者思召寄爲御音信、諸白老荷被懸御意候、御懇情之義難申謝候、何も与風參候而可得貴意候、頓首、

〔朱カキ〕  
〔元和元年〕 七月四日  
西少納言 時直

〔在口裏〕  
鳴奥州様  
人ニ御中

時直

〔御文庫三番箱義弘公三巻中〕「義弘公御譜中正文在巻本トアリ」

猶以早晚々被爲入御念候段、書中ニ匣申謝候、將又去月廿七日ニ於二条御城、齡仁之舞御座候つる、今月朔日ニハ觀世・今春御能仕候、七夕八日ニハ伏見にて御能御座候、陸奥守様如何ニも御機嫌能御遊覽

被成候、以上、

追而陸奥守様頓而御暇ニ而御下向可被成候間、可被仰達候、隨而不物ニ候ヘ共、當夏之鱈五本進覽、餘

尊書拜見仕候、仍今度大坂早速被仰付候爲御祝儀与、御使者就中御太刀一腰・御馬代銀子五拾枚并紅糸廿斤進上被成候趣、山口駿河守殿相談達 上聞之処、遠路被爲入御念候段喜被思召、 御内書被進候、然者此度陸奥守様存之外早キ御參陣被成候處ニ、無程大坂落居仕、如貴礼年來思召之通、御殘多御座候ハんと申御事候、然共不計仕合ニ御座候キ、隨而私ヘ御太刀一腰・御馬代銀子拾枚被下置候、御懇情之至過分忝拜領仕候、委曲爰元之様躰御使者山口駿河守殿方可被仰達候条、奉省略候、恐惶謹言、

「朱力半」  
「元和元年」

七月九日

鳴津兵庫入道様

貴報

本多佐渡守  
正信(花押)

「義弘公御譜中」

「正文有之」

已上

先書ニ如申上候、若用もや御坐候と存、大學坊留置申候ヘ共、別ニ子細も無之候間、先差下申候、仍從懸川宿此方迄御遣候間、則吉田九郎右衛門尉大學坊相付下申候、別ニ從懸川様子も無御座候、將又此表之儀此中同篇之躰ニ候、次去七日於伏見御能爲見物、各諸大名祗候候、我々も罷出候刻御法度條々被 仰出候、其御条書進献之仕候、京中にも種々被 仰出候由候而、下々取沙汰申事ニ候、猶大學坊ヘ申合候条、不能書載候、誠惶敬白、

「朱力半」  
「元和元年力」  
七月十日

陸奥守  
家久(花押)

進上  
維新様

1291 「家久公御譜中」

慶長二十年七月十三日、  
今上皇帝改年號爲元和元、

1292 「殉國名數中」

元和元年乙卯

七月十八日、吉富大藏桂太郎兵衛忠詮臣にて、跡を追て殉死、年四十二、

1293 「桂叻譜中」

元和元年乙卯七月十八日、於隅州高山病死、年五十八、  
法號龍泉道活、家臣吉富大藏追跡殉死、年四十二

1294 「古御文書廿三卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

猶く一昨日者色く忝存候、く、

一昨日者御心閑御物語共承候而難忘存候、仍廿一日ニ者  
從早天光儀奉待候、左様ニ御座候者朝御膳此方にて可進  
候、猶道正老迄申入候条、不能一二候、頓首、

「朱カキ」  
「元和元年」 七月十九日 時直

「在口裏」  
嶋奥州様

人々御中

西少納言

1295 「御文庫三番箱中」 「義弘公御譜中ニ在リ」

爲音信段子三十卷并南蛮菓子四壺遠路到來祝着候、尚本

多上野介可申候也、

「朱カキ」  
「元和元年カ」 七月廿三日 「家康ノ墨印トミヘタリ」

（推新）  
意眞

1296 「在官庫」

以上

急度申入候、大坂古參之者ハ、望次第可被相抱之旨 上  
意候之間、可被成其御意得候、不及申候へ共、右之地新  
參之者ハ御無用候、恐く謹言、

「朱カキ」  
「元和元年」  
八月廿四日 安藤對馬守 重信（花押）

土井大炊助 利勝（花押）

板倉伊賀守 勝重（花押）

本多上野介 正純（花押）

嶋津陸奥守殿

人々中

「此正文御文庫二番箱家久公一卷中ニ在リ、家久公御譜中ニ在リ」

1297 「御文庫拾六番箱十二卷中」

猶く 御前ノ進物等少分ニ候ハ、なを人々先ニ御出  
候か能候、しん物もかろし、又御目見へもおそく候  
て者、しよくなりかたき事のミ候、

態飛脚にて申越候、しゆり殿上方にて 御前仕合能御  
暇出、先月廿九日ニ出船候て下國の由あひきこへ候、  
定而船中するく御下候ハんと申事候、

一 公方様今月四日ニ此地へ御付被成候、此表一しほ無事  
ニ候まゝ、心やすかるへく候、しよくかハる事なく  
候、

一 諸大名衆此地にておつねんあるへきよし申渡し候、そ  
れニ付しゆり殿も越年ニ御參候て、よく候ハんよし、ち  
るん衆中おほせ候、そのちなに事をもとり置、さうく  
しやうらく候てしかるへき由被仰付候付而、態道具者  
吉左衛門くたし候、かミかたにて御ちんのはすニこそ  
おそなハリ候共、ちぬん衆中ないしうなと候処、諸大  
名衆よりおそく候てしる人中ない意も徒ニ成候、其上  
御前仕合もきつかハしき事にて候、いつも上洛之時ハ  
下くしたく等不調候なと申付延引候へは如何候、先  
しゆり殿てまハリ計にてせき一そうニる數たてさせ、  
かるく上洛候て可然候、又用之事共被仰付候ハん  
者をは、跡船にて追く上り候様ニきもいりしかるへく  
候、十月中ニ國元出せん候て能候ハんと申事候、さり  
なからまつりまへほしニ入候てハ不成由申候、それハ

ほしちかへなと候へは、くるしからず候由申候、もし  
まつりまへにハかれこれなりかたき事にて候ハ、霜  
月二日、三日之間ニかならずく出船有へく候、いつ  
も上洛の事者いんきにて申候ハ、爰元のはすさういニ  
てめいわく申候まゝ、態彼吉左衛門くたし申候、此者  
其元へ三日召置候て、上洛のしふん日げん談合あひす  
め候て、則此地へこし候へく候、左様ニ候て爰元その  
かくこさせ候まゝ、爲心得申越候、

一 諸大名衆先ニ此地へ御くたり候やうニ肝煎尤候、な  
ミよりおそく候ては、出仕之時も又御暇出候時分も、  
そのぎんニ有事候間、とかくおそく候てハ笑止千万申  
まてなく候、

一 さから殿このたひ御ちんのしふんもはやく上り候て、  
御せんの仕合能、殊拜領の物數くにて外聞能歸國にて  
候、追付爰元へ下候のやうニ申候、此ほと又使之者上  
り候、何共ゆたんなき躰と見え候、急度被上候か必定  
たるへく候、豊永五助と申者、御還御の時分下候か誰  
そ内濟共候哉、則爰元打立上洛申候、相良殿拜領之物  
金百枚・袴十ヲ・帷子十ヲ・道服五ツ被下候由申候、  
尚重而めてたくかしく、



八月廿四日

お

川崎大膳殿

き

い藤主馬殿

長倉左衛門尉殿

肥田木圖書殿

「元和元年十月三日ノ書ト參照シテ同年ナルコト知ルヘシ」

1298

「御文書廿三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

去歲以降上方就于乱劇、御上洛之旨傳承、晝夜心遣千万  
令存、立願抽丹誠訖、以其憤事好早々御歸國、珍重多幸、  
抑去春以御兩使朕相續之儀被仰下、至幸々々、此等之御  
礼可申達處、依爲遠隔海路延引非本懷、明春早速以使華  
可令啓、積鬱之外無他、將亦不腆之方物錄于別楮、聊表  
御祝儀計候、猶使者演說省略之、誠恐誠懼不宣、

「朱カキ」

「元和元年」

季秋初三日

中山王

尚寧(花押)

進上 羽林家久公

1299

「家久公御譜中」

「正文在下町納屋頭山口林太郎重久伊左衛門」

覚

一下納屋より年中商買方ニ付役義被定置候間、少も無未  
進、其年々ニ浦奉行へ可致合点事、

一魚塩之賣買納屋主執被仰付候間、所中并田舎方々荷賣  
之ものも、なや衆へ遂案内可致賣買事、

一魚塩船自他之諸浦ニよらす可漕來時者、勿論納屋衆可  
買執、たとひわきより買ものありとも、納屋主執不存  
ニハ可爲曲事之事、

右如相定候堅可被仰付者也、

元和元年九月十八日

伊兵部少輔□□印

町勝兵衛尉□□印

比紀伊守□□印

山田民部少輔殿

1300

「御文庫拾七番箱十九卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚々御念之入候御書、扱々冥加無御座候、如御意我  
等九月廿九日、朔日ニ御鷹野之爲御供必東へ罷下候  
間、似相之御用被仰付候様被仰上候て可被下候、奉

頼存候、以上、

從 奥州様御書頂戴仕、忝奉存候、誠々御上洛之刻種々

御懇之段、誠以忝冥加無御座候、殊ニ路次方御秘藏之御

鉄炮拜領仕候、是又忝冥加無御座候、御下向被成候御海

上静にて、はや／＼と御着被成候由承、別而目出度儀共

ニ候、此方ニ而道正庵と悦申候事にて御座候、來春者目

出度御上洛可被成候条、其砌路次まで御迎ニ致伺公、其

節万々可申上候、此等之趣可然様ニ御披露所仰候、恐々

謹言、

「朱力半」  
「九和元年」

九月廿日

別府舍人佑殿

後藤

長乗(花押)

1301

「家久公御譜中」

「正文在琉球國司文庫」

芳翰披閱、珍重々々、抑舊冬從其地渡唐之船就歸帆、其

趣早々示諭處、細々令得其意矣、然者先年名護持來之如

勅書、十ヶ年之内者不可有許容之由、不及是非儀、吳國

之法制更難及謀計者乎、其國之不幸令察者也、近日以使

節可申伸之間、不能詳、恐懼不宣、

「朱力半」  
「元和元年」

九月廿日

少將家久(花押)

進獻 中山王

1302

「家久公御譜中」

元和元年九月二十一日之夜半、松平長門守秀就宅出火、隨

風引延而火速遷松平上總介政宗及鍋島丹後守勝茂家屋、

餘焰遂及家久櫻田之新營之第、時留主居家老三原諸右衛

門重種及上井次郎左衛門里兼指揮衆雖欲熄之、風強而遂

爲燒土、況於財器乎、土井大炊頭利勝・福島左衛門太夫

正則告事於家久之書列于左、

1303

「古御文書二十三卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

毛利殿方火事出來申、風惡敷御座候て御屋敷も焼申、笑

止千万難申上候、併下々迄御無事ニ御座候間、御心安可

被思召候、委細者御留守居中方可被申上候間、不能詳候、

恐惶謹言、

「朱力半」  
「元和元年」

九月廿二日

土井大炊助

利勝(花押)

鳴津陸奥守様

人々御中

「古御文書廿三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

追而此度之火事、何共笑止千万成義共ニ御座候、御廣間も大かた内造作繪なども出來申候ニ、無是非義共にて御座候、將亦我等名字前之ニ罷成候間、其御心得被成可被下候、以上、

内々申入度折節、御屋敷御留守居より人を被指上候由候間、致啓上候、

一去廿一日之夜半之比、松平長門守殿屋敷方火出候て、政宗屋敷・鍋嶋屋敷、又政宗新敷屋敷焼申ニ付て、貴殿様御屋敷へも火うつり申候、

一御留守居三原諸右衛門殿・上井二郎左殿殊外被出精候へ共、風つよく御座候て、中々御屋敷かゝへ申義不罷成候、

一右兩人以才覚、貴殿御妹子御親子乗物ニめさせ、何も御召仕之女房衆下々迄、無吳義右馬頭殿御屋敷へ御退候、一萬道具共おくの土藏へ入被申候へ共、右如申風つよく御座候て土藏へも火入申候、何共笑止千万成義共にて御座候、然共御屋敷方火出不申類火之御事ニ御座候而、此上にては御ため可然存候、

一御屋敷かこひの義先板にてやかて可被仕之旨、御留守

居衆被申候、近比尤と存候、

一拙者事いまた江戸ニ罷在候、相應之御用可承候、

一大御所様今月廿九日ニ駿河迄被成 御立、関東御鷹野

ニ被爲成候、

一本多佐渡守殿今度之火事之儀ニ付ても、貴殿様御事殊

外御肝煎にて御座候、委者諸右・二郎左方可被申候、

恐惶謹言、

「朱カキ」

「元和元年」

福嶋左衛門太夫

正則(花押)

鳴津陸奥守様

人々御中

1305

「御文庫二番箱家久公一巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

尊札致拜見候、仍 大御所様鷹之目之硫磺五百斤御進上被成候、則致披露候処、遠路之儀早々被入御念旨、不有形御珍重ニ被思召、殘所無御座御仕合御座候間、御心安可思召候、然者今度大坂之儀、兩 御所様思召御儘ニ被仰付、御機嫌能御歸陳被成候儀目出度思召候由、御紙面之通懇申上候、然而去比在京中御仕合能、早々御歸國被成候儀、御満足之段奉察存候、將又 大御所様爲御鷹野、

1306

今日廿九日ニ駿府御立、関東へ御下向被成候、此表相替儀無御座候、相應之御用等御座候者、可被仰付候、不可存疎意候、猶期後音之節候条、不能一二候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
「元和元年」

九月廿九日

本多上野介

正純(花押)

鳴津陸奥守様

貴報

「御文庫拾六番箱十二卷中」

尚く母かた方くたし候書狀其元へ進候間、御披見可有之候、以上、

從惟新様態御懇書被下候、委細拜見忝存候、則御報申候間、可然様ニ可預御取成候、隨而從貴殿主馬・左衛門佐所迄、細々書狀被差越候、具令披見候、然者拙子近々致上洛儀者、當夏京都方罷下候刻、縁者衆・知音衆被申候者、今度灘悪候故、上着遅々仕候条、當暮者是非共ニ越年ニ罷上候而能候する由、皆々被申候ニ付而、罷下候時分方越年ニ可致上洛用意仕候處ニ、頃江戸老母所方飛脚差下候而申越候者、諸大名衆何も江戸にて越年可在之様ニ風説ニ申渡候、然者拙子事者當夏も海上不自由ニ候故、上着遅々仕候間、せめて此度人先ニ罷上、御目見も仕候

1307

「御文庫拾六番箱十二卷中」

而可然由、縁者衆・知音衆方母所迄内意被申候間、隨分急罷上候而能候する由ニ候、油断無之様ニと被申越候、左候へハ爰元ハ貴所御存之様ニ灘悪候間、余方承合候なと申候へハ、人並ニ上着不成候間、追付可致出船覚悟候、兼又上方陣用意候て、九州入なと風説ニ申散候由、被仰越候、爰元一圓左様之沙汰不承候、此度從江戸下候飛脚も何そ相替儀無之由申候、自然左様なる新儀共承付候者、不依何時注進可申入候、少も如在有之間敷候、貴邊へも弥以玆儀相聞え候者可被仰知候、巨細者主馬・左衛門佐かた方可申候間、不能<sup>辨</sup>祥候、恐々謹言、

十月三日

伊修理大夫

祐慶(花押)

河崎九左衛門尉殿

御宿所

尚以平部長右衛門尉上方在番ニ罷居候、爲替川崎彦右衛門尉罷上候、彼長右衛門近日可罷下候、此便ニ自然玆儀相聞え候者、早々可申上候、

態爲御使一乗坊被差越、御細書具拜見、得其意存候、殊ニ從 惟新様修理へ被遣候御書、則拜見被仕御報被申上

候、然者九州入と候て、上方陣用意在之由風説申散候由、

十月三日

兵茂(花押)

被仰聞候、此邊一圓左様之取沙汰無御座候、縦不正儀事

伊東主馬首  
祐實(花押)

ニ候共、承付候者可申入候へ共、今迄ハ下々之取沙汰を

河崎九左様

貴報

も不承候、隨分隣方立聞候て御注進可申候、内々至修理

大夫御入魂之儀共ニ御座候間、其筋目不相替、御方角珮

御座候者、被仰聞候而可被下由、修理大夫被申事候、隨而

修理事近日致上洛候儀者、頃江戸老母かたより飛脚指下、

1308  
「御文庫拾六番箱十二卷中」  
敬白天爵起請文前書之事

越年ニ罷下候而可然候、其故者當夏も海上不自由之故、

上着遅々仕候而管ニ會不被申候、諸大名衆越年ニ可有御

上様ニさた仕候間、せめて此度者人先ニ上着被仕候様ニ

と縁者衆・知音衆方修理母迄内談在之由申來候、如御存

知當所者灘惡候故、諸方承合候へハ、人並ニ上着不罷成

候間、急可致出船と被申候、則修理大夫老母所方我々か

た迄くたし候書狀を貴様迄進候、御披見被成候而御分別

可被成候、右之外別条新儀少も不承候、自然隔心にて承

候儀を、相隠候欵と被思召儀も可在之哉と存、誓紙にて

申候、聊如在ニ不存候通、是にて可被聞召分候、乍重言

明日ニも新儀承候者、則從是御注進可申候、委曲一乘坊

へ口上ニ申達候間、不能<sup>申</sup>祥候、恐惶謹言、

長倉左衛門佐

一九州入と候て上方陣用意在之由之雜説、爰元へ相聞え  
不申候事、

一今度從江戸飛脚罷下候題目者、諸大名衆江戸にて可爲  
御越年之由候間、修理大夫人先ニ上洛可然之由申來候

事、  
一彼飛脚申候も、江戸・駿河にて何事も新儀不承之由申  
候事、右之旨於僞申者、

▽<sup>(年志)</sup>上者梵天帝釋、下者四大天王、惣而日本國中六十余州  
大小之神祇、別而者八幡大菩薩 春日大明神 天滿天

神 摩利支尊天 愛宕大權現 鶺鴒霧鳴兩所權現 氏

之神、御罰深厚可罷蒙者也、仍起請文如件△  
元和元年乙卯  
十月三日  
長倉左衛門佐  
兵茂(花押)

川崎九左衛門尉殿

伊東主馬首  
祐實(花押)

〔御文庫拾六番箱十二卷中〕

追而先日被仰越候一儀、一圓物沙汰無御座候、此中  
臥見先番仕候平部長右衛門又大福院、去秋江戸方入  
峯被申付候ツ、就夫江戸表へ罷下、去四月ニ平長右  
同船ニて下着仕候、江戸上方□新御沙汰無御座由  
候、ヶ様之段、態以書狀可申入と存候つれ共、修理  
上洛前ニて何かと取紛延引ニ罷過候、右之兩人之者  
申候ハ町□身上可相捨様ニ取沙汰□  
由候、是者別条□(無御座力)不承由申候、將亦成瀬  
右衛門殿と申候て、修理へ別而御懇切之仁御座候、  
彼仁被仰候ハ、明年二条之御城ひろかり可申由沙汰  
候、定而修理手前なども御普請可相當候付、内々其  
用意仕候様ニと御内語候、拙者式も今度供仕罷上管  
御座候つれ共、右之様子ニ付而御普請ニ被申付候間、  
俄相殘申候、是も必定可在之も不相知と聞え申候、  
已上、

一書令啓上候、從 惟新様修理所へ御書被下候、修理事  
去八日ニ内海へ舟下仕、翌日九日ニ出船被申候、彼飛脚  
九日ニ内海迄被罷越候へ共、もはや御出船之跡ニ罷成候  
間、不及力候、乍去十日中ニ上洛之船可在之候間、左様  
成便ニ可差上候、□御書留置申候、若何そ爲立入御狀  
共ニ候者、從貴様様子可被仰聞候、態慥成者差上せ可申  
候、爲御存知候、菟角當時者出舟も無之候間、相替儀候  
者急度可被仰聞候、恐惶謹言、

十月三日

長倉左衛門佐

兵茂(花押)

伊東主馬首

祐實(花押)

川九左様

人々御中

〔古御文書廿三卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

尚以遠路寄思召御懇之御尋、一入大慶存候、自是も  
以使札も不申入、不始于今無沙汰之躰、御心底如何  
と存候、以上、

八月五日之御懇貴札昨日於國本到來、忝致拜見候、如御  
書中、去春手前端城普請申付候とて、御所様以ニ御機

嫌損申候、然共輝元代之城所も今程者少く破申ニ付而、右之段申上候處、被 聞召分候、就其右之御礼爲可申上、

十月初ニ備前之内牛窓迄罷上候様ニ可相延旨、本上州も申來付而、彼地も歸國仕候、併今程せがれ爲御礼可指上

其用意を申付候、依其我等年内者致在國候、貴殿御事も駿河への御見廻、來春迄相延申之様ニ承候、先以目出度

存候、上方筋相應之御用無御隔心可承候、恐惶謹言、  
〔朱力キ〕  
〔元和元年〕

十月十日

羽柴陸奥守様

御報

羽柴左衛門大夫  
正則(花押)

1311 「家久公御譜中」

同年十月十一日、家久遣使書於中山王、遙謝疎闊、且制禁大坂城中之逆徒逃竄彼國、如左、

1312 「正文在琉球國司文庫」

猶以雖爲微少之方物、宇治茶一壺加治木焼・中紙貳百束進獻之、聊表書信之驗而已、

介來絶音問不堪積鬱、企使書候也、抑今度就大坂落城、彼地之落人堅依被成御改、若至其邊不審成者於忍居者、

早く被捕如日本可被相渡旨、儘雖申達、猶以爲可入念以彼兩人令申之条、讓演説縷々不具、謹言、

〔朱力キ〕  
〔元和元年〕 小春十一日 少將家久(花押)  
進獻 中山王

1313 「本田氏藏」

請取申船出物之事

高七十七石七斗五升四合

一鳥目老貫三百廿二文

一米六舛二合五夕者

元和元

皆濟

十月十六日

小森諸右衛門(花押)  
上村勘左衛門尉(花押)

脇元佐平次殿

參

1314 「古御文書廿三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以類火ニて御屋敷中燒申儀、書中ニ難申上候、貴札忝拜見仕候、被仰下候今度大坂早く被仰付御下國被

成、依之爲御祝儀御使者被進候、本佐渡致相談具令披露候處ニ、一段御機嫌被思召、御内書被爲成候、將亦大

御所様爲御鷹野、今月十日至于江戸御着座被成、兩上

様御機嫌殘所無御座候間、御心易可被思召候、此表相應之御用等御座候者可被仰下候、疎意存間敷候、尚來春御下向可被成旨、其節以貴面旁々可得御意候間、不能具候、恐々謹言、

〔朱力半〕  
〔元和元年〕

十月廿四日

酒井雅樂頭

忠世(花押)

鳴津陸奥守様

尊報

1315

〔家久公御譜中〕

〔正文在田代伊右衛門〕

先日駿府・江戸へ注進申上ニ付而、細々奉得尊意候、定可被聞召達候、其後相易儀無之候、関東之御様子如何御座候哉、遠國故諸事相聞不申、無心許存計候、其地伏見之儀大坂へ程近候間、御心遣奉察候、別条雖無御座候、爲御見廻態此者申付候、委細口上申含候間、不能祥候、恐惶謹言、

〔朱力半〕  
〔元和元年〕

十月廿五日

鳴津陸奥守

家久(花押)

隠州様

参人御中

1316 「御文庫三番箱中」〔家久公御譜中ニ在リ〕

爲音信、縹珞之道服數十并羅紗十間到來、遠路念之入候段、欣然此事候、猶土井大炊助可述候也、

〔朱力半〕  
〔元和元年〕十一月十九日(秀忠)(花押)

薩摩少將殿

1317

〔古御文書廿三卷中〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

以上

御札拜見本望之至存候、如仰大坂思召候ニ罷成、大慶何方も御同前之儀共候、就其駿府・江戸へ御使者被指下之旨、御尤奉存知候、誠ニ此地御逗留中者手前取紛、爲何御馳走も不仕迷惑至極存候、舟中御無事ニ被成御下國之由、目出度奉存候、殊爲御音信琉球酒一壺被懸御意候、毎度御心付之段、書中ニ御礼不得申候、委曲御使者へ申含候条、不能一二候、恐惶謹言、

〔朱力半〕  
〔元和元年〕

霜月廿五日

松平隠岐守

定勝(花押)

鳴津陸奥守様

貴報

1318

〔義弘公御譜中〕



「正文有之」

態令啓入候、

一 御祈様 御移徙去十五日ニ相調候、爲可申入使差下候、

可然様可被仰上候、

一 爰許奥御屋作之儀、先御座所計新相調候而、其餘之御

家作者古家買候(取カ)て申候、見苦程者無之候へ共、奥方隠

々之事候間、銀子入不申様ニと存如此候、爲御存知候、

一 若君様御參 内之儀、來年五月と下々申事候、是又爲

御心得候、

一 一女御様御祝儀之事、來年八月と申事候、

一 此中大坂へ御座候 御姫様、八条殿へ御縁与之由候て、

御祝儀二月十二日ニ御日取之由申候、

一 諸大名爲御越年御參上ニ而候、寺澤志广守殿去廿一日

爰元へ被成下着候、

一 來春御上洛一月共延候而不苦由、佐州様被仰候へ共、

於罷成者御急候て尤存候、其故者諸大名も於爰許、被

成御越年儀候間申事候、

一 今度御歸陳之後者、物毎ニ重罷成候、殊更佐州様御煩

故、何事も急不相濟由沙汰申候、

一 御見次舟被仰付尤存候、爰元者御物悉燒失候間、何事

も銀子ならてハ不調候間申事候、猶追而可申入候、恐

惶謹言、

十二月廿四日

南郷淡路守殿

本田伊豆守殿

人々御中

三原諸右衛門尉

重種(花押)

1319 「御文庫ニ番箱家久公ニ卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

御居城之儀ニ付而、預御使札ニ候趣、御一書御口上之通

委承届候、何も此方ニ而申上儀ニ而ハ無御座候間、駿府

へ被爲得御意、御錠次第ニ被成御尤候、右之通三原諸

右衛門尉殿へ申談候、委曲御使者言上可被成候条、可被

爲得其意候、恐惶謹言、

十二月廿九日

鳴津陸奥守様

貴報

本多佐渡守

正信(花押)

1320 「御文庫拾七番箱拾九卷中」

相良勘解由以 御書被成下候、謹而奉拜見候、然者 御

座所建昌へ御移替可被成之由、佐州迄被仰上候、則勘解由致同心申入候、此節者迫候共魔鳴へ御堪忍尤由被仰候、乍去上州江申候而、可然之由承候条、委者從駿府可被仰越候、於様子者口上三申達候、此等之段宜預御披露候、恐く謹言、

〔慶十九年比〕

十二月廿九日

三原諸右衛門尉

重種(花押)

伊勢兵部少輔殿

1321

〔御文庫拾七番箱十九卷中〕

起請文

一 從日州參候此かた、御當家へ無別儀、御奉公可申上旨奉存候事、

一 自今以後 御前様へ無別儀御奉公可申上候事、

一 奥方へむすめ上置候ニ付、御前之物沙汰善悪申洩まし

き事、

一 子共并同名親類等御奉公無沙汰之者雖有之、少同心申

間敷候事、

一 自然愚拙身躰爲何儀、人々申上候とも、御糺明之上を

以其科可被仰付事、

右之條々若於僞申上者、

▽<sup>(牛王)</sup>奉始上梵天帝釋四大天王、下者堅牢地神冥官冥衆、惣

者日本六十餘州大小神祇、別者當國鎮守新田八幡大菩薩

薩 開聞正一位 鹿兒嶋擁護諏方上下大明神 稻荷

戸柱 春日 若宮勸請諸神 大隅正八幡大菩薩 霧嶋

六所權現、殊者愛宕大權現 大天狗 小天狗 山々峯

々所有天狗 天滿大自在天神御部類眷屬等、神罰冥罰

各身上可罷蒙者也、仍起請如件、△

元和元年乙卯極月吉日

野村備中入道

文綱(花押)

進上

別府主殿助殿

1322

〔北郷長千代丸後山翁久譜中〕

元和元年乙卯十二月、長千代丸<sup>時六</sup>爲 太守陸奥守家久公

之質、發都城赴駿府、翌年丙辰四月十日、於駿府拜謁于

家康公、献上御太刀・馬代・縞珍十卷、長千代丸<sup>七</sup>、登城、

時本多上野介正純相迎車寄勞慰之、其後清水平左衛門尉

懷長千代丸登殿時、加藤肥後守之質五人列座、使長千代

丸居上座、拜 尊顏之時 家康公曰、汝者陸奥守質之替

歟、正純對曰、是陸奥守重質也、 曰陸奥守懇情不淺、

同月十三日發駿府赴江戸、

義弘公

元和二年

家久公

後  
編 舊記雜錄 卷七十二

「家久公御譜中」

「正文在島津筑後忠置」

當春之嘉幸千萬々々、猶更不可有際限候、抑爲此等之祝儀、旧例之佳札并五明二本到來、怡悦不少候、何様永日

中諸慶可申談候、恐々謹言、

〔朱力キ〕

「元和二年」正月十一日

家久(花押)

謹上 北郷讚岐守殿

「家久公御譜中」

元和二年、家久爲窺 内府公之御不例、仲春初發慶城而

「御文庫四拾八番箱中」 「家久公御譜中ニ在リ」

赴駿武、家老伊勢貞昌供奉、此外從駕大 小臣不詳同十六日京泊開船、而三月十日之晚大坂著岸、十一日上京、而對面板倉勝重、而述疎闊情間 内府公之快不快、勝重曰、御氣宇雖快、然未食事少、因十三日糴行李、十四日味爽發京都驛路忽忽、而三月十九日至于駿府、先訪本多正純館述參府之旨、翌日正純達 上聽、則 内府公恰益眉宇、正純直來家久旅邸告之、秀忠公亦聞家久參府、則遣土井利勝勞、自是未 上言、如此 御懇篤奉謝有餘、而二十一日家久登營奉拜謁 兩御所、此節正純之叮嚀至盡矣、

御出船以後者御左右不相聞候間、一人差上せ候、先以打續天氣能御座候条、此比者輒可爲御上着与珍重存候、然者東國之御仕合、定而別儀御座有間敷与、早々様子承度存候条、御目見得相濟候者、翌日御注進相待申候、將又御留主中一段静謐之儀候、我等も貴所御出船後、聽而鷹鳴へ爲見廻罷越候、何もまこ殿無事ニ御座候条、可御心安候、先日中之丸之姫はしかをせられ候つれ共、いかにもかる／＼と候てはや能御座候間、目出度存事候、隨而今度江戸・駿府之御仕合弥可然様ニと、此元御祈念等

「家久公御譜中」

「正文在相良權兵衛」

猶々、 駿府、又細々可申 

「吉利氏系圖」

三代右衛門大夫久定之弟

久金

三郎次郎 左衛門佐 山城守

<sup>(幸)</sup>享祿三年庚寅誕生、母島津相模守忠幸女、元和二年丙

辰三月二日死、年八十七、

之儀少も無油断候、鷹嶋へも其通節々申遣儀候、就夫御

分國中諸所之惣廟へ御名代參被申付、別而被勵精誠候、

巨細者鷹嶋々可被申上せ候、次ニ於當所仁王經千部并不

動之法百座、霧嶋座主を頼修行申候、其御札・配帙差上

せ候条、可被成頂戴候、猶々御祈念之儀、連々無緩可抽

丹精候間、旁可御心安候、餘者追々可申承候、恐々謹言、

<sup>〔朱力キ〕</sup>「元和二年」二月廿八日

惟新(花押)

陸奥守殿

まいる

其許罷立候、以後者以書狀も不申上候、

一 去月十六日、京泊致出船候處、終順風無御坐候而、少

なぎさにハ日夜無油断をし船にて、漸十日之曉、大坂

へ致着船候、十一日者彼地へ逗留申、翌日十二日京都

へ罷上、十三日ハ荷物之用意等申付、十四日從未罷

立、駿府へ下申候事、

一 夜前追付、板倉伊賀守殿へ對談申候、御所様御煩、

大方御本腹之様ニ御坐候、乍去御食然々とも未參由候、

其外上方新儀無之候事、

一 諸大名、今度駿府へ參上、以之外急ニ付而、大坂・伏

見邊より駿府迄二日程ニ被着候間、我々も餘緩々候

てハ、御前之仕合如何ニ存、四日程ニ可罷着賦ニ申付

候、連々者八日九日程ニ罷着道にて候処、急ニ罷越候

儀難儀之躰、可被成御高察候事、

一 將軍様も于今駿府へ被成御座、御養生ニ被入御念之由

候、何も遠國衆者早々御暇被給之由候間、我々も御

氣能候ハ、追付御暇可被下由沙汰申候事、

一 御所様御煩之様子、又関東表之儀、蒲地備中守委可申

上候間、可被 聞召達候、猶相良勘解由へ申含候、何

様追々御吉左右可申上候、誠惶誠恐敬白、

〔朱カキ〕  
〔元和二年〕

三月十四日

陸奥守

家久(花押)

進上  
惟新様

〔御文庫三番箱四卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

猶々本多上州御懇不大形候、我等今度京都より急ニ  
罷下候間、定諸事不弁ニ可在之と被思召候哉、種々  
當時可入物共罷着候へ者、則御持せ、振舞之道具以  
下卅人分被持せ、其外毎日肴等送給候、誠々奇特な  
る儀と申事候、如此候間、諸事心安存事ニ候、以上、  
態使札申上候、

一 去十四日京都罷立、一昨十九駿府へ致下着候、以之外  
路次急申候ニ付、人馬疲正躰無御座候、兩日大雨故、  
存立たるより少遅致參府候事、

一 此地へ罷着、則本多上州へ致參上候由申入候處、翌日  
大御所様へ被成 言上候へ者、一段御機嫌能御座候而、  
只今成共可被成御對顔由御誼候而、國元之儀共種々御  
尋、就中 惟新様御事御懇ニ被成 御意候由、御城よ  
り直ニ上州御出候て細々被仰候、 公方様へ者御年寄  
衆中へも未申入候處ニ、土井大煩助殿爲 御使上州同

前ニ來臨候て、從 公方様早々致參上候由被聞召付候  
間、被仰聞由誠ニ不存寄仕合共ニ御座候事、

一 今日廿一、 兩御所様致御目見得候處、内々右之仕合  
ニ候故、 御機嫌能儀無殘所候、可安御心候事、

一 大御所様御煩之儀、おこりさめ御座候由上州被仰候、  
我等御目見得之儀も、自然不圖御氣相おこり候者、可  
爲御機嫌次第由候而、先 公方様へ上州御案内者候而  
罷出、それより 御所様御殿ニ被成同道、我等參上候  
由、ちと御伺候へ者、時を無御移被召出候、各奇特な  
る由被仰事候、然者御顔色御聲など、平世ニ餘相替儀  
も無御座候、此中承候躰者、御食一日ニ御かさニテ一  
ツニツ參由候間、はや正月より至此比者、六十日程ニ  
罷成候条、以之外可被成御草卧と存候処、存之外つよ  
く御座候、乍去一圓ニ煎藥不參、御手合之万病圓と申丸  
藥迄を參之由候、就其奉始 將軍様各笑止かりにて、典  
藥衆之藥を是非とも參候様ニと被成 言上候へとも、  
結句御氣色悪候故、中々煎藥可參儀者驗終候由候、能  
くにて御座候、ぎばと爰元當時之醫者とハ何れ勝候哉  
なと々、御側ニ被居候衆へ被仰出、積尊さへ藥にてハ  
御たすかりなく候間、不及養生ニ由 御意候とて 各

笑止かりにて候、今分ニ候者、御煩急度者御快氣在之  
間敷候事、

一將軍様二月二日より此地へ被成御逗留候、大御所様  
御本復之様、然与不被御覽定候者、江戸へ今程還御在  
之間敷由候事、

一今度此方へ罷下刻、松平河内守駿府より懸川へ被成  
歸館、殊外之御馳走にて御座候つる、御内儀へも遂對  
顔申候、一段無事ニ御入候、就中御息成人ニテ結構ニ  
被成生立候、目出度存候事、

一今度罷上路次ニいたりても、江戸より度々之使爰元へ  
罷着候而もはや使被差越候、妹姪女一段無恙由候、可  
安御心候事、

一御所様御氣色此中如何御座候哉、被聞召度由候而、本  
多上州まで輕き使御進上候而尤ニ存候、御進物者入間  
敷候欵、自然似合敷御進物茂入候者、爰元にて談合可  
申候、將又鷹鳴之儀被添御心候而可被下候、猶爰元之  
様子追々可申上候、誠惶誠恐敬白、

三月廿一日  
陸奥守 家久  
進上惟新様

1329

「家久公御譜中」  
「正文在琉球國司文庫」

去歲十月初六日之芳墨漸頃到來、披閱多幸、抑其國政道  
之儀、以使節申定趣皆同懷之由、不可爲國家長久之基乎、  
次國上以渡唐大明与球國純熟之才覚在之由、尤肝要之至  
也、國上歸帆之節、早速注進所相待也、將亦眞壺一筒・  
銀子百枚・芭蕉布三十端・酒甕四筒、遠路之方物到來、  
珍重々々、芳情不知所謝而已、名護讓演說省略之、恐懼  
不宣、

「朱カキ」  
「元和二年」季春廿一日 少將家久(花押)  
進獻 中山王

1330

「古御文書廿三卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」  
以上

大御所様御煩ニ付而存候方早々參上被成候、御造作御苦  
勞共書中ニ難申上候、併兩御所様へ御目見被成、御仕  
合殘所無御座候由被仰下候、乍恐拙者一人之様ニ大慶奉  
存候、此地へ御下向可被成之由示被下候間、弥可奉得尊  
意候条、早々御請申上候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「元和二年」 本多佐渡守

三月廿五日

正信(花押)

鳴津陸奥守様

貴報

1331

「御文庫四拾八番箱中」 「義弘公御譜中正文有之トアリ」

「家久公御譜中ニモ在リ」

尚々江戸妹かたへも互以使節申通候、一段無事ニ候、彼地へ可罷越儀茂右之様子候間、于今無其儀候、

如何様以時分罷下見廻可申候、

急度令啓上候、仍 大御所様御氣色、此中ニ相替儀無御座候、然共御食一圓ニ無之候故、心遣之由各被仰候、就其爰元逗留いつとなき儀候、諸大名衆茂皆々被相詰事候、然者此方多人衆罷居候而茂、彼是手前六ヶ敷候間、先以少々差下申候、雖不及申候、鹿兒島へ節々被成御見廻、諸事無緩之様ニ可被仰付事奉憑候、新儀共候ハ、追々可申上候、誠惶誠恐敬白、

「朱カキ」

「元和二年」

三月廿五日

陸奥守

家久(花押)

進上 惟新様

「元和二年卜張紙有之」

同年三月二十七日

今上皇帝命廣橋某・烏丸某遙遣駿府、使 家康公任太政

大臣、

勅使登駿 城、家久應 命帶裝束、與諸侯牧伯共候 營

中、事了歸邸矣、

1333

「御文庫四拾八番箱中」 「家久公御譜中ニ在リ」

尚々藤堂和泉守殿江御茶給候、膳府書付進覽之候、

御慰ニ可有御覽候、以上、

追而令啓上候、仍今日 大御所様被任 太政大臣候間、我々事茂諸大名並ニ裝束にて致出仕候、右之爲 勅使廣橋殿・烏丸殿被成下着候、 大御所様御氣色于今不相替候、昨日茂爲御見廻罷出候、御本丸ニ而御子様達被成御出合候て御酒給候、 將軍様へ致御目見得仕合能御座候、 臆而東丸へ尾張之宰相様江被召寄御振舞、種々御馳走共にて候、如此仕合能御座候間可安御心候、猶期後音之時候、誠惶誠恐敬白、

「朱カキ」

「元和二年」

三月廿七日

陸奥守

家久(花押)

進上 惟新様

1332

「家久公御譜中」

「元和二年ト張紙アリ」

1334 「家久公御譜中」

四月朔日、秀忠公以土井利勝賜吉光脇刀・御馬・時服及還國之暇、家久頂戴之、乃登營奉拜謝而還旅館矣、

1335 「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

鹿兒嶋方幸便之由候間、雖無題目候企愚札候、

一此比者定而東國へ尖可爲御下着与、從是目出度存候事、

先以駿府・江戸御目見得之御仕合共、早々承度存候

間、其地之様子巨細被仰含、追々御吉左右相待申候事、

一愚老事も又々かこしまへ爲御見廻去月廿六日方罷越、

昨夕迄逗留申候、何も御留守中一段無事ニ御座候、就

中孫殿たち、弥あひらしく御座候、東之丸いもと子の

かは身にも、そとちいさきかさ見得申候、我等へもか

さ可爲欵と見申候、三朝ニ出来そろひ候、何茂見申候

人ハもにて候すると申事候、一段かろく御座候、機嫌

も早晚より能御座候条、少も御心遣之入儀にてハ無之

候、理心ハ抱にてハ有間敷由かたく申候、何共相替儀

候者、追而可申上せ候、將又御國元之儀、諸事比紀州

・町勝兵無由断以談合丈夫ニ被申付候間、是又爲御存知候事、

一妹親子之事、此中貴所江戸へ御下之儀、誠天山与被相待候由承候、定而今度被待付候て一人之可爲満足与、

此方方推量申候、涯分其元之儀何篇被聞召合可然様ニ、此節役人共ニ可被仰付事尤存候、猶期後音不能細書候、

恐々謹言、

「朱カキ」  
「元和二年」 卯月朔日 惟新(花押)

陸奥守殿  
まいる

1336 「古御文書廿三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以昨日之御仕合、か様之目出度御事無御座候、何事もく、以面可申述候、以上、

今朝者御使者被下忝存候、昨日者土井大炊殿被成御使

而、吉光御脇指・御服・御馬御拜領之由、其上御暇出申

候旨、重々目出度存候、御使者にて承ニ付て疾御悦不申

入候、我等も正宗ノ御腰物并銀子千枚致拜領、御礼ニ罷

上候処ニ、御寢被成候御座敷へ被召出、重疊忝御意

にて御盃など被下仕合、殘所無御座候、貴様いつ比可



被成御立候哉、何も御上り之内ニ參候て可得御意候、恐  
惶謹言、

〔朱カキ〕  
「元和二年」卯月二日

正則(花押)

嶋津陸奥守様

人々御中

福嶋左衛門大夫

正則

1337

〔義弘公御譜中〕

元和二年丙辰四月四日、爲開聞參詣發於加治木、午時乘  
船著谷山岸、寄一宿於大豆打、翌朝辰時解纜、未時著津  
山川、寄宿於大迫吉允、同六日小雨、午時參詣開聞神拜  
事終、而又到于山川矣、同七日歸著于加治木也、

1338

〔家久公御譜中〕

同月八日、家久爲御暇乞登駿營、則相國家康公徵家  
久及松平肥前守利常・松平陸奥守正宗於御病床之下、  
細川越中守忠利亦預之、以告永訣之在近、各賜寶刀、家  
久拜戴彌正宗脇刀、各流涕而退出、時本多正純特招家久  
於傍、而傳台旨曰、從是須還國、於途中雖聞訃音直歸

國、而來歲必可來訪于江府、所賴在茲、莫怠遺命、家  
久感泣出既、而家久直發駿府而赴上方矣、

1339

〔全御譜中〕

〔正文在島津圖書久見〕

爲見廻遠路へ使者、喜悅之至候、然者今度於駿府兩御  
所様御機嫌能仕合無殘所、利早々御暇被下歸國、満足不  
過之候、仍爲音信銀子三十兩到來、令祝着候、猶相含口  
上候間不能詳候、恐々謹言、

〔朱カキ〕  
「元和二年」四月十六日

家久(花押)

下野守殿

〔在包紙〕  
下野守殿

1340

〔古御文書廿三卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

急度令啓上候、相國様今十七日未之刻被成御他界候、  
何共可申上様も無之候、將軍様還御之儀、未四五日も  
爰元御逗留之由申習候、將又爲御見廻被成御下向候儀、  
其地京都ニ御大名衆御逗留候由承候間、何も御下向候者、  
御同前ニ被成御下候ても可然かと存候、駿州など談合仕  
候て、重而御左右可申達候、恐惶謹言、

「古御文書廿三卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

尚々江戸・駿河御用之儀候へ、可被仰越候、已上、

卯月十七日

松平河内守  
定行(花押)

嶋津陸奥守様

人々御中

「元和二年丙辰四月十七日家康薨、享年七十五、称東照大権現トアリ、  
此書中参照スヘシ、明治廿四年迄星霜二百七十六年トナレリ、」

「古御文書廿三卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

急早々申入候、以上、

急度申入候、上様御他界被成候、其通奥州様へ以書状

申上候、爰元之様子承合、追而御注進可申候、奥州様御

下之事、各々御歸國之様子御聞合候而尤存候、御下之段

も爰元承合、自是御注進可申候、猶從御兩人可被申入候、

恐惶謹言、

「朱カキ」  
「元和二年」

四月十七日

山駿河守  
直友(花押)

伊兵少様

人々御中

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

猶々□□ころろさしのほとかんしいり候、

わざとはるく使をのほせ給候、よろこひいり候、先々

しあはせよくはやく下向申候間、ころろやすかるへく

候、其元ふしに候由満足にて候、「本テマ、」ふくろのかたへも此よ

し申度候、やかて出船の事候間、申まてなく筆をとよめ、

あなかしこく、

「朱カキ」  
「元和二年」 卯月廿六日

家久(花押)

相國様昨日十七日ニ被成御遠行候、拙者事も從是江戸へ  
可罷下と存候、併上野殿・大炊殿可爲御差圖次第候、多  
分罷下ニ而可有御座候間、猶從彼地可申入候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「元和二年」

卯月十八日

細内記  
忠利(花押)

嶋奥州様

人々御中

京より

1344 「家久公御譜中」

同月十七日、未之刻 太政大臣家康公薨御之訃音、同二十日、家久在京師而聞、則良愁歎、時所司板倉勝重遙御禁之旨於在京之大小名曰、聞尊訃而不可參駿府、各可歸領國、繇焉家久呈使書於正純父子及安藤重信、而奉吊問、各有回答矣、

1345 「御文庫二番箱家久公一卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

貴札令拜見候、如仰 相國様御事、何共可申様無御坐候、公方様御愁傷可被成御察候、爲御見舞御下候へんと思召候得共、御法度之旨板伊州被申渡候、付而無其儀之由御尤ニ存候、御紙面之趣、御次而之時分具ニ可申上候、尚期後音之節候、恐惶謹言、

「朱力半」  
「元和二年」

五月朔日 安藤對馬守  
重信(花押)

嶋津陸奥守様  
貴報

1346 尊札致拜見候、仍 相國様御他界被成候儀、御笑止思召候由被仰下候、誠可申上様も無御座候、爰元何も迷惑之段、御推量可被成候、恐惶謹言、

「朱力半」  
「元和二年」

五月朔日

本多上野介

正純(花押)

嶋津陸奥守様

「家久公御譜中ニ在リ」

1347

「家久公御譜中」

「正文在樺山助太郎忠陽」

追而去年之一匁出銀、于今未進之由相聞得候、不可然候間、早々皆濟候様ニ可被仰付候、已上、

態申入候、去々年已來度々御上洛之入目、於江戸御屋形不慮之火事出來候、彼此御借銀千貫目余在之儀ニ候、此御返弁、一年ニ者罷成間敷候、來秋之出銀、一石ニ一匁三分充可被仰付之由相定候、扱者銀子・鳥目・八木、此三色之内にて可有 上納候、八木直成之事を追而可申定候、兼日爲御用意、先以用一書候、早々可被仰付候、恐惶謹言、

「朱力半」  
「元和二年」

五月三日

比志嶋紀伊守

國貞(花押)

町田勝兵衛尉

久幸(花押)

樺山權左衛門尉殿

人々御中

「古御文書廿三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

去月廿日之尊札致拜見候、相國様御他界之由、去月廿日於京都被成御聞、是非共可被成御下由被仰候へ共、板倉伊賀殿奉にて、何も御參之儀御無用之由被仰ニ付て、本佐渡殿・本上野殿迄御使者被進之由御尤候、爰元ニ被罷居候衆をも悉歸國之儀被仰出候条、最前より御上之衆、猶以其通にて可有御座候間、御歸國尤奉存候、拙者式事も昨日御暇被下、早々歸國可仕旨ニ御座候間、頓而可罷上候、何も唐津より可得御意候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「元和二年」

五月四日

寺志厂守

廣高(花押)

嶋陸奥守様

尊報

「御文庫ニ番箱義弘公五卷中」「義弘公御譜中正文有之トアリ」

猶以內々得御意候、沖長門守事、別而御懇ニ被仰付之由、於拙子忝存候、弥可被加御不便事所仰候、以上、

二月三日・同廿八日之尊墨、如拜顔再三拜上、忝存候、一去年者妻子引越爲可申、至筑前可罷下与存候處、遠路旁ニ付而延引仕候、其故以愚札不申上候、節々拙子儀

嚙被仰出之旨、恐悅至極奉存候、

一先書ニ如申上、將軍様於御前度々御馬責申、預御感候安志以來御掘負ニ御座候条、定可被成御満足与存申上候處、乍案中御祝着之通被仰下、忝次第ニ御座候、御乘馬方不被弃置被召仕衆ニ被成御乘御覽候由、寔御數寄之道故与乍恐奉感候、

一御息女様・御孫子様御在江戸ニ御座候へ共、御見廻申上儀も無御座候處、御懇勲ニ被仰下却而致迷惑候、併心底不存疎儀候、拙子相應之御用、從御留守居衆被仰付候様ニと存儀ニ御座候、

一奥州様今度相國様御違例ニ付而、駿府被成御下向候へ共、於彼地者一圓尊隙無御座故、蹕御透候内ニ早速被成御歸國終御見廻不申上、別而迷惑仕候、

一乘馬方新敷仕出儀無御座候、勿論練磨仕故、玆敷故実も御座候、雖然古説之外無御座候之条、安志申置一筋御吟味尤ニ奉存候、

一三六寸手綱御不審之旨被仰聞候、則以切紙申上候、一横田三郎兵衛と申者、其地ニ在宅之由承候、先年藝州へ安志牢人仕罷下刻、別而馳走之人ニ御座候条、乍憚被加御憐愍候者可忝候、

一河上喜左衛門殿之儀被仰下候、奥州様早々御下國ニ付而對談不仕候、

一爲御音信仙香拾把拜受、過當至極ニ御座候、每度之儀御礼難申得候、委細河四郎兵殿へ申入候間、可有御演說候、万端奉期後音候之条令閣筆候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
〔元和二年〕

五月十日

荒木十左衛門尉

〔元滿〕(花押)

惟新尊老様

拜答

1350

〔家久公御譜中〕

〔正文在小濱澤右衛門〕

尚々爰許相應之御用等承度候、以上、

幸便之条、一書令啓達候、今度者御上洛中折節惡相煩、

切々不得尊意背本意存候、將又先度ハ從洛次一卷被返下

候、慥請取申候、御國まで御將覽被成候ハて御隔心之至

ニ候、少得驗氣候者、一卷御進上可申候、心緒期後音之

刻候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
〔元和二年〕五月晦日

雅胤

鳴津陸奥守様

人々中

1351 〔光久公御譜中〕

光久

初忠元 虎壽丸 又三郎 薩摩守 從五位下 侍從

從四位下 大隅守 少將 從四位上 左近衛權中將

元和二年丙辰六月二日誕生于廳府、母家臣島津備前忠

清女、寛永二年七月二十二日、於江府逝去 養母前太守義久女也、

寛永七年庚午十月五日、近岡州國府、安藤牌于懸燈院 家臣入來院石見重高射產

號持明影窠庵玉、安牌于興國寺 弓、

1352

一書申遣候、然者虎壽丸之儀、爲國分之御子當家於相續者、龍伯様御一筋弥無別儀候間、於御納得者大慶ニ存

候處、別而被成満足之由候条、如右落着候、因茲來月吉

日次第、虎壽丸國分へ相越、祝儀可在之ニ相究候、連々

我等内存ニ候つれ共、國分之儀相兼候処、御同懷ニ而祝

着不過之候、猶喜入攝津守・伊勢兵部少輔方可申達候、

謹言、

〔朱力キ〕  
〔不詳年号〕七月十二日 家久(花押)

下野守殿

1353

〔義弘公御譜中〕

元和二年六月九日戊申、往麿島、而寄宿於樺山久太郎、則陸

奧守殿來入旅宿、少焉入城中、去二日、擯孫子新誕之祝詞、

以太刀一腰・馬一匹・馬代三千匹・折三合・樽酒五荷、

進陸奧守殿、以太刀一腰・馬一匹・馬代白銀五十枚・寶

刀二柄、脇指、治工兼光也、進新誕孫子、以樽酒三荷・一折・青銅

千匹、進孫子之母堂也、以太刀一腰・馬一匹・馬代白銀

百枚、自陸奧守殿進我前也、祝千龜萬鶴万万歲、其翌十

日歸加治木也、

家臣之中有數根仲兵衛者、天性勇敢事君者亦勤焉、然而

有罔赦罪、雖欲宥之不能、是以將誅之於麿島、則爲神事

障、仍陸奧家久欺之補山口地頭職、俾渠明日赴其地、於

福山決斬戮云爾、其書記左、「六月廿七日ノ御書末ニアリ」

1354 「御文庫四拾八番箱中」

一書申候、然者從先年唐船着岸之刻、暖之儀以條書申渡

候處、其趣每々致相違不可然候、此中者雖令用捨候、於

向後者稠可遂其沙汰候条、各得其意、條書之趣無緩之樣

談合專一候、將又自琉球佐數王子・金武王子父子渡海之

由其聞候、不及申候へ共、其元之者むさと出入不申樣可

被申付候、委細之義者近日自伊勢兵部少輔前可申越候、

謹言、

六月八日

家久(花押)

彈正大弼殿

下野守殿

川上左近將監殿

「元和二年ト張紙アリ」

1355

「御文庫廿三番箱十七卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

猶以大坂より之落人、弥々被入御念御改御搦候而可

有御上候、以上、

急度申入候、仍從去々年當春迄之間ニ、御領分より大坂

へ奉公ニ罷越候者於御座候者、注交名可被成言上候、今

度在所へ立歸候者も可在之候、左様之者をへとらへ被爲

置候哉、若行衛不相知妻子計殘置候者、彼妻子不致闕落

様可被仰付候、妻子無之者ハ如何様成親類御座候を具御

書付、早々可被成御上候、委細御報ニ可承候、恐々謹言、

「朱力キ」 安藤對馬守 重信

「元和二年」 六月十四日 土井大炊助 利勝

酒井雅樂助

鳴津陸奥守殿

人々御中

1356 「古御文書廿三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

覺

一王位御子孫向後於無之者、佐敷之息江相續可然存候事、  
 一琉球國之諸置目、佐敷王子被聞、節々以渡海、日本与  
 琉球之様子被致熟談候様ニ於被相定者、可然存候、然  
 者三司官者如前々不相替惣別之儀ヲ佐敷可被聞事、  
 一大明与琉球商船往還、純熟之調達弥可被入精事、  
 以上

右之条々、慥承届候、聊疎意不存候、□其申付候畢、

〔朱カキ〕六月十五日 中山王(花押)

1357 「家久公御譜中」

大明之商船自古來我薩州之要津而貿易、然今茲 將軍家  
 下 令於肥之前州長崎、置官屋以爲南商北賈之所止之要  
 津、因茲裁須知之簿而示、雖自今以往大明之商船隨風來  
 於我薩州之内、少時不許繫船如左、

1358

「御文庫廿三番箱十七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

須知之簿

我薩摩州与大明雖隔萬里之脩程、年々泊商船者自古皆  
 然、大明商客之所得而能知也、今日本有、

一將軍發號於東西施令於南北、日本風行草偃、是故置一  
 官於長崎、使之招異邦之商船以爲其所止之處矣、因茲  
 南商北賈指此地以爲要津矣、是今商客之所得而能聞也、  
 自今以往雖曰大明商船之隨風、而來於我薩州之頃刻、  
 不許繫船於我地矣、

一將軍之素心不愆、不忘率由舊章、由是觀之、今雖令長  
 崎爲商客之所止、後必泊商船於我薩州以爲貿易、所須  
 之處、亦未可知也、商客姑待之、今也

一官之號令、誰敢可濫之乎、商客其念之、

日本元和二年六月 日

大明諸商客

1359 「写儀原自淨院藏」

先日者愚老煩之儀ニ付被成下 御内書、誠ニ外聞実儀不  
 過之候、偏貴老御取成故候、殊ニ薩摩守事も愚老爲養生、  
 可致在國由被 仰出候、御哀憐不淺儀、難有奉存候、然

1360

「古御文書中」

先便之時、一冊言傳候、相届候哉、

雖無指題目、的便候間令啓候、其許如何様之事候哉、御息成長候哉、來春者叙爵被申尤候、禁中邊其外爰元無事候間、可御心易候、將又單物貳領、乍輕義相添書狀候

者煩之躰、兼日從薩摩守申入之由候間、可被聞召届候、種々雖致養生候其驗無之、次第ニ衰申事候、極老之儀候間、如此可有之儀尤与存置事候、薩摩守儀、當年者公方様へ未御禮申上候間、何事をも聞可致參上候處、愚老煩今少見合申事候、連々被添御心之由、忝儀存程不得申候、愚老儀者明日をも不可期躰候、薩摩守事、弥無御見捨、諸事被加御意見、忝家相續候様ニ御入魂所仰候、老後別存儀無之候、將又御帷子十・太刀一腰・御馬一疋銀子三十、御帷子十内單物五進覽之候、聊表御祝儀計候、猶委細之段者伊勢兵部少輔へ申合候間、可得貴意候、恐惶謹言、

「元和ノ初比」

六月十六日

嶋津兵庫入道  
惟新

本多上野介殿

人々御中

1362

「家久公御譜中」

「正文在琉球國文庫」

爲當年之嘉祥預御使、殊種々贈給、芳情之至欣然々、

事候、平右衛門尉可令演說候、かしこ、  
「朱カキ」  
「元和二年」六月廿一日  
信尹

鹿兒嶋少將殿

「家久公御譜中ニ在リ」

1361

「義弘公御譜中ニ在リ」

猶以成敗之儀、福山にて可有之ニ相定申候、以上、

態啓上候、内々奉得御意候、科人之儀、流罪か死罪かの

兩条、死罪ニ相究申候、然者山之口之地頭申付候、「敗根掃部兵衛事也」彼地

爲見廻明日罷越候間、於中途成敗有之事候、爲御心得申

上候、誠惶敬白、

「朱カキ」

「元和二」

六月廿七日

陸奥守  
家久(花押)

進上

惟新様

「此元和二年ハ非也、慶長十九年ニ別記ス、參考ニ供ス、御譜ハ元和

二年トス」



仍日本別而靜謐、其國之樣狀想像計也、猶使者讓演說不能詳、恐惶不宣、

〔朱カキ〕  
〔元和二年〕六月晦日

少將家久(花押)

進獻 中山王

1363 〔義弘公御譜中〕

元和二年七月二日、越山于鷹島、投宿於和泉屋鹽津九右衛門之宅、翌日應陸奥守殿之招入茶屋、所相從于我之者島津下野守・比志嶋紀伊守・小幡長門守・河野猪右衛門入道・了齊・道甫也、今度陸奥守殿獲寶刀大小、刀治工兼光、脇指治工國光也、

同月四日、借屋形之數寄屋、進苦茗於陸奥守殿、供奉之士比志嶋紀伊守・伊勢大隅守・三原左衛門尉・伊集院肥前入道・小幡長門守・河野猪右衛門入道・奥山左近將監・了齊・道甫也、

元和二年七月六日、鷹島留滯之際、聞本多佐渡守殿死去之訃音、贈書簡及香奩白銀拾枚、渡山田民部少輔也、今日歸加治木也、

元和二年七月三日、從御奉行有被扶持翁久之書寫、左記之、

1365

嶋津陸奥守殿家中北郷讚岐殿證人長千代殿ニ、先年御親父讚岐守殿へ被下候御扶持方之員數、程百五拾人候、被下候へハ、長千代殿内衆手形を以、逗留中辰ノ五月廿日より毎月可被相渡者也、

已上

元和貳年  
辰ノ七月三日

伊喜之介

土大炊助

安對馬

酒備後

松下善一殿

參

1366

〔古御文書二十三卷中〕

(本文書ハ一三八八号文書ト同文ニノキ省略ス)

1367

〔家久公御譜中〕

〔正文在大野正右衛門〕

1364 〔北郷翁久譜中 幼名長 千代〕

覚

一川之流まへり、或ハ洩之上、或ハ河きはのきしのうへに有之田畠、漸々ニ崩かゝり候而川成之所、當時難被見究所ハ川はたより二間欵三間欵曳除、さほを入候而可被相賦候、次第ニ崩候而、後日者残ましき地たりといふ共、過分之用捨有ましく候、又後年可被見せ事、一川成之儀、所により去春檢者被相立候、たとへハ一反之内三畦川に成、七畦ハ殘候由雖被究置候、又今度其殘地皆川に成、又者少殘候ハん所も可有之候間、先々究候、此度之付分可難成之由候、然時者先之究者差捨今度念を入可被相改候事、

一門屋敷近邊之山野之内ニ、仕明之山畑等可有之候、是ハ可爲領主次第候、乍去門屋敷之内にも、田方之仕明并さほ<sup>「ハツレ」</sup>迎等於有之ハ、可被付出候、勿論浮免之内ニ可有之田畠之さははつれ、或ハ開地、あるいハ川はたなとに田に可罷成所ハ可被相記事、

元和二年八月廿六日

兵部少輔

紀伊守判

勝兵衛判

1368 爲重陽賀儀、小袖五到來、欣覚候、委曲本多上野介可申候也、

<sup>「朱カキ」</sup>

「元和二年」九月七日 <sup>（秀忠）</sup>（花押）

薩广少將殿

「家久公御譜中ニ在リ」

1369

「御文庫四拾八番箱中」

（本文書ハ一〇四二号文書ト同文ニノキ者略之）

1370

「家久公御譜中」

先是六月七日、本多佐渡守正信卒、訃至則家久以使者爲香典白銀百葉贈之、正純辭以不受、其旨詳正純之書矣、

1371

「古御文書廿三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

佐渡守就被相果候、從嶋津陸奥守様御使者御下被成、爲香典銀子百枚送被下候、誠遠路被人御念忝奉存候、併何方之も留置不申候間、則返進仕候、陸奥守様へ者態御返事不申上候、能様ニ被仰上頼入存候、恐々謹言、

<sup>「朱カキ」</sup>  
「元和二年」

本多上野介

九月十二日  
伊勢兵部少輔殿

正純(花押)

1372 「光久公御譜中」

光久

忠朗

初忠平 忠明 又八郎 兵庫

元和二年丙辰十一月七日誕生、母家臣鎌田政重女、  
延寶四年丙辰二月十六日死、法号桀岑自英大居士、

子孫記于別紙、

1373 「義弘公御譜中」

元和二年十一月十五日、爲鷹狩到谷山、今日十九直往麿  
島、去七日達孫子誕生之祝詞、以樽酒五荷・折三合進陸  
奥守殿、以太刀一腰・馬一匹毛、青銅三千匹進新誕孫子、  
以樽酒二荷・折一合進東丸、此時以太刀一腰・馬一匹・  
青銅五千匹、陸奥守殿進于我也、

1374 「御文庫二番箱家久公二卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

追而申入候、仍江戸へ之御質人之事、先度も以書狀申入  
候、無御由断早々御指上せ御尤存候、尚御使者へ申談候、  
恐惶謹言、

「元和二年」

霜月廿六日

山口駿河守

直友(花押)

奥州様

參人御中

1375 「家久公御譜中」

如今茲歲晚、家久欲至于江府而越年之處、先降 鈞命、  
許在國而至明年初夏而參府、因以比志嶋宮内少輔國隆爲  
使節、就本多正純奉謝 命忝、則甚愜 尊意、其趣見于  
正純之書矣、

1376 「御文庫二番箱家久公二卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

貴札致拜見候、仍内々當暮爲御越年、此地御下可被成与  
思召候處、其許緩々与御在國可被成之旨被仰出候儀、御  
玆重思召之由奉存其旨候、就其爲御札以比志嶋宮内少輔  
被仰上候、何茂被示下候御紙面之通懇申上候処、大御  
所様御時ニ不相替、弥御如在不被爲 思召之旨被成 御

1378

『兒玉筑後譜中』

元和二年丙辰十二月初、朝鮮之役也、利昌自畿往有軍勞、至是二十一日、自陳闕閱求復蒙 恩、國老以聞 公、

1377

『御文庫三番箱中』 『家久公御譜中ニ在リ』

竹心香一裹到來、悦覚候、猶本多上野介可申候也、

〔朱カキ〕 『元和二年』 十二月七日 (花押) (秀忠)

薩摩少將殿

意、不大形御懇之儀共御座候、然者其許遠路海陸与申、殊二三月迄者風時御座候間、來春も緩々と其地ニ御座候而、四月中ニ江戸迄御下着候様ニと被 仰出、御前殘所無御座御仕合御座候間、御珍重可思召候、尚此方之儀、於拙者何様共御無沙汰不奉存候、然而此表相替儀無御座候、爰許相應之御用可被仰付候、不可存疎略候、委細之段ハ比志嶋宮内少輔殿可被仰上候間、不能詳候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕 『元和二年』

十二月六日

嶋津陸奥守様

貴報

本多上野介

正純(花押)

1379

『兒玉氏家藏』

公甚嘉之、

覺

一高麗から嶋へ 御兩殿様御在陳之刻、文祿四年六月、

自力ニ而罷渡、同五年七月、御暇被成下歸朝仕候事、

一高麗奥入之刻、慶長元年之七月、主從七人并六反帆老

艘、船頭・水手八人、自力自船仕候、其上國府衆岩切

与兵衛殿・山崎少兵衛殿主從七人、右船ニ相乘申候、

其刻奥入ニ付、久見崎・京泊方賃船ニ而人衆被相渡候、

然者右兩人乘船無之候間、船賃一錢茂不被下相乘申候、

高麗江參着申候、其節新納孫右衛門殿船奉行之故、存

知ニ而候、

右之様子、可然之様ニ御披露奉頼候、以上、

兒玉筑後守(花押) (利昌)

元和二年十二月廿一日

1380

『飯野西方寺阿彌陀棟札』

奉再興阿彌陀堂一宇云々、

大檀那藤原家久公、大願主同氏義弘朝臣

元和二年丙辰十二月廿七日

宝樹院當住大法師光清  
當地頭  
伊集院源左衛門尉久洪

1381 「家久公御譜中」

元和三年正月下旬、家久爲述職發廳府而赴于武都、家老伊勢貞昌從駕、此外供奉之大小臣不詳二月、至于大坂又至洛陽據近衛殿下、而奉窺宸襟、則甚愜。叙慮、因后降號遠鴈名琴及熏而賜之、家久珍戴百拜、而奉謝有餘、抑於彼琴傳以爲家寶事見左書矣、

同年二月十四日、本多正純・安藤重信贈奉書於家久曰、先年所賜之領分之御朱印并奉行人之書記領内郡郷之策可出之、若如無奉行人之書、以檢地之策郡及高細記、而可獻上云云、竊考、先是家康公於島津家賜國郡、慶長十四年、感賞家久征伐琉球之捷功、而乃賜其國、御墨印之外無之、奉書文句不論、有無諸家一統執達乎、右奉書無花押、有家久之答案、則又奚疑、秀忠公所賜之御判物、不曾見、疑此時事繁多而未遂改替之功者、

1382 「正文在文庫」

懇申入候、仍先年御拜領被成候御領分之御朱印、可被進之旨被仰出候間、此以前從奉行衆之書出并御領分郷付

1383

之帳を御添候て、慥成仁ニ早々御越可被成候、若奉行衆書出無之候ハ、其許御檢地之帳面ニ而、高辻又郡付をも懇ニ御書付候て御越可被成候、恐々謹言、

「朱力キ」二月十四日  
本田上野守

安藤帶刀長

鳴津陸奥守殿

「家久公御譜中ニ在リ」

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

猶々すこしもあまり候ましく候、く、かしこ、きん中様よりとふかりと申候御ことをはいりう申候、ミことなる事、中く申はかりなく候、ふくろはこにいたるまで申へきやうなく候、御たき物もはいりやう申候、かやうの事ハためしあるまじきよし申候事候、まことにありかたき事共にて候、やかてくたり候て見せ可申候、ふくしゆとのいつれもく御ゆかし候、いつとなくあ候事候、又々かしこ、

「朱力キ」三月一日  
ふしミより

中

いゑ久

1384

「古御文書廿三卷中」  
〔本文書ハ一三八八号文書ト同文ニノキ行略ス〕

兒玉筑後守殿〔利吉〕  
御宿所

1385

「義弘公御譜中」

元和三年丁巳三月十一日、陸奥守殿首途於廳島赴於京都、于時以書簡一通・太刀一腰・馬・縞珍十端贈本多上野守殿、以書簡一通・太刀・馬代白銀十葉贈土井大炊頭殿、又福島左衛門大夫殿・寺澤志摩守殿・立花左近大夫殿亦贈書簡矣、贈琉球燒酒一壺於荒木十左衛門尉殿也、

1387

「家久公御譜中」

如伴天連宗門先禁、猶以可守之、如黑船・以幾里須船者如崎陽可遣之、於領内不可賣買旨、秀忠公之命、安藤重信・土井利勝・酒井忠利・本多正純・酒井忠世、去年八月八日贈家久連署之奉書、今茲二月十一日爲後證、家久裏加花押爲一軸傳後裔、如左、

1386

已上

先年高麗へ御人數御進之時分、自船にて人衆なと被乗せ渡海之由、尤忠節無餘儀候、就夫御加恩之儀御侘之旨、遂披露候、此節雖可被仰付候、御知行相迫候之間、以時分可有御加増之由御意候、爲後日一筆如茲候、恐々謹言、

1388

「正文在文庫」

追而唐船之儀者何方へ着候とも、船主次第商買可仕之旨被仰出候、以上、

急度申入候、仍伴天連門徒之儀堅御停止之旨、先年相國様被仰出之上者弥被存其旨、下々百姓已下ニ到迄、彼宗門無之様ニ可被入御念候、將亦黒船・いきりす舟之儀者右之宗躰ニ候間、到御領分ニ着岸候共、長崎平戸へ被遣、於御領内賣買不仕様ニ尤候、此旨依 上意如斯候、恐々謹言、

元和三年

三月十一日

比志嶋紀伊守

國貞(花押)

伊勢兵部少輔

貞昌(花押)

町田圖書頭

久幸(花押)

〔朱カキ〕  
「元和三年」 二年ナラン  
八月八日

安藤對馬守  
重信(花押)

1390

「草案」

(本文書ハ一三八九号文書ト同文ニノテ省略ス)

1391

「家久公御譜中」

有馬丹波重純者奉仕家久能守忠貞、故家久至其没詠六首和歌、而褒渠之在世之志、且祈渠之菩提、嗚呼仁君之情惠及於屍、況於生前乎、其情見于和歌矣、

1392

「在正文有馬次右衛門」

有馬丹波あはれなるかな、うりのえたにたえかたきことの葉とそなれり、世にありし時ハつかふるに道を一すちにしてふたつ心なかりければ、事君能致其身といへる、古語を歌の上にして六首をつゝり手向ぬれと、猶残りありし筆もかきりとそなりけらし、

しらま弓やたけこころのひとすちに弥陀のおしへもふたつあらしな

雲となりけふりとときえしとりへ野のくさ葉もしける露なみたかな

後のよをてらすまことのもし火にむかはゝのりのはなもひらけん

1389

「御文庫廿三番十八卷中家久公御案文」

「在裏」  
此御觸狀、爲後證成一軸置者也、

元和三年三月十一日

家久(花押)

鳴津陸奥守殿

土井大炊助  
利勝(花押)

酒井備後守  
忠利(花押)

本多上野介  
正純(花押)

酒井雅樂頭  
忠世(花押)

二月 御狀、一昨十一日到來、遂披見候、然者分國中之高井郡付懸仕可致進上之由、得其意候、則申付候間、出來次第差上可申候、細々其節可得御意候間、不能詳候、

恐惶、

「朱カキ」

「元和三年」三月十三日

本多上野介殿

安藤帯刀長殿

御報

「家久公御譜中ニ在リ」

1394

「家久公御譜中」

訃音落耳淚沾衣 別後誰人不恨歸 一夢芳聲垂百代 忠  
臣如此古今稀

景親再拜

1395

『兒玉氏譜中利貞傳』

元和三年丁巳三月初、兒玉氏宗子肥後守利延等事 大翁  
公、而旁族四郎兵衛等事 梅岳君、君乃生 大中公、  
公及 君俱以德懷衆、國勢日盛以至 慈眼公、故四郎兵  
衛之後亦得賴其威恩興家於廳府、因今利昌有寵於 公、

639

1393

「家久公御譜中」

「正文在有馬次右衛門」

有馬丹波重純者平生以忠信事君始終如一、數年於朝鮮・  
琉球之國侍駕遠征、寒暄芳 答盡心不改、于時元和歲在  
戊午暮春之初、不幸而物故矣、於是 相公聖君哀之、詠  
冠于事君能致其身六字於和歌之首、以吊焉、予在其列、  
素得愛誼謹、隨 尊命聊賦一絕附吊云、

「朱書ニテ」  
「元和三年二月十五日」

家久

ちりつくす花のこす糸のほととぎすしのふにたえぬ啼ね  
ならまし  
苔のしたとふもうらめしあはれ世にいつゝの十はゆめか  
うつゝか  
白雲のはるゝ眞如の月や日にめぐりてたえぬ光とをしれ

「正文在琉球國司」

覚

一 江洲之知行被召上候、其納方被相添候而江洲へ可被返  
進候事、

一 津賢之知行永代被召離候事、

一 越來与津賢同役之義ニ付、越來之知行先以被召上候事、

一 江洲之子息をへす、此中遠島之由候、早速可被召歸事、

付本領可爲安堵事、

一 津賢口事篇ニ付、御暖之御條書之儀、御判今度者御上

洛前ニテ不罷成候間、御下國之刻被成御判、佐敷歸國

之節可被相渡事、

元和三年巳三月廿三日

比志嶋紀伊守(花押)

町田圖書頭(花押)



方居顯要如夫宗氏、乃大翁公遜位之後、隱跡顯娃而列  
邑士、門望稍微、以故利貞傳事利詮、身既爲僧、然家所

世藏系圖猶傳藏之、於是乎及利詮等謀以爲、方今與宗、

則莫如授系圖於利昌傳之宗職以光家門也、乃遂是月二十

三日、利貞手書、使山口主馬介齋傳諸利昌永爲宗職、因

昇青銅千匹以駕焉、

1396 『兒玉氏家藏』

猶以申入候、此方へ御禮義など無用にて候、いかさ

ま愚も其地へ今一度可致參上候間、其時分ニ何篇可

申承候、又使之仁者日向高岡之衆中也、山口主馬介

与申候、我等遠類也、

態以忤人令申候、然者先書ニ委敷申越候様ニ、兒玉之惣

領系圖を從先祖相傳置候を、貴殿へ可相渡存事候間、持

せ候て進入候、其元へも御座候由承候得共、此卷物か可

爲本々之由を代々申來候条、貴殿へ召置候而可然候、委

細之様子へ以面談可申達也、隨而鳥目拾貫少分ニ候得共、

系圖ニ相添候て進入候、祝儀迄之物也、無辭退御請取目

出度候、又へ新四郎殿名乘不存候而、繼圖ニも不相續候、

重而談合可申候、乍去先祖之名乗之字を見合、其字ニ不

指合候を二ツ三ツ韻鏡かへし仕候而書付遣候、其内を御  
覽被成、可然を一ツ名乗尤ニ存事候、彼是御使之仁へ申

合候、恐々謹言、

『元和三年』

巳三月廿三日

利昌  
兒玉筑後守殿  
人々御中

正龍寺

利貞(花押)  
『文臣也』

1397 『家久公御譜中』

同年三月二十五日、秀忠公以土井利勝賜枝柿一匣於家

久、家久奉拜謝之后、遙贈進老家君惟新、孝養之情可見

矣、

1398 『御文庫四拾八番箱中』「家久公御譜中ニ在之」

追而申上候、只今從將軍様土井大炊助殿御使ニ而、枝

柿一箱拜領仕候間、則致進上候、可被成御賞翫候、先書

ニ如申上候、去廿日ニ茂大炊助殿爲御使御來儀候、又々

無程如此御座候儀、不存寄仕合、誠忝儀令満足候、猶細

々期後音之時候、誠惶誠恐敬白、

『朱カキ』  
『元和三年』

三月廿五日

陸奥守

家久(花押)

進上 惟新様

「元和三年ト張札アリ」

1399

「家久公御譜中」

去年家久生男子、後稱光久、乃聞中山、以隔數百里之海程、故至于茲、王尚寧捧壽書翰進上祝物事、見于書中矣、

1400

「古御文書廿三卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

態呈愚翰、今度忝復御繁采之由、千祥万喜至祝珍重、尤早々可伸御祝儀處、遠路之故延引、背本懷候、然者如被仰下、佐敷令致上國候、諸篇爰元之御置目等可被「本マ、一」役付候者、万幸々々、隨而不腆之祝物錄于別楮、尚委曲御使節上國之刻可申伸之条、闕筆而已、誠恐誠惶不宣、

「朱カキ」

「元和三年」 季春廿六日

中山王(花押)

進上

羽林家久公

進上 羽林家久公

中山王

琉球國

1401

「義弘公御譜中」

元和三年丁巳四月二日、琉球國中山王使節佐敷王子・與那城王子來于加治木、而先備於勅書及薄芭蕉布廿端・油樽二箇・燒酒二壺曰、年首祝禮也、次備於勅書及金盞・銀臺・紗五端・赤苧布五端・鳥盆五束・燒酒二壺曰、孫子誕生祝儀也、又備白銀廿枚・燒酒一壺曰、質人赦免謝禮也、而後兩使已下備進物畢、有饗應也、

1402

「家久公御譜中」

同年五月、家久爲拜 東照大權現宮、出江都赴日光山、此時供奉大小臣以無其記、故不可知、乃發駕之前、本多正純以夜衣・蚊帳・乘馬等贈之、家久受之、則以使書謝之、既而家久於行路中每遇佳景多詠和歌、黑神山亦入其詠矣、

1403

「正文在島津左衛門久道」

返々其よしたん正とのへも申度候、くく、かしこ、せんと申候やうに、日光の御ひまもやかてあき可申候まゝ、御いとまたるへく候、こゝ元かハる事なく候、新さうくさそさひしくなり候らんと、あさ夕思ひやるはかりにて候、むもしきたためて其方へまいり候らん、おもひ

候事候、やかてくたり可申候まゝ、御心やすくおほし候へく候、いつそうけ給候儀、兵部少へ大かた申候、心やすかるへく候、さやうの事を申候人もとくしれ申候、いまにはしめざる事にて候、やかて參候て申へく候、又々、かしこ、

「朱カキ」  
「元和三年」

卯月十八日

中納言

たん正との  
むもし  
まいる

いゑ久

「家人公寛永三年八月中納言ニ任せラル、元和三年ハ誤ナルヘシ」

1404 「御文庫拾六番箱十二卷中」

奥州様今日京都被成御打立候、天氣能御座候而、目出度奉存候、自江戸追付御吉左右可申上候、公方様茂日光へ被成 御成、昨日十七御遷宮御座候而、如江戸被成 還御、六月二日ニ者必御上洛之由申候間、奥州様御事、江戸へ御逗留御座有間敷由候、將又中上石見事、奥州様此元御打立見申候而、可罷下由候而被召留候、巨細者彼方可被申上候、次去年 惟新様御不例氣ニ御座候時分、

愛宕へ小百味三座御立願申候、今度百味備申候而、百味箱三進上申候間、可然様可預御披露候、恐々謹言、

卯月十八日

伊勢兵部少輔

貞昌(花押)

南郷淡路守殿

1405 「古御文書廿三卷中」「家人公御譜中ニ在リ」

返々先日者御懇情之義共難申盡候、

今度者切々得御意忝存候、先々天氣能御座候而玆重ニ奉存候、江戸ニ而之御仕合も殘所御座有間敷と奉察候、猶御上洛之刻可申候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「元和三年」

卯月廿一日

西洞院少納言

時直

嶋奥州様

人々御中

1406 「本田助之丞藏」

七分出銀請取之事

高百石分

合銀子七拾目ハ

皆濟

以上

元和三年四月廿六日

古川李兵衛(花押)

隈元和泉守〇(印)

鬼塚甚五左衛門尉

脇元權介殿

参

1407

爲端午之佳義、帷子・單物數十到來、悦覚候、猶本多上野介可申候也、

五月二日 (秀忠)(花押)

薩摩

少將殿

1408

「古御文書廿三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

尊札拜見、忝奉存候、仍今度日光へ御登山被成候付而、御馬・御夜物・御蚊屋致進上候之處ニ、御珍重被思召之由、御使札忝奉存候、何も此地御歸路之刻致伺公、万々可得尊意候間、不能一二候、恐惶謹言、

「朱力半」  
「元和三年」五月九日

正純(花押)

本多上野介

「口裏ニアリ」

鳴津陸奥守様

尊報

正純

1409

「古御文書廿三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

公方様江爲端午之御祝儀、御帷子被成御進上候之處ニ、御内書被進候之間、則進申候、恐々謹言、

「朱力半」  
「元和三年」

五月十六日

本多上野介

正純(花押)

鳴津陸奥守殿

1410

「家久公御譜中」

同年六月二日、家久應徵登營、則賜御饗應、其后於秀忠公之御前蒙御懇之台命、而賜先公上洛之暇、加之正宗脇刀有行平太刀號矢目星鹿毛駿馬二疋一者號八塚、東國第一之逸物也亦拜戴之、而退出、則直御老中之第宅僉訪之、奉謝今日之忝、歸芝第而馳使於本邦告老父惟新、既而同八日、辭江府經岐嶺路、同中旬至伏見矣、

1411

「御文庫二番箱家久公二卷中」

「口裏ニ」

鳴奥州様

御報

本多上野介

以上

尊墨拜見、忝奉存候、仍今日者於 御前御仕合能、其上銘々正宗御脇指・行平之御太刀矢目并御馬二疋色々被爲進之、御懇切之御様子、御外実共ニ御珍重可被思召と奉察存候、誠殘所無御座御仕合、千万目出度奉存候、然ハ先刻如申上候、爲御礼各迄御出被成候由、奉得其意御尤御座候、何も令期後音之時候間、不能一二候、恐惶謹言、  
〔朱力キ〕  
〔元和三年〕六月二日 正純(花押)  
〔家久公御譜中ニ在リ〕

1412 「家久公御譜中」

尚くやつつか御馬之義、万事くせなとも無御座候、其御心得御尤候、以上、

御懇札忝披見仕候、鳴津殿拜領之儀候八像之御馬、則我等預カリ申候、今朝本多上野殿參候へハ、鳴津殿御出被成候而様子具申上候、是ハ各御存知之ことく、一段御秘藏之御馬ニテ、別而入御念我等御預ケ被成候、加毛ひた殿方あかり申候御馬にて候、一段はや馬ニ御座候間、其御心得可被成候、口むきも一段よく御座候、何も期面上御時候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
〔元和三年〕六月三日

重正(花押)

加勘助

妻吉左様

御報

1413 「家久公御譜中」

〔正文在上町林道列〕

已上

其後者不得御意候、仍去二日於 殿中御振舞御座候、  
直ニハ 忝 御詫共候而御暇被下、剩行平之御太刀・正宗之御脇さし・御馬二疋、内一疋八つかと申馬致拜領候、誠々外聞実儀忝次第、筆舌ニ難申伸候、今度者其表人こミの由申候間、木曾通仕候、御上洛御供之由候条、於上方可得貴意候、恐惶謹言、  
〔朱力キ〕  
〔元和三年六月〕 七日 津陸奥守 家久(花押)

松平河内守様  
人々御中

1414 「家久公御譜中」

「正文在文庫」

尚々明日八日江戸打立候而令上洛候間、惟新様へ此  
由可被申上候、御暇之様子者先日申上候、爰元打立  
之日限未申上候条、可被得其意候、以上、

此方爲見廻、遠路へ使者被差越令祝着候、仍去二日御暇  
被下、名物之御太刀・御脇さし并逸物之御馬二疋拜領、  
其外忝御誼共於仕合者無所殘候間、可安心候、將又昨日  
六日又四郎此地越着候条、長千代事急度可爲歸國候、次  
爲音信、銀子五枚到來、不謂儀候、猶使者へ申含候、謹  
言、

「朱力半」  
「元和三年」六月七日

北郷讚岐守殿

家久(花押)

1415

「北郷翁久譜中」

元和三年丁巳六月十二日、登 城拜謁 秀忠公、献上御  
太刀・馬代、拜領單物五・帷子五・太刀・御馬・御羽織  
一、同七月賜暇、而歸國矣、

1416

『在吉松内小野寺』

一加久藤西鄉村之内知行名寄帳天蘭屋敷

元和三年

六月十五日

秀眞坊

加治木

御支配所印

1417

『全』

一中津川吉松吉松門知行名寄帳

元和三年

六月十五日印

加治木

御支配所印

1418

『全』

一吉松中津川村之内松蘭屋敷

元和六年三月十九日

上原大藏太輔印

秀眞坊

1419

「古御文書廿四卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

返々本上州迄被遣之由候、別而過分之義候、

此兩種玆看被思召寄被送下候、則賞翫無他候、爰元海邊  
遠路今程生味、寄特之義感悦仕候、何様後顔節可申謝候、

恐々謹言、

「朱力半」  
「元和三年」七月九日

(西洞院)  
時慶

島奥州様人へ

西遠  
時慶

「義弘公御譜中ニ在リ」

去月二日之御書、今月八日到來、畏而拜見仕候、然者其許御無事ニ御座候由、先以目出度奉存候、

一 公方様御參 内、益過申候者可在之由、取沙汰御座候へ共未相知候、何れ共御參 内過申候者、我々下向之儀茂可相知かと存候、委細追而可申入候、

一 七夕ニ茂致 御目見得候、一段御仕合能御座候、可安御心候、

一 爰元諸大名着相にて人こミニ御座候へとも、御法度稱被 仰出ニ付、一段無事之躰ニ候、世上弥靜謐ニ御座候、爲御心得候、

一 東丸之姫不例ニ御座候哉、就其鹿兒嶋へ被成御越、御逗留養生之儀被入御精候故、無吳儀快氣仕候由、鹿兒島方も懇ニ申上せ候、萬々目出度存候、

一 貴翁様ちと御煩敷御座候哉、然共早速御本服之由、目出度奉存候、右之様子ニ御座候処、鹿兒島へ被成御越、御辛勞誠々忝儀存程、紙面ニ難申盡候、

一 椎葉山之儀委細得其意候、於爰元御年寄迄有筋粗申入候、爲御心得候、

一 串湊江唐船雖着岸候、破艘仕候由笑止之儀候、定其後打續着津候へんと存候、追々様子可承候、

一 江戸も茂一兩日已前到來御座候、妹めい一段無事之由候、可安御心候、

一 國元諸置目之儀、別而被入御念被仰付由、是又大慶之至候、彌無別儀每事被仰付可爲本望候、委曲期後音不能詳候、誠惶誠恐敬白、

「朱力キ」

「元和三年」

七月十日

陸奥守

家久(花押)

進上 惟新様

1421 「家久公御譜中」

元和三年七月七日、於伏見城有猿樂之能、因 台命東西侯伯伺候、而觀覽之、家久在于其中、時以條書令法度、乃以其條書進呈老家君惟新、而擴國中矣、

1422 「正文在文庫」

已上

先書ニ如申上候、若用もや御坐候と存、大學坊留置申候

へ共、別ニ子細も無之候間先差下申候、仍從懸川局此方迄被遣候間、則吉田九郎右衛門尉大學坊相付下申候、別

ニ從懸川様子も無御座候、將又此表之儀、此中同篇之躰

ニ候、次去七日於伏見御能爲見物、各諸大名祇候候、我

々も罷出候刻、御法度條々被 仰出候、其御条書進獻之

仕候、京中にも種々被 仰出候由候而、下々取沙汰申事

ニ候、猶大學坊へ申合候条、不能書載候、誠惶敬白、

「朱カキ」  
「元和三年」

七月十日

陸奥守

家久(花押)

進上

惟新様

九月十日晴天

一 隅州様 於嘉久様、小野村菌田清左衛門殿格護之聖之

宮江被遊 御參詣之間、左候而新上橋々小野村境迄之

道普請之儀、今日小野村庄屋衆々被申出候付、荒田・

中村・郡元・武村・田上・西別府・西田・原良・永吉

・草牟田・下伊敷村・坂元・下田・吉野・花棚・川上

・岡之原村へ新上橋々小野村境迄之間、各請取之場所

有之、各明朝五ツ時方内ニ危所取繕、道普請相調直候、

在番所江首尾可被申出旨右名中へ申渡也、

右寶曆八年寅九月十日、宿次在番所日帳之内に書寫、

小野村當菌田清左衛門殿江承候處、右聖之宮祭之事、

毎年十一月廿一日之由、右之日者聖誕日ニ而候由、

夫故、聖ハ孔夫子之祭礼ならん、

「御文庫三番箱四卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

家中衆へ可申聞條々

一 世上太平ニ在之故、公方様御前之様子、其外諸侍着

合之躰、從前々茂以之外花麗ニ成候事、

一 江戸諸大名之屋形、皆々結構ニ被調候、當 公方様御

行儀たゞしく被成 御座、御法度つよく被 仰付故、

大名・小名少茂油断無之躰ニ候間、國之役儀於無沙汰

者、可及氣遣候、

一 諸大名内衆、馬・鞍・衣裳等、寄麗ニ在之事、

一 借銀過分ニ成行候之事、

一 從來年、毎年之可爲在江戸事、

右之條々、不輕始末候處、在國之衆それ程ニも不存、

無氣遣可送月日事、笑止ニ候、右之条目、ひとつと

して銀子不入事無之、就其借銀過分ニ成候、江戸屋



形作、又來春上洛之調茂借銀ならてハ相調間敷候、

此返弁之儀、諸侍以出物可弁濟候、然者毎年之出物

未進之衆在之而、諸人之覺ニも不成、銀子茂過分ニ

不足候事、雖曲事深重候、知行可召上儀、餘依痛入

ニ、何とそ可相調欵と數年遠慮のミにて押移候得共、

其遠慮故、手前之出物相勲衆茂、未進之者を見合、

致遅々事眼前候、世上之様を見及候分者用捨にてハ、

家之相續可難成候、我等毎年凌波濤、數百里之関東

へ參候之事茂爲國家ニ而在之事ニ候之処、家中衆奉

公無沙汰之輩故、及家之滅却候ハん事、無念之次第

ニ候之間、自今已後者、出物未進衆、不依大身少身

知行可召上候、如此申出ニ付諸人茂驚、我与耕作を

も仕、妻子をも可養、可致分別事、肝要ニ候へ共、

國之慣にて、離知行候日迄者、緩々与押移、可及迷

惑事不便ニ候、就中分限之衆相模守・牛菊・下野守

・北郷讚岐守・北郷加賀守などの衆、人之手本ニ成

候様ニ被申付、家之奉公尤たるへく候、若於油断者、

用捨在之間敷候条、諸侍同前ニ此由堅可申渡者也、

元和三年七月十二日 家久(花押)

三原諸右衛門殿

比志島紀伊守殿

町田圖書頭殿

「末紙ニ家久公御條書、大坂御談合已後トアリ」

「此正文糺合ス」

1425

「家久公御譜中」

同年七月十七日、板倉勝重贈書於家久曰、大樹秀忠公

御參内、二十一日也、爲得意告知云云、

1426

「古御文書廿四卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以巨少ニ御座候へ共、本眞桑ニ而御座候間、爪一

箱進上申候、御賞味忝可奉存候、以上、

尊札忝致拜見候、仍御霍亂氣御快氣之由、目出度奉存候、

然者一昨日御上使被進候付而、爲御礼明日御登城可被成

之由御尤御座候、然而御參内御日限之儀被仰下候、來

廿一日ニ而御座候間、内々其御意得被成、御供被成御尤ニ

御座候、何も此地御座被成候節、期拜願可得尊意候之間、

書中不能一二候、恐惶謹言、

「朱カキ」

「元和三年」

七月十七日

本多上野介

正純(花押)

鳴津陸奥守様  
尊報

1427

「古御文書廿四卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

尚以 公方様より御使まいり候由、目出珍重奉存候、  
御羈亂氣よくく御養生、御出仕可然奉存候、猶重  
而以書面萬事可得尊意存申候、

如貴札此間者不得貴意、無音背本意存候、然者御羈亂氣  
之由不存、以書狀不申上候、申迄無御座候得共、無御油  
断御養生肝要ニ奉存候、將又御參 内之儀、弥廿一日ニ  
相極申候条、可被成其御心得候、猶追而可申上候間不能  
具候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「元和三年」

七月十七日

板倉伊賀守  
勝重(花押)

鳴津陸奥守様

貴報

1428

「家久公御譜中」

同年七月十八日、家久登 營伏  
口手任宰相兼左近衛權中將且賜吉光之寶刀、拜伏敬恭而退去、家  
久亦獻名刀品物、而奉謝 御志之忝、因口宣案及卿相雲

客諸侯伯等賀昇進之書、皆以列左方、

1429

「正文在文庫」

上卿 日野新大納言

元和三年七月十八日 宣旨

左近衛權中將藤原家久朝臣

宣任參議、

藏人頭右大辨藤原兼賢奉

「在口裏」  
口宣案

1430

「御文庫拾七番箱十九卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

猶々氏御名乘早御書付候て可被下候、口 宣可被相  
調候、已上、

鳴津陸奥守様今度宰相ニ被仰出候、只今申來候、珍重存  
候、氏御名乘被書付可被下候、口 宣相調可被進之旨ニ  
候、御參 内之儀ハ 將軍様御參内以後、重而一兩日之  
内ニ可然之旨被申候、此旨能く被相心得、御申入所仰候、  
恐々謹言、

「朱カキ」  
「元和三年」

七月十九日

速水安藝守  
■■■■(花押)

休甫老

速水長門守  
■(花押)

「御文庫二番箱家久公一卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

一書致啓上候、今朝者御使者被下忝存候、隨而昨日被成御登城候處、御仕合能御直ニ宰相ニ可被爲成之旨、上意之趣御外聞与申目出度存候、明後日之御用意相調申候哉、尤以參御悦可申入候へ共、先以使札申入候、猶以面御悦可申述候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「元和三年」

七月十九日

鳴津陸奥守様  
人々御中

福嶋左衛門大夫  
正則(花押)

「正文在文庫」

飛鳥井中將

「口裏ニ」  
嶋津宰相様

人々御中

雅胤

猶々公卿之指貫、定而御用意有間敷候間、則進上仕候、以上、

七月十九日

雅胤

昨日者伏見へ御越之由御大儀存候、隨而御昇進之旨承候、玆重奉存候、今日殿中へ罷出候條、明日以參可申入候、恐惶謹言、

「古御文書廿四卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

返々被入御念早々承候段、難申謝候、明日之義相應之事可承候間可被申入候、萬々御満足義候、直ニも雖可申入候、却而御繁多中ニ候間、貴殿迄令申候、

從是内々可申候處、少納言迄御狀御言傳本望候、先以奥州御昇進之義、昨日於伏見も承候、玆重之義大慶々々、此事候、昨夕歸京、無正躰草臥申候、怠慢遅引段、所存外ニ候、將又明日御參内、此邊ニて御裝束可被成かと存候處、宗善へ御出之由御殘多存候、萬々能々御傳達所

希候、謹言、

「朱カキ」  
「元和三年」七月廿日

時慶

休甫老

まいる

西洞宰

1434 「家久公御譜中」

同二十一日、大樹秀忠公參内、家久扈從矣、

1435 「正文在文庫」  
「口裏ニ」

鳴宰相様

人ニ御中

時直

昨日者御參内、無事、珍重ニ奉存候、別而今度者、貴殿様被任宰相、御満足奉察候、於下官大慶此事候、將又此看二色・諸白三荷表祝儀候、何も与風參上候而可得御意候、恐惶謹言、

七月廿二日

西洞少納言

時直

1436 「古御文書廿四卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

追而休甫迄令申候間、可申入候、

先刻者預御尋候、御懇意至候折節伏見へ罷越、不能芳顔千万々々、御殘多存候、殊更太刀一腰・馬一疋被懸御意候、過分義共ニ候、只今歸宅候條、先爲御礼如此候、何様貴面之節可申候間、不能詳候、恐々謹言、

「朱力キ」  
「元和三年」七月廿三日

時慶

島津陸奥守殿  
玉机下

時慶

1437 「御文庫二番箱家久公一卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

乍御報尊書拜見候、誠此度被任宰相之由、珍重奉存候、如何様与風遂參上可得御意候間、不能具候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
「元和三年」

七月廿五日

松平越中守

定綱(花押)

家久様

尊報

1438 「加世田土前田茂右衛門藏」

知行目錄

薩州加世田内山田村之内

高拾五石七升七合

田頭之屋敷

高貳石九斗五升三合浮免

合拾八石三升

右之地、應此中 公役之高被宛行畢、

元和三年七月廿五日

三原諸右衛門尉

伊勢兵部少輔

前田軍左衛門尉殿

比志嶋紀伊守□

町田圖書頭□

1439 「家久公御譜中」

同二十七日、

今上皇帝諱政仁後水尾院勅使西洞院少納言時直

後陽成院宸翰・御掛物一幅賜家久、珍戴百拜奉謝之、以

爲家寶矣、

1440 「正文在文庫三番箱四卷中ニ在リ」

此掛物 仙洞様宸翰、西洞院少納言殿爲 勅使、致拜領

訖、

元和三年七月廿七日

鳴津宰相(家久)

1441 「古御文書廿四卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

返々七日ニ者かならず、奉待候、

先刻者御返事忝奉存候、仍來七日晝、御茶申入度存候、

幸 仙洞御見廻ニ御出被成候義候間、必々被懸御意候者

可忝候、爲其如此候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「元和三年」

八月五日

西洞院少納言時直

1442 「家久公御譜中」

同年八月七日、家久爲奉窺

後陽成院御惱參

仙洞、其歸路應招入少納言時直之茶亭、在京師之間、日

參 仙洞奉窺 御惱、時時進獻亦有之、因 叡感之趣、

時直竊 傳此、時贈答之書皆以載左、

1443 「古御文書廿四卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

返々昨日者何之風情も無之候て無念ニ存候、

今朝者早々御使忝奉存候、則 仙洞へも申上候、御様躰

夜中者此中より散々あしく候つか、先程より御氣色も

御腫物之様躰も、此中より能御座候而御膳もあかり候間、

可御心易候、かやうの目出度事無御座候、猶拜面之刻可

得御意候、恐惶頓首、

鳴相公様  
人ニ御中

時直

1445

「古御文書廿四卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

追而御膳も頓而可上之由候間、目出度存候、今朝者  
暫御物語半時程も被成候、結句伺候之衆草卧申候由

「在口裏」  
嶋奥州様

人々御中

時直

「朱カキ」  
「元和三年」

八月九日

西洞院少納言  
時直

先刻御見廻之通御披露申上候へへ、切々御使之事、御感  
此事候、夜前二色も則進上仕候へへ、相心得可申入由候、  
今朝之御氣色・御脈一段よき通候、猶期貴面候、恐惶謹  
言、

1444

「古御文書廿四卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々御心も今日者よく御座候由、仰ニ候間、可御心  
易候、

嶋相公様

参人々御中

時直

「朱カキ」  
「元和三年」

八月八日

西洞院少納言  
時直

候、一咲く、

毎日御見舞之義御感ニ候、今朝御様躰第一氣相能御座候、  
其上驗氣事、三色四色在之様ニ仰ニ候、又御腫物之躰も  
腫上口より膿出申候、灸被成候間火氣被成御覚、暑候と  
て灸を被落候程ニ候、彼是以善左右共候間、此分ニ候者  
御別義有之間敷候、可被御心安候、恐々謹言、

「朱カキ」  
「元和三年」  
八月九日

時慶

1446

「古御文書廿四卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

嶋相公様

時慶

返々かの小本御持不可被成候、

仙洞御氣色一段よく御座候間、可御心易候、仍彼文字讀  
之事、其方様次第御出奉待候、何時ニ御座候へん哉、内  
ニ無相違可奉待候、御報所仰候、恐惶頓首、

「朱カキ」  
「元和三年」

八月十日

西洞院少納言  
時直

「在口裏」  
嶋相公様

人々御中

時直

「古御文書廿四卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

返々今朝之御使之通申上候、

院御所様弥御氣色能御座候間、可御心易候、晚ニ御透候者、昨夕之殘可仕候、但御指合候者、余所へ罷出候ハ人間、御返事ニ待入候、恐惶頓首、

「朱カキ」  
「元和三年」

八月十一日

西洞院少納言  
時直

鳴奥州様

人々御中

時直

「古御文書廿四卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

不可及返事候、悪書中躰憚入

態申入候、仍 院御所様今朝之御様躰、弥能御座候、第一御脈動數引和申候、御腫物者少あかり申候、又灸治針刺申候処、膿血出色も能相見申候、御肩も少輕様ニ被成御覚之旨被仰候間、可被御心安候、切々御見舞被成機遣候間、細々内々申入候、恐々謹言、

「朱カキ」  
「元和三年」

八月十一日

時慶

鳴相公様

時慶

「古御文書中在廿四卷」「家久公御譜中ニ在リ」

猶懸御目候而可得貴意候、

昨日者御酒をもしかゝ不申入、御殘多奉存候、仍 仙洞御氣色能御通ニ候間、可御心易候、晚程被成御出候ハ心由奉待候、恐惶頓首、

「朱カキ」  
「元和三年」

八月十三日

西洞院少納言  
時直

鳴相公様

人々御中

時直

「古御文書廿四卷中」

已上

今朝者可被成御光儀旨、先々御延引之由、得其意候、其許御透節奉待存候、先使札を以申入候、恐惶謹言、

松平宰相殿

人々御中

「朱カキ」  
「元和三年」

八月十八日

觀助

「古御文書廿四卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

切々肝煎之義候間、細々申入候、

昨日者被成御立候節、奥隙入申候而、御暇乞不申殘多存候、仍 院御所様御様躰、今曉葛之汁御茶碗ニ二三餘上、又赤小豆食御茶碗一上申候、御氣相も能、御脈躰今朝澁氣無之能御心ニ候由、延壽院も被申候、又御腫物之躰も口開心ニ候、針立申候御覺候、又灸治も御覺候て、火氣を後々者落申候間此分候、猶御吉左右可申入候、恐々謹言、

「朱カキ」  
「元和三年」 八月十九日

時慶

ノ 嶋相公様

西洞右衛門督

時慶

1452

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

返々女はう衆へこゝろへ申度候、くく、かしこ、

此文たん正とのへしんし候、このほとたひくくのふをいたし候、はなをわたし候事候、くまよりも御ゆるしにて「本々」おかしくこそ候へ、くたり候へ、のふをもよほし候へく候、たんもしもゆたん有ましく候、たうくなく一つも

まいり不申候間、こゝにてこしらへ申候事候、大ミヤウ

衆ののふもいづれも見申候、あまりかへりたる事も御入候ハす候、やかてくたり候て申候へく候、又々、かしこ、

「朱カキ」  
「元和三年」 八月廿四日

カ

たん正との  
むもし  
まいる  
いゑ久

「在包紙」

たん正との  
むもし  
まいる

いゑ久

1453

「家久公御譜中」

八月二十六日、

後陽成院崩御、因家久以可奉慰問 大樹公否之事、問本

多正純、則答書如左、

1454

「古御文書廿四卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

尊札拜見忝奉存候、如御紙面之、昨日者終日御伺公御苦勞之段、奉察存候、然者昨日 院御所様崩御被爲成候付



而、左様之通 公方様へ諸大名衆方被仰上候を、各慈〔本マ、ニ〕

可被仰上候之由奉存候、其旨候、諸大名衆方被仰上候者、其段可申進之候、其内ハ先々御延引可被成候、何も追而可得尊意候間、不能一二候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔元和三年〕 八月廿七日 本多上野介 正純(花押)

鳴津陸奥守様  
尊報

〔家久公御譜中〕

〔正文在琉球國司文庫〕

猶々唐墨十送給、不存寄御芳志不知所謝候、已上、

芳檄之趣令披見候、仍惟新事、去春中風煩出、于今無平愈候、老病之儀候間、心遣可被成御高察候、爲見廻遠路

之音聞怡悦之至候、委曲具志川申達不能詳候、恐惶不宣、

〔朱カキ〕  
〔元和三年〕 仲秋廿七日 宰相家久(花押)

進獻 中山王

〔義弘公御譜中ニ在リ〕

返々上方物能下向可仕候之条、卒進退之儀以來共奉

頼候、新不及申上候、已上、

任幸便奉遂言上候、然者拙子儀茂可致上京与存候折節、

相良殿山之衆以同心被召懸候、案外之仕合候、併拙子事對 天下様無緩怠儀候之間、可御心安候砌、御分國を心懸申候へ共、早々不届雜説共御坐候ニ付、先肥後表之様

ニ罷出堪忍仕候時分、大雪故雪燒ニ付、上京之儀茂不罷成候處ニ、御内那須主膳罷登候之事忝候、先ニ以御書物

申上候筋目、今以少も無別心候、拙子儀も 本上州様方罷登直ニ申上可然之由御意候間、可罷登覚悟候、上方仕合能相調下向之時分、具ニ可申上候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔元和三年〕 八月廿七日 那須久太郎 (花押)

鳴津兵庫守様參  
人ニ御中

1457 〔家久公御譜中〕

同年九月朔日、家久從 秀忠公賜松平之御稱號任薩摩守、時貞宗脇刀拜領之、家久亦獻寶刀品物、而奉謝之矣、